京都 剣鉾のまつり
調査報告書　2　民俗調査編

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編

京都 剣鉾のまつり

調査報告書 2 民俗調査編

表紙　『伊勢参宮名所図会』
裏表紙　『下御霊神社誌』

はじめに

祇園祭の山鉾巡行は、京都の夏に欠かせない風物である。その鉾と起源を同じくする、もうひとつの鉾の祭りがある。その鉾は、総称して剣鉾と呼ばれているが、その実態は明らかではなかった。

そもそも、剣鉾という語が京都においても、一般的ではなく、昭和六十年頃の京都市の調査の過程で総称として定着していったものである。地域での呼称は、あくまで菊や龍といった意匠を冠して呼ばれるものであった。しかし、稀ではあるが鉾の箱書等に、意匠に関わらず剣鉾と表記されていることがあり、近世から明治にかけて、剣先が菱型に尖った剣を掲げる鉾という、造形上の共通点が認識されてきたことは明らかである。

京都市が京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会を組織して、平成二十二年度から二十四年度にかけておこなった調査では、剣鉾そのものだけでなく、剣鉾を伴う祭礼行事の調査を、民俗学、民具学、文献史学その他の多角的な視点から調査し、その源流を探り、歴史的展開を明らかにし、剣鉾の定義についても再検討を試みた。その具体的な成果については、本書において明らかにしているところであるが、本書の活用にあたって、まずその要点について、示しておきたい。

剣鉾とは、単にその造形によるものではなく、祭礼行事と一体で理解すべきものである。剣鉾の本来の目的は、祇園祭と同じく、御霊信仰における呪具であり、高く掲げられた鉾先の剣が前後にしなることにより、輝くことで、周囲の悪霊を集め浄める役割がある。合わせて、リズミカルな音を響かす鈴や、たなびく吹散なども、呪具としての要素として付与されたものである。

もう一つ重要なことは、これも祇園祭と共通するところであるが、神社の祭具ではなく、鉾仲間もしくは鉾町といった、氏子地域のなかの有志の集団や地縁組織によって護持され、神輿の巡幸の先導を務めるということである。

このような典型的な「剣鉾のまつり」は、上御霊神社、下御霊神社、岡崎神社、須賀神社など、御霊をまつる神社に伝えられてきたが、その祭具としての華やかさが注目されて、京都の市中および京都近郊の村落にも広がっていった。いわば、「剣鉾のまつり」の再生産がなされていったのである。その勢いは京都周辺に止まらず、全国各地に伝播していったが、本来の剣鉾の在り方とは異なったもの、造形上の特徴のみが伝承されているものがほとんどである。

本書では、剣鉾および剣鉾の伴う祭りの全貌を明らかにするため、京都市内については、剣鉾と考えられてきたものについて、すべてを調査対象とした。そのため、このような本来的な「剣鉾」および「剣鉾のまつり」と、再生産されたものという二重構造であることを明らかにすることができた。これらは、来歴や伝承母体の性格が異なるものの、いずれにしても、京都において重要な祭礼文化、地域文化である。

本調査の成果が、京都市民の誇りとして、これらを活かした地域振興、地域活性化が進むことを願っている。

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会

委員長　植木　行宣

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編

京都　剣鉾のまつり

調査報告書 2 民俗調査編

目　次

はじめに　植木 行宣

目次

例言

京都　剣鉾のまつり分布図

第六章　民俗調査報告

《春の剣鉾のまつり》

熊野神社 神幸祭（左京区聖護院山王町）　四

神泉苑 神泉苑祭（中京区門前町）　八

清和天皇社 春季例祭（右京区嵯峨水尾宮ノ脇町）　一一

大豊神社 氏神祭（左京区鹿ヶ谷宮ノ前町）　一三

紫野今宮神社 今宮祭（北区紫野今宮町）　二三

八大神社 上一乗寺氏子祭（左京区一乗寺松原町）　四三

鷺森神社 神幸祭（左京区修学院宮ノ脇町）　五〇

崇道神社 大祭（左京区上高野西明寺山）　五四

八瀬天満宮社 例祭（左京区八瀬秋元町）　五七

地主神社 神幸祭（東山区清水一丁目）　六三

藤森神社 藤森祭（伏見区深草鳥居崎町）　六六

須賀神社 例祭（左京区聖護院円頓美町）　六九

新日吉神宮 小五月会（東山区妙法院前側町）　七五

山王神社 大祭（東山区清閑寺池田町）　八五

菅大臣神社 例祭（下京区菅大臣町）　八八

市比賣神社 いちひめまつり（下京区本塩竈町）　九二

金札宮 春季例大祭（伏見区鷹匠町）　九四

吉田神社 氏子講社大祭（左京区吉田神楽岡町）　九六

元祇園梛神社 神幸祭（中京区壬生梛ノ宮町）　九八

京都ゑびす神社 例大祭・神幸祭（東山区小松町）　一〇四

御霊神社（上御霊神社） 御霊祭（上京御区上霊竪町）　一一五

下御霊神社 下御霊祭還幸祭（中京区下御霊前町）　一三九

愛宕神社・野宮神社 嵯峨祭（右京区嵯峨野地域）　一五一

《秋の剣鉾のまつり》

三嶋神社 神幸祭（東山区上馬町）　一六六

晴明神社 晴明祭（上京区晴明町）　一六八

住吉神社 住吉祭（中京区薮之内町）　一七〇

瀧尾神社 神幸祭（東山区本町十一丁目）　一七四

北野天満宮 瑞饋祭（上京区馬喰町）　一七八

御香宮神社 御香宮祭礼（伏見区御香宮門前町）　一八六

平岡八幡宮 秋季例祭（右京区梅ヶ畑宮ノ口町）　一八九

粟田神社 粟田祭（東山区粟田口鍛冶町）　一九五

五条天神社 氏子祭（下京区天神前町）　二一一

山國神社 山国祭（右京区京北鳥居町宮ノ元）　二二四

北白川天神宮 秋季大祭（左京区北白川仕伏町）　二二七

吉田神社末社今宮社 神幸祭（左京区吉田神楽岡町）　二三五

春日神社 春日祭（右京区西院春日町）　二四八

長谷八幡宮 秋季大祭（左京区岩倉長谷町）　二五七

木嶋座天照御魂神社（蚕ノ社） 神幸祭（右京区太秦森ケ東町）　二六〇

大森賀茂神社 秋季大祭（北区大森東町）　二六六

三栖神社 三栖祭（神幸祭・還幸祭）（伏見区横大路下三栖城ノ前町）　二六九

熊野神社 秋季例大祭（右京区京北上弓削町宮ノ本）　二七三

八幡宮社 秋の大祭（右京区京北上中町宮ノ谷）　二七六

岡崎神社　氏子大祭　（左京区岡崎東天王町）　二七八
山ノ内山王神社　山王祭　（右京区山ノ内宮脇町）　二八二
住吉大伴神社　秋祭り　（右京区龍安寺住吉町）　二八五
福王子神社　秋季大祭　（右京区宇多野福王子町）　二八八
花園今宮神社　神幸祭　（右京区花園伊町）　三〇三
城南宮　城南祭　（伏見区中島鳥羽離宮町）　三〇八
由岐神社　例祭（鞍馬火祭）　（左京区鞍馬本町）　三一一
石座神社　例大祭（岩倉火祭）　（左京区岩倉上蔵町）　三三一
幡枝八幡宮社　秋季大祭　（左京区岩倉幡枝町）　三三八
八神社　秋季大祭　（左京区銀閣寺町）　三四一
新宮神社　例大祭　（左京区松ケ崎林山）　三五〇
天道神社　例大祭　（下京区西田町）　三五三
《参考　周辺の剣鉾のまつり》
若松神社　春季大祭　（滋賀県大津市大江二丁目）　三五八
猿田彦神社　春祭　（滋賀県草津市野路町）　三六〇
生和神社　春祭り　（滋賀県野洲市富波乙）　三六一
鍬山神社　秋季大祭（亀岡祭）　（亀岡市上矢田上垣内）　三六四
請田神社　例祭（保津の火祭り）　（亀岡市保津町立岩）　三六七
巻末資料
用語解説　三七〇
執筆者一覧

【調査報告書 1 論説編 目次】

はじめに　植木 行宣
目次
京都 剣鉾のまつり分布図
例言

第一章 総説
剣鉾のまつりの歴史　山路 興造
剣鉾のまつりの行事　長谷川 嘉和
〔コラム〕昭和の京都市内剣鉾調査　小嵜 善通

第二章 モノとしての剣鉾
計測調査が拓く祭礼民具研究の可能性　伊達 仁美
剣鉾の構成と動態 ―地域性と時代性に着目して　溝辺 悠介
附 紀年銘のある剣一覧　久保 智康
〔コラム〕犬鷹鉾の調査 ―主に竿頭額について

第三章 剣鉾のまつりの背景
剣鉾と町共同体　五島 邦治
貴所からの祭具拝領　村山 弘太郎
〔コラム〕下御霊神社剣鉾一枚摺「神幸図」　福原 敏男

第四章 剣鉾のまつりの現在
鉾差しの芸態　福持 昌之
剣鉾の「復興」と鉾差しの諸集団　今中 崇文
〔コラム〕九州最南端に伝わる剣鉾状祭具 ―御崎祭りの鉾を手がかりに　今中 崇文

第五章 絵画資料
剣鉾を描く絵画　濱住 真有
附 絵画資料一覧　濱住 真有

巻末資料
用語解説
参考文献等一覧／調査体制　福持 昌之
執筆者一覧

【調査報告書 3 資料編 目次】

はじめに　植木 行宣
目次
例言

第七章 歴史資料　村山 弘太郎
解説
凡例
紫野今宮神社／京都ゑびす神社／御霊神社（上御霊神社）／愛宕神社・野宮神社（嵯峨祭）／三嶋神社／瀧尾神社／平岡八幡宮／粟田神社／木嶋座天照御魂神社／岡崎神社／花園今宮神社／由岐神社（鞍馬火祭）／天道神社

第八章 銘文・箱書　溝邊 悠介
解説
凡例
熊野神社／神泉苑／清和天皇社／大豊神社／紫野今宮神社／八大神社／鷺森神社／崇道神社／八瀬天満宮社／地主神社／須賀神社／新日吉神宮／菅大臣神社／市比賣神社／金札宮／元祇園梛神社／京都ゑびす神社／御霊神社（上御霊神社）／下御霊神社／愛宕神社・野宮神社（嵯峨祭）／三嶋神社／晴明神社／住吉神社／北野天満宮／御香宮神社／平岡八幡宮／粟田神社／五条天神社／山國神社／北白川天神宮／吉田神社末社今宮社／春日神社／長谷八幡宮／木嶋座天照御魂神社／大森賀茂神社／三栖神社／熊野神社／八幡宮社／岡崎神社／山ノ内山王神社／住吉大伴神社／福王子神社／花園今宮神社／城南宮／由岐神社（鞍馬火祭）／石座神社（岩倉火祭）／幡枝八幡宮／八神社／天道神社／中森家

第九章 計測数値　溝邊 悠介
解説
凡例
計測数値一覧（剣・錺・錺受）【A表】
計測数値一覧（受金・鈴・棹・吹散・銘文情報）【B表】
執筆者一覧

例　言

調査事業と報告書

一、本報告書は、京都市が設置した京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会による剣鉾調査の成果をまとめたものである。本事業の推進は、文化庁の補助事業として実施した。

平成二十二年度　地域伝統文化総合活性化事業（委託事業）
平成二十三年度　地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業
平成二十四年度　地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業
平成二十五年度　文化遺産を活かした地域活性化事業

報告書の構成・体裁

二、本報告書の構成は次の通り。

①論説編　Ａ４判・カラー
②民俗調査編　Ａ４判・モノクロ
③資料編（歴史資料、銘文・箱書、計測数値）　Ａ４判・モノクロ
④資料編（剣鉾計測カード）　ＰＤＦ・データディスク

なお、①～④のＰＤＦについては、カラーで④のデータディスクに収めている。

調査対象

三、京都市内については、造形上、剣鉾の特徴をもつもの、これまで剣鉾と考えられてきたものについて、すべてを調査対象とした。

四、市外の事例についても比較対照するための参考として、委員および調査員に寄稿いただいた報告も、本調査報告書に掲載した。

映像記録

五、本報告書と同時に、映像記録（映像編）も作成した。

⑤民俗誌映像「祭りに生きる　京都の鉾差し」　ＢＤビデオ　七六分
⑥技術比較映像「剣鉾の組み方と差し方」　ＢＤビデオ　一四六分
⑦マップ映像「京都の剣鉾差し」　ＤＶＤビデオ　八八分
⑧映像解説書　ＤＶＤジャケット判・モノクロ

過年度の成果物

六、本事業に関わって、本報告書の発行以前にまとめた成果物は次の通り。

平成二十二年度
『京都の剣鉾まつり』（Ａ５判・モノクロ　一五七頁）
平成二十三年度
『京都の剣鉾まつり ２「差革」編』（Ａ５判・モノクロ　三九頁）
『差革の作り方 ―差革製作講習会の記録』（ＤＶＤビデオ　三四分）

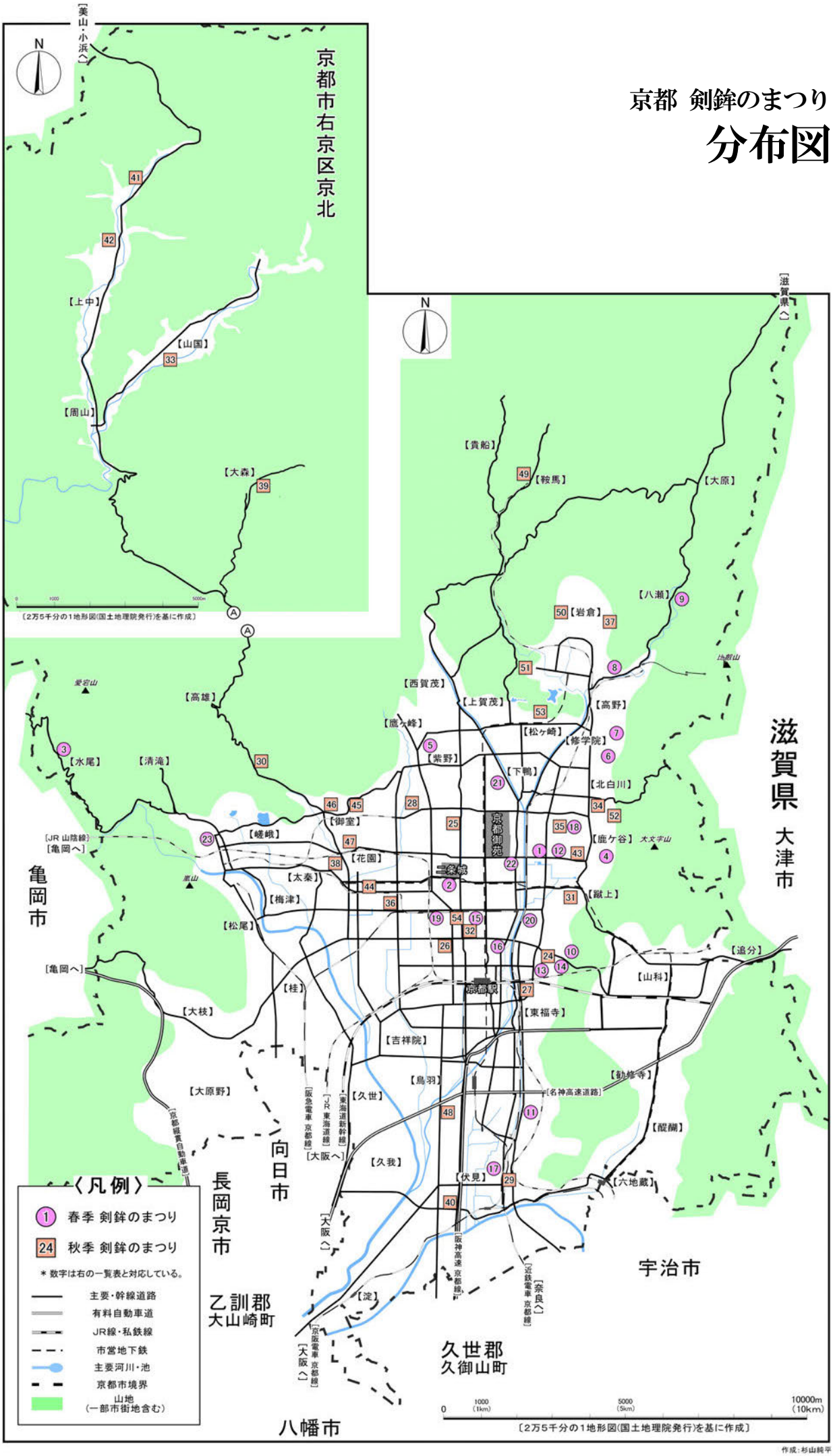
本報告書に掲載されていない情報もあるため、適宜参照していただきたい。

その他

七、参考文献等一覧および調査体制は①論説編の巻末にのみ掲載し、用語解説は①論説編および②民俗調査編の巻末に掲載した。なお、各巻の執筆者一覧は、それぞれの巻末に掲載した。

京都 剣鉾のまつり

分布図



作成：杉山純平

	No.	開催日程	祭礼の名称	祭りに出る剣鉾の数	神社等の所在地
春の剣鉾のまつり	1	毎年4月29日	熊野神社の神幸祭	1	左京区聖護院山王町
	2	毎年5月3日	神泉苑の神泉苑祭	3	中京区門前町
	3		清和天皇社の春季例祭	3	右京区嵯峨水尾宮ノ脇町
	4	毎年5月4日	大豊神社の氏神祭	7	左京区鹿ケ谷宮ノ前町
	5	毎年5月5日に神幸祭, 5月15日に近い日曜日に還幸祭	紫野今宮神社の今宮祭	9	北区紫野今宮町
	6	毎年5月5日	八大神社の上一乗寺氏子祭　市登民「一乗寺八大神社の剣鉾差し」	3	左京区一乗寺松原町
	7		鷲森神社の神幸祭	3	左京区修学院宮ノ脇町
	8		崇道神社の大祭	2	左京区上高野西明寺山
	9		八瀬天満宮社の例祭	3	左京区八瀬秋元町
	10		地主神社の神幸祭	2	東山区清水一丁目
	11		藤森神社の藤森祭	1	伏見区深草鳥居崎町
	12	毎年5月第2日曜日	須賀神社の例祭	3	左京区聖護院円頓美町
	13		新日吉神宮の小五月会	5	東山区妙法院前側町
	14		山王神社の大祭	1	東山区清閑寺池田町
	15		菅大臣神社の例祭	2	下京区菅大臣町
	16	毎年5月13日	市比賣神社のいちひめまつり	1	下京区本塩竈町
	17	毎年5月15日	金札宮の春季例大祭	1	伏見区鷹匠町
	18	毎年5月第３日曜日	吉田神社の氏子講社大祭	2	左京区吉田神楽岡町
	19		元祇園梛神社の神幸祭	7	中京区壬生梛ノ宮町
	20		京都ゑびす神社の例大祭・神幸祭	6	東山区小松町
	21	毎年5月18日	御霊神社（上御霊神社）の御霊祭	6	上京区上御霊前町
	22	毎年5月第3もしくは第4日曜日	下御霊神社の下御霊祭還幸祭	4	中京区下御霊前町
	23	毎年5月第4日曜日	愛宕・野宮神社の嵯峨祭　市登民「嵯峨祭の剣鉾差し」	5	右京区嵯峨野地域

	No.	開催日程	祭礼の名称	祭りに出る剣鉾の数	神社等の所在地
秋の剣鉾のまつり	24	毎年9月第3日曜日	三嶋神社の神幸祭	2	東山区上馬町
	25	毎年9月秋分の日	晴明神社の晴明祭	2	上京区晴明町
	26	毎年9月第4日曜日	住吉神社の住吉祭	3	下京区藪之内町
	27	毎年9月最終日曜日	瀧尾神社の神幸祭	1	東山区本町11丁目
	28	毎年10月1日に神幸祭, 10月4日に還幸祭	北野天満宮の瑞饋祭	2	上京区馬喰町
	29	毎年10月9日前後の日曜日	御香宮神社の御香宮祭礼	0	伏見区御香宮門前町
	30	毎年10月体育の日の前日	平岡八幡宮の秋季例祭　市登民「平岡八幡宮の剣鉾差し」	4	右京区梅ケ畑宮ノ口町
	31	毎年10月体育の日	粟田神社の粟田祭	18	東山区粟田口鍛冶町
	32		五条天神社の氏子祭	2	下京区天神前町
	33	毎年10月第２土曜日に神幸祭, 10月第2日曜日に還幸祭	山國神社の山国祭	3	右京区京北鳥居町宮ノ元
	34	毎年10月第2日曜日	北白川天神宮の秋季大祭	3	左京区北白川仕伏町
	35		吉田神社末社今宮社の神幸祭	5	左京区吉田神楽岡町
	36		春日神社の春日祭　市登民「西院春日神社の剣鉾差し」	5	右京区西院春日町
	37	毎年10月10日前後の日曜日	長谷八幡宮の秋季大祭	3	左京区岩倉長谷町
	38	毎年10月12日前後の日曜日	木嶋座天照御魂神社（蚕ノ社）の神幸祭	4	右京区太秦森ケ東町
	39	毎年10月15日前後の日曜日	大森賀茂神社の秋季大祭	1	北区大森東町
	40	毎年10月16日前後の日曜日	三栖神社の三栖祭　市登民「三栖の炬火祭」	5	伏見区横大路下三栖城ノ前町
	41	毎年10月第3土曜日に神幸祭, 10月第3日曜日に還幸祭	熊野神社の秋季例大祭	1	右京区京北上弓削町宮ノ本
	42		八幡宮社の秋の大祭	1	右京区京北上中町宮ノ谷
	43	毎年10月第3日曜日	岡崎神社の氏子大祭	5	左京区岡崎東天王町
	44		山ノ内山王神社の山王祭	2	右京区山ノ内宮脇町
	45		住吉大伴神社の秋祭り	1	右京区龍安寺住吉町
	46		福王子神社の秋季大祭	6	右京区宇多野福王子町
	47		花園今宮神社の神幸祭	3	右京区花園伊町
	48		城南宮の城南祭	3	伏見区中島鳥羽離宮町
	49	毎年10月22日	由岐神社の例祭　市登民「鞍馬火祭」	8	左京区鞍馬本町
	50	毎年10月23日前後の土曜日	石座神社の例大祭　市登民「岩倉火祭」	10	左京区岩倉上蔵町
	51	毎年10月23日前後の日曜日	幡枝八幡宮社の秋季大祭	2	左京区岩倉幡枝町
	52	毎年10月24日直前の日曜日	八神社の秋季大祭	3	左京区銀閣寺町
	53	毎年10月第4日曜日	新宮神社の例大祭	2	左京区松ケ崎林山
	54	毎年11月3日	天道神社の例大祭	5	下京区西田町

（注）「祭りに出る剣鉾の数」は本調査期間中のいずれかの時点における数字である。

第六章　民俗調査報告

春の剣鉾のまつり

熊野神社　神幸祭

毎年四月二十九日
熊野神社
京都市左京区聖護院山王町

① 祭礼と由緒

地域の概要

所在地は丸太町通と東大路通の交差点の北西である。弘仁二年（八一一）、修験道の開祖である役小角の十世にあたる日圓上人が国家守護のため、紀州熊野大神を勧請したことに始まるといわれる。寛治四年（一〇九〇）に創建された聖護院は、熊野神社を守護神として別当職を置いて管理したという。

大正元年（一九一二）の市電丸太町線の開通と、昭和元年（一九二六）の東大路通拡幅などにより、現在の社域となった。

祭神は伊弉諾尊、伊弉冉尊、天照大神、速玉男尊、事解男尊の五柱である。

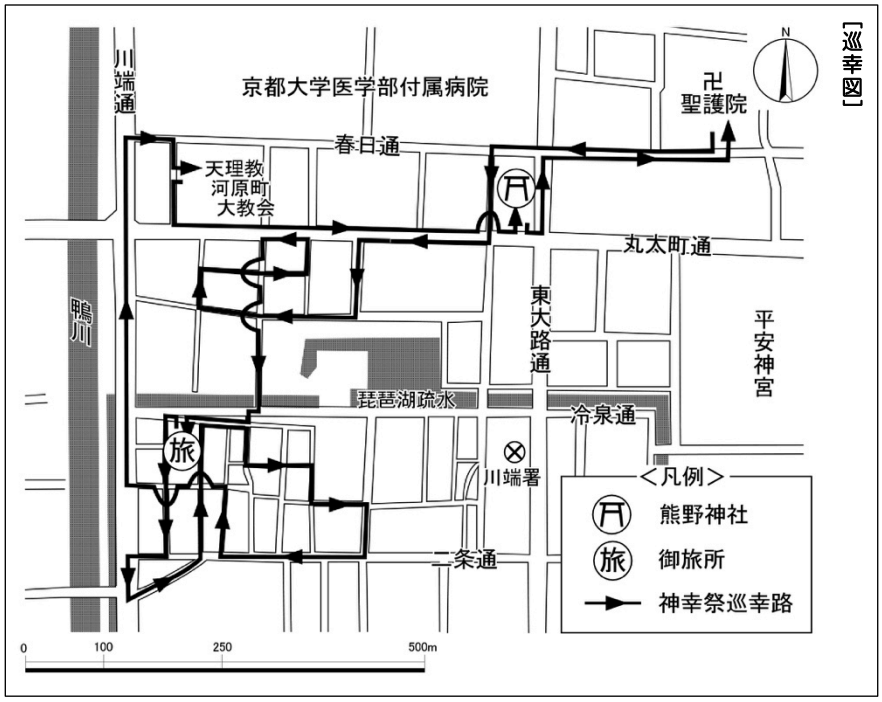
氏子圏は神社の南西部十か町で、疏水により南北に隔てられた状態になっている。北は東丸太町北部、東丸太町南部、東丸太町東部、下堤、新竹屋の五か町、南は中川、大文字、秋築、石原、新先斗の五か町となる。それぞれ北五か町、南五か町と呼ぶ。ただし、石原町の半分は岡崎神社の氏子である。下御霊神社、須賀神社の氏子も入り組むという。

各町に二～三名の神社総代がおり、全体として氏子総代会ができている。総代の選出方法は各町によりまちまちであり、総代会会長は相談で決めている。祭礼のための組織はなく、総代や各町の役員により準備がなされる。

祭礼次第

熊野神社神幸祭は四月二十九日に行われる。明治二十三年（一八九〇）から約百年の間、五月十六日の例祭の日に、同時に神幸祭も行われていた。その頃は、午前中に例祭、午後から神幸祭が行われた。その後平成になるとともに、神幸祭を四月二十九日とし、例祭と日を分けて行うこととなった（社報『京熊野』第三号）。神輿の舁き手が集まらないという理由から、氏子より要望があって日程を変更したというが、祭りを分けた現在も舁き手が足らず、光格天皇御寄贈の大きな神輿は拝殿に安置するのみで、巡幸に出すのは小さい神輿である。大きな神輿は昭和三十年代まで出していたといい、轅がまだ残っている。

現在、剣鉾と神輿は神幸祭の一週間前に出して拝殿に飾られる。そして祭りの



あと一週間飾られてから、倉庫に片づけられる。

熊野神社の祭礼の特徴は、「少年勤王隊」（少年鼓笛隊）が巡行することである。少年勤王隊は、昭和三年に設立された。熊野神社社報『京熊野』第一号から四号までの「熊野神社少年勤王隊六十年史」によると、昭和元年からの市電の線路敷設にともなう東大路通拡幅工事のため、熊野神社東側の境内地を割譲することとなり、境内の建物を移転、改築しなければならなくなった。そのため、本殿の御神霊を仮殿に遷し工事を進めていた。ようやく竣工することとなった昭和三年の春、本殿遷座祭を斎行することとなり、氏子各町で敬神の誠を披露せんがための奉祝の行事を計画し、その事業の一環として少年勤王隊が設立された。四月十五日、熊野神社本殿遷座祭奉祝式典当日に少年勤王隊は披露された。また、同年十一月十日、京都御所で昭和の御大典が行われた際、上洛していた秩父宮殿下や久邇宮殿下の御前でも軍楽演奏を披露している。この昭和三年の二つの祭典（熊野神社本殿遷座祭奉祝式典と昭和の御大典）で披露したことがきっかけとなり、当時聖護院付近に在住であった、丹波山国隊隊員のご子息の方より連絡が入り、楽器の寄贈や山国隊より直々に軍楽の指導を受けることとなり、現在に至っている。山国隊とは、幕末に北桑田郡山国村（現在の右京区京北）の人々により結成され、後に官軍となった農兵隊である。時代祭の行列で先頭を務めている維新勤王隊のモデルであり、実際に大正初期までは山国隊が時代祭の先頭を務めていた。

現在、少年鼓笛隊は、四月十日より練習を始め、日曜日以外の午後七時から九時まで練習し、神幸に参加する。

もう一つの特徴は、聖護院へ神幸行列が参向することである。これは熊野神社と聖護院の歴史的な結びつきをあらわすものである。

平成二十三年度の祭礼の様子は次の通りである。まず午前十時前より、役員の方々が神社の倉庫から行列の道具を運び出したり、拝殿に飾られている神輿を出すなど神幸行列の準備を始める。

正午より拝殿前の境内に役員、鼓笛隊、神幸列の参加者らが集まり祭典が始まる。宮司が拝殿前で祝詞奏上や修祓を行った後、十二時十分過ぎに行列先頭の少年鼓笛隊が行進の曲が演奏しつつ、神幸行列は神社を出発する。神職二名は馬による移動である。

神幸行列はまず聖護院に向かい、十二時二十分過ぎには到着する。神輿以外の行列の台車（猿田彦や榊など）はそのまま待機し、実際に聖護院境内での行事に参加するのは神職、役員、少年鼓笛隊、神輿などである。聖護院境内には僧侶が四名出迎えており、神職と挨拶を交わす。境内の僧侶の前方に案（八足）が設置され、その上には御神酒と三方が置かれている。御神酒と三方の向かいに神輿が安置され、神職、役員以下が鼓笛隊の行進の曲に合わせ境内で整列をする。曲が終わると、十二時三十分から僧侶が法螺貝を吹き、神幸行列に向けての読経があり、鼓笛隊による神前の曲の演奏のなか、十二時四十分に神幸行列は聖護院を出発し、御旅所をめざす。

神幸行列は京都大学熊野寮の外周の歩道でお稚児さんたちと合流し、御旅所には十三時三十分に到着し休憩に入る。その間に神輿が安置され、神輿の台車を押す棒の上に神饌唐櫃の蓋が設置され、その上に神饌をのせた三方が置かれ簡易の祭壇となる。十三時四十分、御旅所で神事が始まる。修祓や祝詞奏上のおこない神事が終わると、十四時二十分、神幸行列は鼓笛隊の行進曲演奏のもと、御旅所を出発する。

行列は氏子町内を巡したのち川端通を北上し、天理教河原町大教会へ向かう。十五時三十分過ぎには到着し、十六時をめどに大教会前に整列し、鼓笛隊が神前の曲を演奏する。その後、行進曲に合わせて天理教河原町大教会を出発したあとは丸太町通へ出て熊野神社へ戻る。

十六時二十分頃には熊野神社へ到着する。神輿は拝殿前に安置され、境内で鼓笛隊が神前曲を演奏した後、宮司による神事が執り行われ、十六時三十分過ぎには祭礼行事がすべて終了した。

行列次第

神幸祭の行列は以下の通りである。

熊野少年鼓笛隊―少年武者―稚児―太鼓―榊―猿田彦―獅子―幸鉾―金幣―銀

幣―御盾―御弓―御矢―御太刀―神饌唐櫃―銀蓋―菅蓋―神職騎馬―口付―旗―氏子奉仕―神輿―宮司騎馬―口付―氏子総代―氏子奉仕（町内会長）。

行列の長さは約二百メートルで、奉仕者の数は約二百名が確認できる。行列に参加する少年武者やお稚児さんは、氏子の中の希望者である。

由緒と歴史

熊野神社神幸祭がいつからどのような経緯で始まったのかは、史料が見あたらずに不明であるが、神社の例祭としてみると、神社の社報『京熊野』第二号に、「鈴鹿家説」という史料に延元元年（一三三六）、それまで九月九日だった日程を三月十五日に改めたとみられるとある。また、神輿の巡幸をともなう神幸祭に関しては、同じく社報第二号により、天保年間の京絵図に、冷泉通川端東に御旅所が画かれていることや、大神輿が光格天皇の寄進によるものであることから、十九世紀の前半には神輿による巡幸がなされていたと推測される。

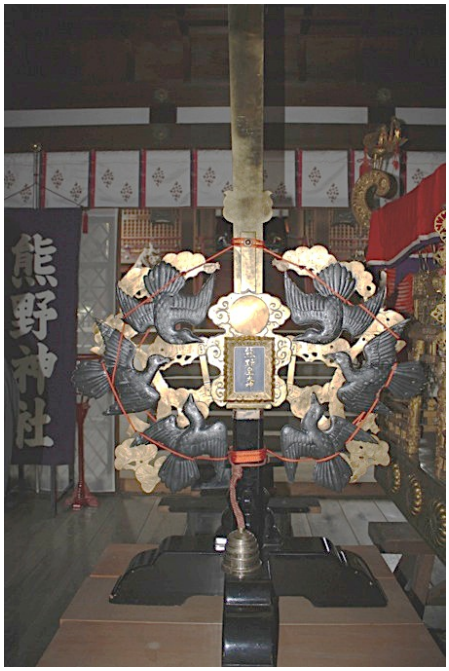
現在の様子では、十五年ほど前より京都國學院の学生が中心となって行列に参加し、金幣、銀幣、御盾、御矢などの役割を担うようになった。京都大学の学生も来ることがある。

現在の御旅所は中川町一八九番地の駐車場である。前述したように、天保年間の京絵図には、冷泉通川端東に御旅所があったとある。現宮司によれば、大文字、新先斗、中川町あたりが二条新地と呼ばれて繁栄し、熊野神社を氏神と崇めてその地に御旅所を作ったのではないかとのことである。ただし、明治二十三年の疏水開通により御旅所は廃止されてしまい、現在はその付近を御旅所としている。

② 剣鉾と組織

概要

剣鉾は額に「熊野皇大神」と書かれ、鋲には左右三羽ずつ烏の飾りが付けられている。剣鉾は祭りの一週間前より拝殿中央に飾られる。本殿を背にして、参拝者に正面が向くように飾られており、祭り当日、剣鉾の前は奉納された御神酒でいっぱいになる。



拝殿に飾られている剣鉾（佐藤直幸，平成 23.4.29）

現宮司や調査時の総代会会長（当時八十四歳）によると、鉾を差したり、巡行に出たということはない。神社で昭和三十三年の祭礼時の写真を見せてもらったが、それにも剣鉾は写っていなかった。かつて、棹を付けて、長い状態で立てて飾っていたことがあり、そのときに使用していた台と棹は現存している。

剣を収めている箱には「新先斗町」と書かれていることから、もとは新先斗町で保管していた可能性がある。

③ その他の鉾

幸鉾

神幸祭の行列には幸鉾が一本出る。巡行時は、狩衣姿の男性が両手で袈裟懸けになるように持ち、その際、鉾先は左肩の方から上に向けられていた。

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

熊野神社社報『京熊野』第一号（平成元年六月）
熊野神社社報『京熊野』第二号（平成元年十月）
熊野神社社報『京熊野』第三号（平成二年八月）
熊野神社社報『京熊野』第四号（平成五年一月）
熊野神社社報『京熊野』第五号（平成八年一月）
熊野神社社報『京熊野』第六号（平成十一年四月）
宇井邦夫『熊野神社歴訪』（巌松堂出版、平成十年）

（佐藤 直幸）

神泉苑　神泉苑祭

毎年五月一～四日
神泉苑
京都市中京区門前町

①　祭礼と由緒

地域の概要

神泉苑は、平安京造営に際して禁苑として設けられた。平安中期には御霊会や雨乞いが行われる宗教霊場となる。現在、園池の中島に善女龍王を祀り、その社殿前に大きな石鳥居が立つことから、一見神社と見間違われることも多いが、真言宗の大本山教王護国寺（東寺）の管轄下にある寺院である。

神泉苑が位置する近辺は、八坂神社の神輿の舁き手である三条台若中[1]を輩出してきた地域で、現在、同組織は八坂神社の三基の神輿のうち中御座神輿を舁く。神泉苑は、祇園御霊会の起源伝承によれば、貞観十一年（八六九）に祇園社から六十六本の矛と神輿が送られたとされるところであり、八坂神社の氏子域の西端部にあたる。現在の祭礼においても、七月二十四日の還幸祭で中御座神輿が神泉苑前で駐輿して拝礼するのが習わしである。

祭礼次第

神泉苑の園池に浮かぶ中島に、善女龍王が祀られる。この善女龍王の祭礼が、毎年五月一～四日に開催される神泉苑祭である。この期間中、境内の狂言堂において、神泉苑狂言（京都市登録無形民俗文化財）が奉納されていたが、平成二十六年度より開催日程が秋に変更される予定である。その他にも、「よかろう太鼓」といわれる和太鼓や雅楽の奉納等がある。

神輿は一基あり、昭和二十年代後半頃までは三条台若中が舁いて区域内を巡幸していた。神輿の後ろを神泉苑の住職が乗馬で随行していたという。しかし神輿も古くなり、巡幸すると壊れるのではないかという話になり、現在のように神輿庫から出すものの拝殿に据え置いたまま祭祀する形に変えた。拝殿前には祭壇が設けられ、供饌台となる。また拝殿脇に、剣鉾が三基立てられ、祭礼期間中祀られる。剣鉾も巡行はない。剣鉾が巡行していたという記憶は、現在の住民にはなかったので、巡行していたとしても神輿よりも随分と以前に取りやめていたようである。剣鉾の巡行の写真等はこれまでのところ見つかっていない。

神輿と剣鉾の組み立ては、五月一日午前中に地元住民らが行う。神輿と剣鉾の飾り付け役に特段決まりはないというが、両方とも男性の手によって組み立てられる。剣鉾の所有者及び保管先は、現在は神泉苑である。

祭礼期間中の五月三日に

ミニ剣鉾（村上忠喜，平成 24.5.3）

園池中島に立てられた剣鉾（村上忠喜，平成 24.5.3）

は、午前中に子供神輿とミニ剣鉾の巡幸が、午後に稚児行列のお練りがある。また午前中に本堂において大般若経の転読がある。左記の事例はいずれも平成二十四年度のものである。

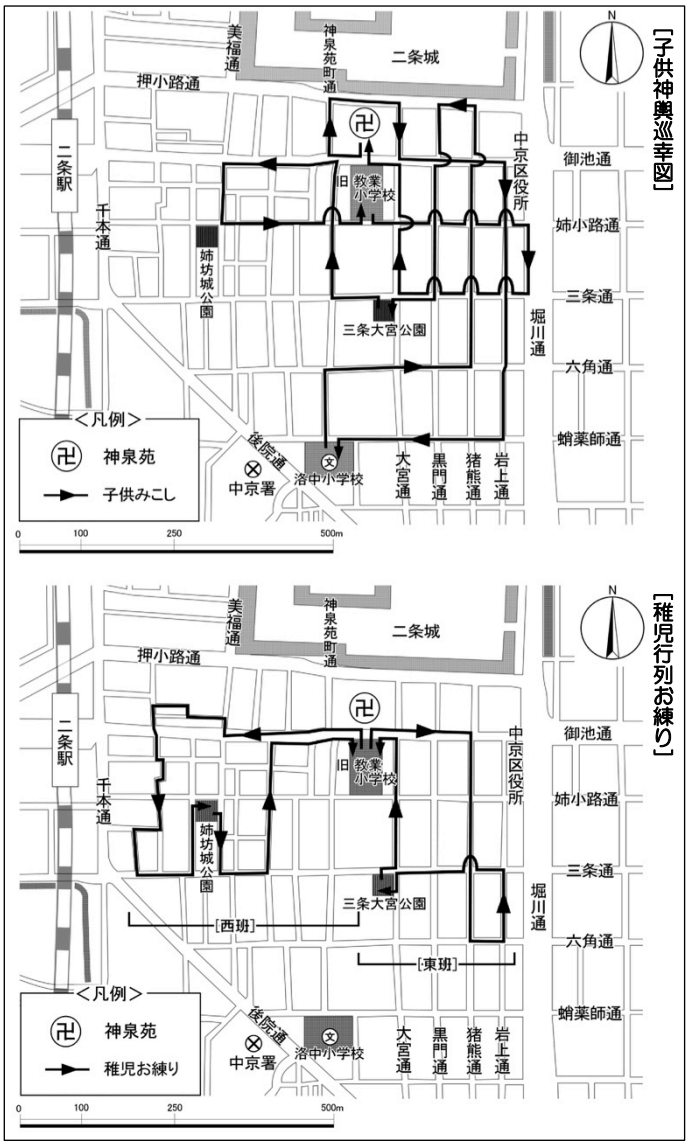
午前九時、住職が善女龍王社拝殿前にて祈祷を行う。子供神輿やミニ剣鉾を奉祭する子供たちやその親御さんたちも拝殿前で祈願し、その後住職のお祓いを受ける。その後神泉苑鳥居前の道路上に、巡幸に参加する子供たちが整列し、九時半に神泉苑を出立、神泉苑南側の地域をめぐる。

所々で、神輿に対して祈願をする住民の姿が見受けられた。祈願者は、ぽち袋に賽銭を入れて、神輿を先導する役員の方に渡す。巡幸列は途中、洛中小学校、三条大宮公園、そして元教業校の三か所で休憩をとり、正午に神泉苑に還御する。休憩所では、役員が巡幸に参加している子供たちにお菓子を配っていた。なお、子供神輿は、もともと教業学区が作ったが、子供数が減少したことや、教業、朱一、乾の三学区が合併したことにより、現在は元三学区の子供たちが奉仕している。

子供神輿が出立して後、神泉苑本堂において大般若経の転読が行われる。住職の祈祷に合わせて四名の伴僧が折本の大般若経を転読する。十数名の神泉苑祭の神事委員の方々が背広姿で参列する。数名の女性の役員の方も参列していた。

転読終了後（十時四十五分）、僧侶全員が本堂を出て、園池にかかる法成橋を渡り、善女龍王社拝殿前において般若心経を唱える。その間住職は暫く拝殿前で祈祷をした後、拝殿左手から奥に入り、ひとり本殿前に座して祈祷を続ける。本殿での祈祷終了後、住職が拝殿前に戻り、全員そろって柏手を打ち、一連の祈祷が終了となる。

十三時半に教業校の校庭に、稚児お練りに参加する稚児と親御さんたちが集まる。行列は東班と西班に分かれ、東班が神泉苑の南東側を、西班が南西側を練り歩く。



拝殿前での僧侶による般若心経（村上忠喜、平成24.5.3）

途中、東班は三条大宮の三条大宮公園で、西班は姉小路坊城の姉坊城児童公園で休憩の後、十五時に教業校に帰着して解散となる。稚児のお練りは昭和二十年代には既に行われていたという。かつてはもっと盛大であったが最近では子供の数も減ってきているらしい。

稚児行列最後尾には、黒の留袖を着た女性数名がお伴をする。着物は自前だが、帯は神泉苑から貸し出されるもので、白地に神泉苑の紋である龍がデザインされ

ている。

行列次第

子供神輿の行列は次の通り。

① 太鼓（一台）　ＰＴＡのお母さんたち数名

② ミニ剣鉾（一基）　台車の上に、剣鉾を象ったミニ剣鉾が三本立つ。台車中央には御幣をつけた榊を挿す。ミニ剣鉾を曳くのは、主に小学校の低学年の子供たちである。ミニ剣鉾は、平成二十一年に、京都二条城・城下町振興会が資金を調達して作製し、平成二十二年より祭礼行列に参加している。

③ 旗（二本）　「教業　子供みこし会」と染め抜く。小学校高学年の子供たちが担当する。

④ 高張提灯（二竿）　「教業　子供みこし会」と染め抜く。小学校高学年の子供たちが担当する。

⑤ 子供神輿（一基）　小学校高学年の子供たちが曳く。

祭礼行列に奉仕する子供たちの人数は、太鼓まわりに四名、ミニ剣鉾二十三名、旗・高張提灯十名、神輿三十三名で、計六十七名であった。

② 剣鉾と組織

概要

先記のように、神泉苑の鉾は三基で、金鵄鉾、龍王（龍）鉾、旭鉾である。組み立てもこの順で行われ、拝殿脇東側に、北から順に並んで立てられる。

剣鉾には銘はないが、収納箱には墨書がある。収納の仕方や墨書から、遅くとも幕末には、三基の鉾はそれぞれに収蔵されていたのではなく、三基一括して保管されていたことが知れる（調査報告書３　資料編参照）。そして、その管理は、三条台村、もしくは三条台若中があたっていた。すなわち、三条台村全体での管理下にあったことが知れる。

鉾の形状からみても、差し鉾の特徴が看取でき、現在差しているわけではないが、吹散と鈴をつけて飾り、吹散が風にたなびく振動を利用して、鈴の音が出ることをよしとしている。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

三条台若中編『三条台若中の歩み』昭和六十三年

（村上　忠喜）

註

（1）明治中期の三条台若中は、神泉苑の南から蛸薬師通までの神泉苑通沿いの両側町を中心に構成されていた。

清和天皇社 春季例祭

毎年五月三日
清和天皇社
京都市右京区嵯峨水尾宮ノ脇町

① 祭礼と由緒

地域の概要

清和天皇社は、水尾の集落の氏神として四所（ししょ）神社とともに祀られている。伝承の上では本来、水尾の氏神は四所神社であったが、譲位、出家した清和法皇が水尾を隠棲の地として定め、新たに寺を建築中に崩御し、水尾に山陵が営まれた。そして、法皇の死を悼んだ水尾の里人が清和法皇を祭神として清和天皇社とし、四所神社を摂社としたと伝えられている。この伝承が事実か否かは判然としないが、『続日本紀』に宝亀三年（七七二）に光仁天皇が、延暦四年（七八五）には桓武天皇が「水雄岡」に行幸したという記事があり、すでに奈良時代末から平安時代初頭には、天皇が遊猟を行なう地の一つとなっていたことがうかがえる。

またかつて、水尾は丹波と都をつなぐ街道沿いの集落として、さらには愛宕神社への裏参道の登山口の集落として、数多くの旅人が行きかっていたと考えられる。さらに、愛宕の登山道の水尾わかれ上には、水尾の女性が樒を売る花売場があるなど、愛宕との関係を伺うことができる。井上頼寿は『京都古習志』で、水尾では村の長老衆である「故老」になる前に「職事」（現在の聞き書きでも、職事と呼ばれている）と「精進頭」をつとめなければならないと述べ、特に精進頭は火の用心を祈る役であり、村や山林で火事があった場合には愛宕に上り鎮火を祈らなければならないと述べていることから、水尾が愛宕に対して心理的な近さを有しているといえよう。

祭礼次第

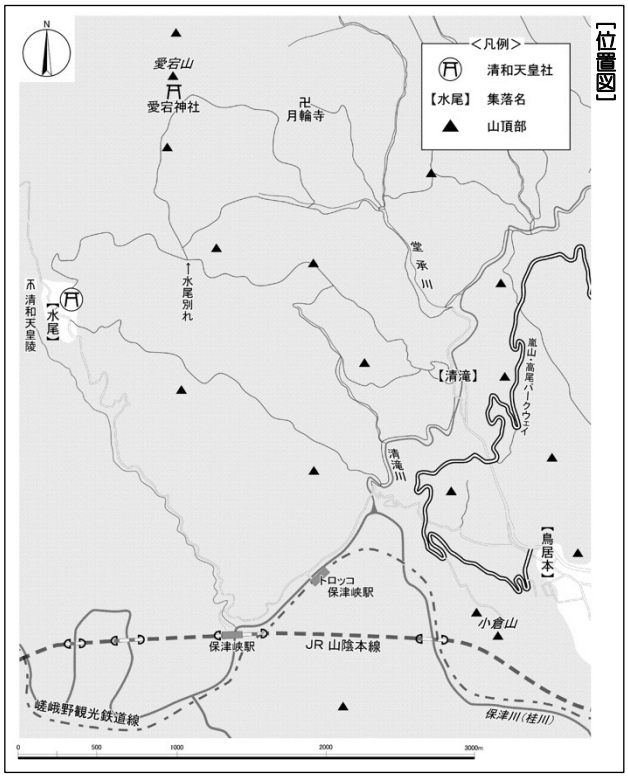
清和天皇社の祭礼は五月三日に行なわれる例祭のほかにも、元旦祭、左義長、新穀感謝祭、御火焚が行なわれている。これらの祭礼には、例祭と同様に水尾の長老衆である故老が関与している。水尾は集落内の家々が左家と右家の家筋に分かれており、左家からは左座の故老が六名、右家からは右座の故老が六名、計十二名が故老となる。それぞれの最長老は刀禰と呼ばれ、神社の祭儀の最高責任者となっている。実際には、故老から順番で選出されている宮守が、神職と同様の服を着て神主のそばに侍り、献饌や撤饌の際に神主の補助を行なっている。なお、祭礼の下準備などの役割は故老になる前の職事と呼ばれる役割の者が担っている。

水尾では故老になるには、左義長の際に行なわれる頭式で入座の儀礼を行なう必要がある。また、井上は『京都古習志』で頭式の様子も記しており、頭式は毎年三名の男子が年齢順に入座し、一度入座すると他村へ出ても故老になる権利を有するとされている。入座する子供を持つ頭屋と呼ばれる家が協力して行事の際に出す食事をつくり、頭式の準備を行なう。頭式は祭典の後に神社の拝殿に故老が列座する中で行なわれ、入座する頭人が属する事になる座とは逆の座の刀禰から杯を受けるとしている。井上は本来、三歳ごろに入座すべきであるが、子供の数が増えたため、当時は十歳前後で入座することになっていたと述べている。頭式そのものは平成に入ってから子供の数が揃わないため、中断されることが多く、おおよそ二十年程度行っていない状態であるという。

② 剣鉾と組織

概要

清和天皇社では三本の剣鉾を所有している。しかし、祭の主体は神輿であるという認識が強く、剣鉾は祭の添え物と考えられている。鉾は扇子、鷹の羽、茗荷と思われる飾りがつけられるが、現地では、単に「鉾」と呼んでおり、個別の名称はない。



剣鉾
（大野啓，平成24.5.3）

居並ぶ故老（大野啓，平成24.5.3）

鉾祭りの次第

祭礼当日の朝になると、故老を中心として数名の氏子が集まり、神輿や鉾の準備を行なう。神輿は本殿と拝殿の間に安置され、鉾は拝殿に立て掛けられる。午後になると裃姿となった故老やスーツ姿の氏子総代らが参り、清和天皇社、四所神社に参拝した後、境内の摂社に参る。

神事は愛宕神社の神主の手によって執行される。神主の祓詞、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠などを行なった後、神主の手によって本殿から神輿への御霊遷しが行なわれる。御霊遷しが終わると、故老たちが拝殿に着座して直会が始まる。この時、神主と宮守が正座に座り、宮守以外の故老たちは刀禰から順番に左右に分かれて座る。そして、おにぎりと煎り豆が載せられた盆を職事が故老たちの前に配膳し、上座に座る人々から順にお神酒の酌をする。直会終了後、氏子が持参したお神酒を神輿の前に置いた片口に注ぎ、神主が塩を撒くという儀礼を行う。これを御旅所祭りと称する。その後、神主の手により、神輿から本殿に御霊が遷され、祭礼は終了する。

現在は居祭りの形式であるが、昭和三十五年（一九六〇）前後までは、神社から円覚寺前（水尾小学校のグランド）まで、神輿を巡行しており、その際には、鉾振り（鉾差しのこと）を行なっていたという。鉾振りは水尾の人が交代で行なっていたようである。

その他

清和天皇社に伝来する鉾の中には、「寛延四年四月三日」、「水尾村」の銘が剣の茎の表裏に刻まれたものがある。また錺受に「寛永八年辛卯年」と記されものがあることから、江戸時代中期には水尾の祭礼に鉾が出ていたことが知れる。また、全ての鉾の鈴が当たる場所にはこすれたような形跡がみられることから、いずれも鉾振りが行なわれていたと推測できる。

（大野　啓）

大豊神社 氏神祭

毎年五月四日
大豊神社
京都市左京区鹿ケ谷宮ノ前町

① 祭礼と由緒

地域の概要

大豊神社は旧の鹿ケ谷村の氏神であったが、明治以降は旧の若王子村、旧の南禅寺村も氏子地域になった。北は八神社・日吉神社の氏子地域、南は粟田神社の氏子地域、西は岡崎神社の氏子地域に接する。

氏子域は、北が法然院・鹿ケ谷、南が南禅寺、東西が東山から白川の範囲であり、南北に走る鹿ケ谷通が氏子域の中軸線の様相を呈する。定住することが稀で、入れ替わりが多かった時分は、鹿ケ谷一帯は三十～五十軒ほどの村だったが、桜谷町を中心に栄え、北から南へと広がったという。現在の町名でいうと、おおよそ北から、鹿ケ谷御所ノ段町、鹿ケ谷法然院町、鹿ケ谷法然院西町、鹿ケ谷寺ノ前町、鹿ケ谷西寺ノ前町、鹿ケ谷桜谷町、鹿ケ谷上宮ノ前町、鹿ケ谷宮ノ前町、鹿ケ谷下宮ノ前町、鹿ケ谷徳善谷町、鹿ケ谷高岸町、若王子町、南禅寺北ノ坊町、永観堂町、永観堂西町、南禅寺下河原町、南禅寺草川町、南禅寺福地町である。

黒川道祐『日次紀事』では「東山鹿ケ谷大豊明神祭」として「九月九日」が祭礼日として記されている。北ノ坊町の葵鉾の収納箱に「明治七年九月吉日」と墨書があり、明治初期はまだ九月九日であったと思われる。その後、十月十九日が氏神祭礼日（大祭）となり、九月九日には例祭を執行していた。昭和十六年から昭和二十二年までの祭礼中断を経て、昭和二十七年より大豊奉賛会理事会の決定により五月六日に神幸祭、五月九日に還幸祭が行われることになった。昭和六十年頃より還幸祭は五月九日に近い日曜日となった。平成に入って四月二十九日が神幸祭、五月五日が還幸祭となったが、平成二十年から還幸祭は五月四日となった。

近年、祭礼が盛んとなっており、剣鉾はここ数年三、四基を差すが、以前は二基であった（詳しくは後述）。

また、霊鑑寺より拝領したと伝える神輿があり、のちに神輿会の初代会長となった青木篤氏らによる、神輿舁きによる巡幸を復活させたいという熱意が、氏子地域における神輿復興の機運へとつながり、平成十九年からは約半世紀ぶりに神輿が手で舁かれるようになった。神輿舁きの団体は大豊神輿会といい、京都市内の神輿舁きと連携をとって人手を確保している。現在の会長は二代目で、伊東広邦氏である。

祭礼次第

【準備および神幸祭】（平成二十三年四月二十九日／同年五月三日）

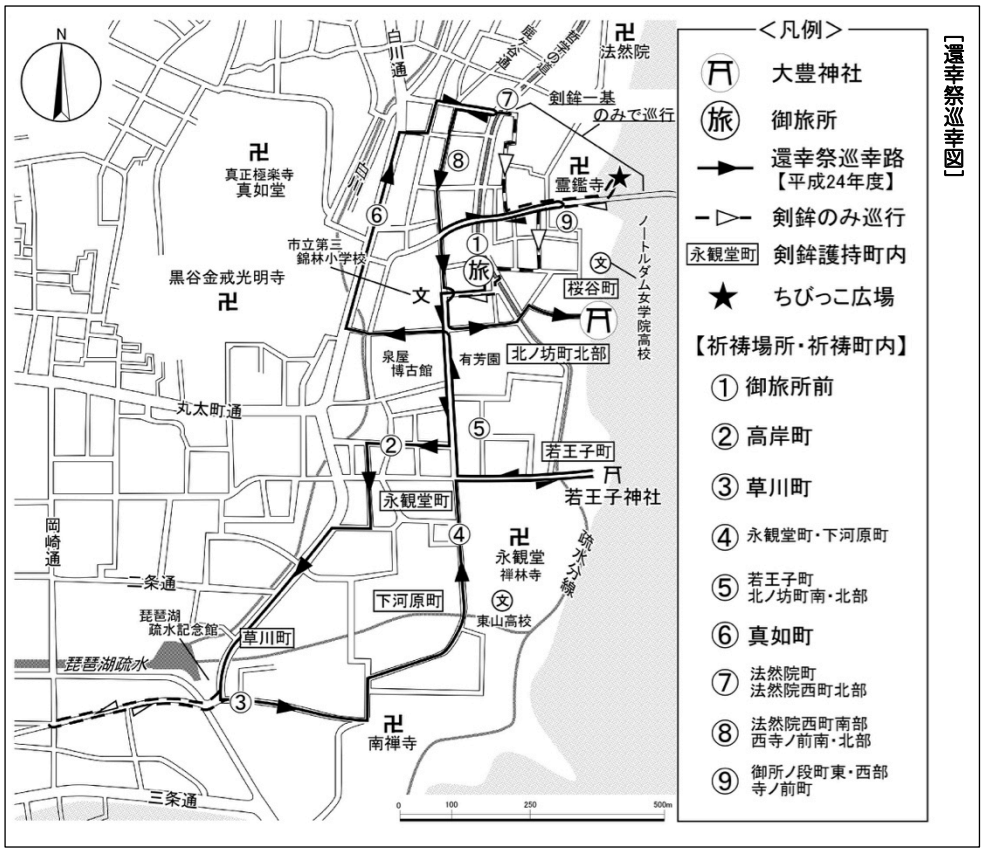
二十九日は、朝九時から鉾差しと神輿舁きの者が総出で、御旅所において提灯建てなどの準備をした。以前は鉾町の人々が御旅所の飾り付けを行った。大豊神社の鉾差しは現在三名だが、他所から応援が来る。この準備には、粟田神社の鉾差し五名、北白川天神宮の鉾差し二名、吉田神社の鉾差し一名が参加していた。提灯建ての竹は、鉾差しが神社で調達し、真竹（孟宗竹と比べ節間が広い）を用いる。一方で神輿舁きは御旅所の清掃を行う。

午後七時から神幸祭が行われる。参列者は氏子総代ら約二十名。本殿から御霊（みたま）を御旅所まで運び、神輿に移す。

三日は、神輿舁きは午後二時五十分から神輿を巡幸用に装飾する。手入れ用の水は鹿ケ谷疏水道（疏水分線）から汲み上げる。鉾差しは午後一時二十分から巡行に使用する鉾の組み立てを始め、調整をする。休憩を挟みつつ、調整後に解体し、午後三時二十分頃には解体した剣鉾および剣鉾の道具箱一式を各町のトウヤへいったん返す。また午後三時から南禅寺草川町のトウヤで、午後四時からは桜谷町のトウヤで、宮司によるゴキトウ（オハライ）がなされた。

【還幸祭】（平成二十三年五月四日）

鉾差しは、午前八時半頃より各町のトウヤ宅にて、鉾の組み立てを開始する。棹は、保管場所である御旅所から持ってくる。約一時間かけて鉾の組み立ておよび調



整を終えた後、町ごとに違う鉾差しの衣裳に着替える。履いた草鞋は、バケツの水に浸けて耐久性を高める。塩を撒き、お神酒を頂き、御旅所へ向かう。

御旅所では午前九時五十分過ぎに、出される全ての剣鉾を差す。宮司による祝詞が奏上された後、鹿ケ谷太鼓の奉納演奏がなされ、神輿の出発となる。以下、経過時間は記載の通り。

午前十時　五分　神輿出発
十時二十分　剣鉾出発
十時三十七分　下河原トウヤ宅前にて休憩
十時五十五分　出発
十一時三十三分　南禅寺境内にて休憩
十一時五十分　出発
午後十二時二十分　京都市錦林コミュニティーセンターにて昼休憩
一時二十分　出発
一時四十分　花友しらかわ（特別養護老人ホーム）にて神事・休憩
三時　五分　霊鑑寺門前にて神事
三時三十分　大豊神社到着／鉾は拝殿廻り
四時　鉾は各町のトウヤへ戻る

その後ほどなくして、神輿の宮入りがあり、御霊移しが行われた後、神輿は御旅所に運ばれる。その後、境内では氏子総代、神輿会代表、剣鉾保存会代表らが参列して神事が行われる。その頃、各町のトウヤでは、剣鉾が解体され、棹は御旅所に運ばれる。

行列次第

平成二十五年の行列次第は以下の通り。

社名旗（与丁）―前駆（騎馬神職）・口取（別当）―御榊（猿田彦）（与丁二人）―剣鉾四基（一基につき鉾差し二人）―太鼓（与丁二人）―花傘二基（与丁二人）―稚児車（トラック荷台に乗車、朱傘と御幣を伴う）―奉賛会旗（与丁）―敬神会旗（与丁）―提灯（与丁二人）―神輿（神輿舁き百五十人）―巫女（四人）―宮司（騎馬宮司）・口取（別当）―氏子総代（約二十名）

与丁とは、白丁姿の従者で、各町内からの出仕による。稚児車に乗る稚児は、役稚児ともいい、草川町と下河原町から出るが、年によっては一般募集の稚児行列が特別養護老人ホーム「花友しらかわ」で開催されることもある。

巡幸列は、御旅所から出発する。御旅所は、大豊神社から参道を下り、疏水分線を渡って哲学の道を北に五十メートルほどのところにある。そこから鹿ケ谷通に出て南行し、高岸町を通って白川通に出て、琵琶湖疏水記念館の前を通って、南禅寺参道を東行する。南禅寺の中門をくぐって鹿ケ谷通を北行、途中、若王子神社の前まで往復し、再び鹿ケ谷通を北行、大豊神社の参道を西行し、白川通を北行する。白川を渡る手前を東に折れ、鹿ケ谷通を一筋北へ行って、疏水に架かる法然院橋へ行く。

そこから剣鉾一基（平成二十三年は桜谷町の扇鉾、平成二十四年は北ノ坊町の葵鉾）が別経路で御所ノ段町へ向かう。一基は法然院橋を渡り、突き当たりを右折し、冷泉天皇桜本陵を右手に南行、霊鑑寺南辺を東行し、坂を上り「ちびっこひろば」にて鉾を差す。休憩の後、西行して剣鉾が合流する。

剣鉾以外は法然院橋から折り返して鹿ケ谷通を南行し、第三錦林小学校の北東角に当たる信号を東行する。霊鑑寺前で剣鉾と合流となる。

霊鑑寺から大豊神社への経路は、平成二十二年には疏水分線の左岸を通ったが、平成二十三年には疏水分線を渡り御旅所前を通った。

なお、平成二十二年までは、剣鉾主体で先行するA隊と、神輿が伴う後からのB隊に分かれ、経路も一部異なっていたが、平成二十三年から隊列は一つになった。

奥から扇鉾、観音鉾、葵鉾
（中尾芙貴子，平成23.5.4）

平成二十二年の行列次第は以下の通り。

A隊

前駆（騎馬神職）・口取（別当）―御榊（猿田彦）（与丁二人）―剣鉾二基（一基につき鉾差し三人）―太鼓（与丁二人）―唐櫃（与丁二人）―花傘二基（与丁二人）―稚児車（トラック荷台に乗車、朱傘と御幣を伴う）―奉賛会旗（与丁）―敬神会旗（与丁）―氏子総代（約十五名）

B隊

社名旗（与丁）―提灯（与丁二人）―剣鉾一基（鉾差し三人）―神輿（神輿舁き百五十人）―宮司（騎馬宮司）・口取（別当）―氏子総代（約十五名）

なお、永観堂町の寛保三年（一七四三）の吹散箱蓋裏に「前陳（陣の意味か）」、下河原町のトウヤの提灯に「後陣」とあり、剣鉾の巡行列が前後に分かれていた可能性が考えられるが詳らかではない。

由緒と歴史

社伝によれば、もともと椿ヶ峰を御神体とした山霊崇拝の社であったが、仁和三年（八八七）宇多天皇の御悩平癒祈願のために尚侍藤原淑子が勅命を奉じて少彦名命を椿ヶ峰に祀り創建された勅願社である。また宇多天皇の信任厚い菅原道真が合祀され、当初は椿ヶ峰天神と呼ばれた。次いで大宝大明神と呼ばれ、円成寺（仁和寺の子院）の鎮守神として寛仁年間に現在地へ遷座し、大豊大明神の神号を賜る。現在のガイドブック等では、狛ネズミの社として知られる。

その他（大豊剣鉾保存会）

京都の祭礼とくに剣鉾の情報を中心とした「京都の祭・剣鉾ＢＬＯＧ」には、大豊神社の剣鉾についても貴重な情報が記載されている。たとえば昭和五十五年（一九八〇）当時、桜谷町の菊鉾と扇鉾が交互（この年は菊鉾）で担ぎ鉾として参加し、残り五基のうち年番で一基（この年は葵鉾）が参加し鉾差しによって差された。昭和六十二年（一九八七）の神社創建千百年には、剣鉾の奉賛も考えられたが、各町での修

繕修復が間に合わず見送られた。平成二十二年には、現存の剣鉾七基全てがそろって巡行された。

現在、大豊神社の鉾差しは三名で大豊剣鉾保存会を組織している。祭礼の準備および当日には他所からの応援に頼る。平成二十三年の祭礼当日は粟田神社・八大神社・吉田神社・北白川天神宮のそれぞれから、平成二十四年の祭礼当日は粟田神社・八大神社・吉田神社・北白川天神宮・新日吉神社・嵯峨祭のそれぞれから、鉾差しが参加した。大豊の鉾差しが「十三年前に鉾の巡行が復活した」というのは、大豊の鉾差しとして育成がなされ、祭礼に参加するようになったことを意味すると思われる。

大豊神社としての剣鉾の練習は、三月から十一月まで第一・第三水曜日の夜（午後七時半から九時半にかけて）に、ノートルダム女学院中学高等学校のグラウンドで行われる。また粟田神社の境内でも、第二・第四水曜日の夜（同時間帯）に練習している。かつて鉾差しの技は、八大神社と吉田神社の鉾差しが継承していた。粟田神社は、鉾差しを八大神社の鉾差しに任せていたが、技を教えてもらい、差すようになった。大豊神社の鉾差しは当初、吉田神社の鉾差しに習っていたが、数年後には、粟田神社での合同練習に参加するようになった。二年ほど後、大豊神社でも別の練習日を設けるようになった。鉾差し同士の繋がりは深く、たとえば先の「剣鉾ＢＬＯＧ」には、八大神社の鉾差しの結婚を祝し、粟田神社の鶴鉾と大豊神社の扇鉾とが差されたこと（平成二十二年三月）が紹介されている。

平成二十一年から、幣串の先に剣鉾のマネキを象った「御幣」をお守りとして三月頃に作製し、宮司にゴキトウしてもらう。年ごとに御幣の色を変えている。祭礼当日には、鉾町の若い女子二名が鉾の巡行に付き従い、見物人に一本千円で購入してもらい、活動資金に充てる。購入者に対しては、一年の無病息災などを祈って鉾を差す。南禅寺門前などでは観光客も購入するが、基本的には氏子域の人々を対象とする。

② 剣鉾と組織

概要

現在、鉾町は六町である。そのうち桜谷町には剣鉾が二基あるので、大豊神社の氏子地域としては全七基である（留守鉾を含めると十基）。

毎年	桜谷町	菊鉾・扇鉾
平成二十三年より毎年	（北ノ坊町）	葵鉾（留守鉾あり）
平成二十四年	永観堂町	観音鉾（意匠は日月龍。留守鉾あり）
平成二十五年	下河原町	観音鉾（意匠は菊）
平成二十六年（予定）	草川町	牡丹鉾
不詳	若王子町	観音鉾（意匠は菊。留守鉾あり）

桜谷町は宮元として、毎年二基の鉾を巡行に出すが、他の地区は五年に一回の持ち回りで鉾を巡行に出すことになっていたため、例年巡行は三基であった。平成二十二年に特別に全ての鉾が出たのは先述の通りである。その平成二十二年の巡行後、北ノ坊町の葵鉾は神社預けとなり、翌年からは大豊神社と大豊剣鉾保存会によって毎年巡行することとなって、平成二十三年から剣鉾は毎年四基が巡行している。

若王子町は、鉾が巡行に出る年のみ、トウヤで鉾を飾る。永観堂町、下河原町、草川町は、鉾が巡行に出ない年もトウヤで鉾を飾る（平成二十三年は、桜谷町、永観堂町、下河原町、草川町の四町でトウヤ飾りが実施された）。

また、先代宮司の小林常喜（一九〇一-一九九八）によれば、かつては鹿ケ谷高岸町でも剣鉾が護持されていたというが、現宮司は実見したことはないという。

菊鉾および扇鉾（桜谷町）

特徴

桜谷町は宮元であるとされ、毎年、剣鉾列の先頭を務める。現在は七軒の家が毎年順番にトウヤを担当している。平成二十三年は宮川幸之氏宅の屋内（床の間）、翌

二十四年は山口行廣氏宅の屋内に飾られた。

桜谷町の鉾は二基ある。鋸の意匠はそれぞれ菊、扇であるが、いずれも飾受は「大豊大明神」の額である。なお、檜扇は大豊神社の神紋である。菊鉾は、飾受の額の片面に「寛政十戊午歳九月吉日」とあり、また剣は銘文から明治十四年に作られたことがわかる。

また、明治三十四年につくられた箱は、蓋表に「菊扇具飾」と墨書があり、当時から二基の鉾がともに奉持されていたと思われる。巡行は菊鉾が先で、扇鉾が後となっている。

鉾祭りの次第

巡行の前日にトウヤへ宮司を呼び神事を執り行う。祭礼当日、祭壇に供えていた御神酒は、出発前に鉾差しなどへふるまわれる。トウヤの家と、かつてトウヤだった家の前では、必ず鉾を家へ向けて差して（まねいて）もらう。

トウヤ飾り

床の間に「大豊大明神」の神号軸を掛ける。この軸は吉田兼雄（一七〇五―一七八七）の書である。その前に宮型を置き「大豊神社御守護」の神札を収める。祭壇には格の高い順に上段から供える。最上段には御神酒を供える。二段目に供えるのは尾頭付きの鯛、餅、スルメ・コンブ（海の幸の乾物）である。三段目には、根菜や葉物、果物など山の幸を供える。米・水・塩は高く盛られる。

剣鉾は一年間トウヤが保管し、棹のみ御旅所へ預ける。七月の虫干し時にトウヤの交代が行われる。

鉾差し

現在は、大豊剣鉾保存会の差配で、それぞれのトウヤに鉾差しが派遣される。

菊鉾（綱島明日香，平成23.4.29）

扇鉾（那須良浩，平成23.5.4）

観音鉾（永観堂町・永観堂西町）

特徴

永観堂町は、戦後の区画整理で鹿ケ谷通が延長され、町内を東西に二分されて以降、東側を永観堂町、西側を永観堂西町というようになったが、鉾の講中としては今も一体である。飾る場所は石川氏宅（永観堂西町）の屋外である。以前は持ち回りだったトウヤ飾りだが、平成二十二年から石川氏宅での飾りが続いている。飾りは蓑和田氏宅（永観堂西町）で保管されている。虫干しなどはなく、年に一度祭りの時のみ鉾を出す。鉾は二本あり、差す場合は豪華な方で、その留守時に飾るものは比較的簡素である。

鉾の飾受は「観音鉾」と書かれた額であるが、鋸の意匠が日月龍である。剣の銘文に「大豊大明神宝永観堂前鉾者古来鋸以観音梵／字加以錫杖獨鈷号観音鉾然此鋸而多閑隙故今／改以日月牒龍加以錫杖残古鋸風而又云観音鉾／寛文十庚戌年九月」「寛文年中所造造營鉾甚破於是今更造／之如古代鋸為両部矣近称唯一故省／錫杖写加古鉾之記以傳古代風流／延享三丙寅年九月／永観堂門前観音鉾搆中」とある。

寛保三年（一七四三）の吹散箱の蓋表「御先陣」、蓋裏に「大豊大明神前陳観音鉾御飛連壹具同函　奉納主　智福院圓入／維時寛保第三歳次癸亥晩秋吉日　神事當棚橋式部」とある。智福院とは、永観堂の子院の一つで尼寺である。文化元年（一八〇四）の吹散箱の蓋表には「観音戈吹散」、蓋裏には「盛化門院侍女深了院菅氏者

観音鉾（永観堂・永観堂西町）の鍔の意匠は日月龍
（綱島明日香，平成23.5.3）

観音鉾（永観堂町・永観堂西町）の留守鉾
（長谷川奨悟，平成24.5.3）

高辻亞相胤長卿之妹也侍従之日宸賑不淺延而咫尺、文化皇后澣沐之遑時、來住棚橋姓通値大豊明神之祭儀還宮而告神奉之装干、皇后皇后御感殊渥廼捨綸絹一匹密令深了院命以賜祭祀之具且禱、聖算長久擧衆踊躍即奉神鉾之旆旒于時文化改元十一月也」とある。

鉾祭りの次第

飾り付けは巡行当日の朝に行う。龍の屏風の前に軸と幕を設える。

トウヤ飾り

幔幕と神号軸「愛宕大権現／敬禮當社大豊大明神／天照大神宮」、三方および饅頭を供える。酒・塩・米・饅頭・紅白の餅・夏蜜柑・スルメ・昆布・椎茸・大根・筍を供える。軸に向かい左手に鉾を設える。

鉾差し

鉾が出る年は、大豊剣鉾保存会の差配で、それぞれのトウヤに鉾差しが派遣される。

観音鉾（下河原町）

下河原町の観音鉾（福持昌之，平成22.5.4）

特徴

下河原町では、鉾を巡行に出さない年も、トウヤ飾りは行われる。飾る場所は、町内の神事係が担当し、ここ四十～五十年は持ち回りとなっている。平成二十三年は米田氏宅（左京区南禅寺下河原町）の道沿いにある工場部分、平成二十四年は隣り並びの塩田家宅門前であった。鉾および飾りの備品は町内の長谷川氏宅（左京区南禅寺下河原）の蔵に保管されており、トラックで移送する。虫干しなどはせず、鉾を出すのは年に一度とのことである。

鉾の飾受は「観音戈」「寛永元甲子年／後陣戈改造之」と線刻された額であり、鍔の意匠は菊である。鉾の棹を立てる枠木に「菊鉾」と墨書があり、観音鉾が菊鉾とも呼ばれていたことがわかる。

鉾祭りの次第

巡行当日の朝九時から設え始め、町内組長およびこれまでのトウヤ飾り経験者たちが参加する。経験者たちの記憶と写真、および備品に注記された記号をもとに、二時間ほどで飾り付ける。

トウヤ飾り

幔幕を張り、正面に「大豊大明神」の神号軸を掛ける。この軸は桜谷町と同じく、

吉田兼雄（一七〇五-一七八七）の書である。祭壇には、三方および饅頭を供える。三方には紅白の餅と、海のもの・山のもの・土のもの・木のもの・その他を供える。海はワカメ・スルメ、山は椎茸、土はサツマイモ、木はリンゴ・バナナ・ミカン、その他は素麺・高野豆腐などである。お供えの前に剣鉾・棹（螺鈿）・提灯を飾る。提灯には「後陣」の文字と菊紋が入っている。

なお紅白の餅は、以前は紅白一つずつの大きな餅を供えていたが、現在では、町内で分けるのに便利なよう小さな餅をたくさん供える。

宮司によるオハライはない。

鉾差し

鉾が出る年は、大豊剣鉾保存会の差配で、それぞれのトウヤに鉾差しが派遣される。

その他

また稚児は下河原町もしくは草川町から出すと決まっており、平成二十三年は草川町から出すことになっていたが、喪のため下河原町から出したという。

牡丹鉾（草川町）

特徴

草川町では、鉾を巡行に出さない年も、トウヤ飾りは行われる。

飾る場所は塩田家宅である。草川町の鉾宿は、「牡丹鋒講中」と称する、もともと南禅寺町の十三軒による年番であったと伝える。「支出簿」によると、大正年間には、塩田喜兵衛、塩田平次郎、塩田末次郎、塩田直次郎、志賀谷利三郎、塩田吉之助、増岡熊三、塩田清次郎、吉川桝次郎の九軒で護持していた。戦後、三軒の塩田家に減少し、現在は塩田家一軒となっている。

かつて、トウヤの交代時にはネジ一本に至るまで足りないものはないか、前トウヤ（オクリドウヤ）・新トウヤ（ムカエドウヤ）ともに点検したという。

平成十二年頃、町内会費から神社祭礼費が支払われることの是非を巡って町内アンケートを実施した結果、有志による氏子会が成立した。結果的に氏子会には五十軒ほどの参加がある。鉾にはあまり関わらないが、稚児の選出などは氏子会の役割である。

鉾の飾受は「大豊大明神」と書かれた額で、裏面は大豊神社の神紋である扇があしらわれている。錺の意匠は牡丹である。鉾は、平成二十年頃に修理をされたという。鉾の収納箱の蓋裏に寛政二年（一七九〇）の墨書があるほか、三方の箱には天保十一年（一八四〇）、吹散箱には安政五年（一八五九）の墨書がある。三方の箱には「鉾中間中」ともある。

鉾祭りの次第

床の前に祭壇を設けるのは、四月二十九日である。午前九時頃から作業にかかり、鉾差しも来てくれて、鉾を組み立てる。

巡行の前日に執り行われる宮司によるゴキトウには、トウヤの家族と氏子数名が参列する。まず剣鉾を、次いで列席者の修祓がされ、祝詞が奏上される。その後、列席者が順に拝む。なお平成二十三年は、宮司は当所での神事終了後、桜谷町のトウヤでの神事へと移動した。

このゴキトウは、昭和二十五年から始まったもので、「支出簿」には、「特筆スベキハ本年ヨリ鉾当家ニ小林宮司ヲ招キ町内安全清祓ヒノ儀ヲ鉾神前ニ於テ十八日午后二時頃挙行ス、小林氏就任以来始テノ南部直参ニテ御膳ノ鄭重ナル飾付ケニ付賞賛ヲ浴ビ勤メノ全キヲ家内一同喜ブ」とある。

祭礼当日には、午前八時に鉾差しが来る。鉾を組み直した後、鉾に塩を振って清め、お神酒をいただいてから御旅所に出発

牡丹鉾（中尾芙貴子，平成23.5.3）

する。その後、午前九時になると、お稚児さん役の子供が来て、着替えをして、御旅所に向かう。お稚児さんの衣装は、宿で用意しているものを使う。鉾の巡行の際、牡丹鉾だけはルートを外れて、鉾宿の前で差す。午後三時頃、お稚児さんが宿に帰ってきて着替え、午後四時頃に鉾差しが戻り、鉾を棹から外して床の前に飾る。トウヤでは、祭壇の餅などの供物は、およそ八等分して、関係者におさがりとして配る。配布先は、お稚児さんを出した家や、氏子会の役員、大工の浅野氏である。浅野氏は、例年お稚児さんのトラックを出し、また下河原町や永観堂町の鉾宿の祭壇を組んだりしてくれているという。なお、鉾の解体・収納は、翌日、また鉾差しに来てもらって行う。

トウヤ飾り

床の間に「大豊大神」と書かれた神号軸を掛ける。この神号軸は、大正十五年に大豊神社の社掌小林忠一氏（先々代宮司）によって書かれたものである。塩田家では昔からこの軸を正月にも掛けており、鉾仲間の持ち回りの軸ではなかったと伝えられている。道具を収納していた長持を三つ階段状に積み、祭壇を組む。長持の上には毛氈と簾を敷く。上段には左右に三方（かんぴょう・するめ・寒天・巻昆布・高野豆腐）、中央に八足（米・酒・塩）を供える。下段には三方を三つ、右にはわらび・葉付大根、中央には重ねの紅白餅（下が白、上が紅）、左は南瓜・筍・薩摩芋と椎茸を供える。この薩摩芋と椎茸は、薩摩芋を寝かせた上に、椎茸を二つ傘のように並べて立てたものである。床の間へ向かい、左に剣鉾、右に吹散が飾られる。屋外には幔幕と提灯が飾られる。かつては棹が玄関に飾られていたが、現在は御旅所にある。

鉾差し

かつては、鉾差しはトウヤが町外の決まった鉾差しのもとに頼みに赴き、確保していた。その頃は、鉾差しに対して、朝に清めの風呂を用意し、食事や土産などもトウヤで世話をした。現在は、鉾が出る年は、大豊剣鉾保存会の差配で、それぞれのトウヤに鉾差しが派遣される。

「支出簿」の昭和三十四年の記事には、左京区一乗寺堂ノ前町の奥村弥一氏に鉾差しを依頼していたことが記載されている。

また、「支出簿」の昭和二十七年の記事に「尚備品ノ内、鉾サシ用革バンド壱ヶ、簾受金具壱ヶ、鉾花額飾付用緋総壱本」が申し送り時に不足していたとあり、鉾のトウヤ預かりの一式のなかに差し革が含まれていたことがわかる。

錺受が十六菊紋の若王子町・観音鉾（那須良浩、平成23.5.4）

その他

なお現在のトウヤは、先代の実娘が務めておられるが、かつて女性が剣鉾に触れることは許されなかったという。それは組まれた段階だけでなく、組立前や収納後でも、さらには収納する箱でさえも、同様であったとのことである。

ちなみに先代の孫は、大豊剣鉾保存会の会長に誘われて、平成二十三年から祭礼当日には剣鉾に付き従い御幣を売る役を担っている。

観音鉾（若王子町）

概要

長い間、服部家三軒と、藤田家の四軒で鉾宿をまわしてきたが、現在は町内会長が神事係を兼務し、その自宅で鉾を飾ることになっている。平成二十三年頃の巡行時には、鉾を出し、トウヤ飾りもあったが、その後は鉾の巡行がないため、飾りも行っていない。

鉾の飾受は円形で、菊があしらわれており、錺の意匠は左右六枚ずつの菊の花弁である。留守鉾も同様である。受金は、一基は桐紋が三つ、もう一基は菊紋二つに桐紋一つがあしらわれている。

剣の箱の蓋表に「大明神／新鉾」、身底に「宝暦十二年壬午九月吉日奉造之　若王子總中」とあり、若王子村で宝暦十二年（一七六二）に新鉾として誂えたことがわかる。

鉾祭りの次第

調査年次には、鉾祭り・トウヤ飾りは行われておらず、詳細は不明である。

鉾差し

鉾が出る年は、大豊剣鉾保存会の差配でそれぞれのトウヤに鉾差しが派遣される。

葵鉾（〔北ノ坊町〕・大豊神社）

概要

長い間、鈴田家、服部家、藤江家、藤田家の四軒で鉾宿をまわしていたが、平成二十二年の巡行後、葵鉾は神社預けとなり、町持ちによる護持の形ではなくなった。平成二十三年度からは神社の鉾として、毎年巡行に出ている。

葵鉾（那須良浩，平成23.5.4）

留守鉾の飾受は「大豊大明神」と線刻された額で、錺の意匠は葵である。額の縁、受金に立ち葵紋があしらわれる。剣の茎には「安政五年戊午」の銘があり、安政五年（一八五八）の製作であることがわかる。

もう一方の鉾の飾受は「大豊大明神」と鋳込まれた額で、錺の意匠はやはり葵である。額の縁は檜扇紋、菊紋、そして龍があしらわれている。受金は、扇紋が二つ、立ち葵紋が一つである。

「京都の祭・剣鉾ＢＬＯＧ」において、「粟田神社の葵鉾と瓜二つ」と評されている。剣の箱には、「明治七年九月吉日／神鋒用／光雲寺村」と墨書があり、かつて「神鉾」と認識されていたことがわかる。飾箱の蓋裏にも同年墨書で「光雲寺村」がみえる。また、吹散箱には、「東山　光雲寺村」とある。

鉾祭りの次第

現在、鉾祭り・トウヤ飾りはない。

鉾差し

現在は、神社預かりの鉾として、大豊剣鉾保存会の差配で、毎年、鉾差しによって鉾が出ている。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

村上忠喜「岡崎界隈の祭礼行事」（独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室編『京都岡崎の文化的景観調査報告書』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、二〇一三年）

「京都の祭・剣鉾ＢＬＯＧ」（http://kenboko.kyo2.jp/）　大豊神社の剣鉾に限らず、各地の剣鉾について、祭礼時のみならず練習の様子も紹介しており、貴重な現在進行形のレポートである。

平成十九年（二〇〇七）

五月二十三日付「大豊神社　五月三日　御旅所前・剣鉾の鉾差し練習」

六月四日付「大豊神社　五月四日　永観堂町・剣鉾の鉾差し練習」

平成二十一年（二〇〇九）

四月二十六日付「大豊神社で御幣作り」

五月三日付「大豊神社二〇〇九・御旅所飾り付け＆牡丹鉾調整」

平成二十二年（二〇一〇）

二月十一日付「大豊神社二〇一〇年氏神祭・剣鉾ニュース」

三月三十一日付「大豊神社　哲学の道で鉾差し披露四月四日」

五月三日付「大豊神社・御旅所前にて」

剣鉾祭礼記録・古文書

黒川道祐『日次紀事』（一六七六年）
白慧『山州名跡志』（一七一一年）（服部清一郎家文書『史料 京都の歴史 第八巻 左京区』京都市、一九八五年所収）
〔大豊大明神当所神事式ニ付覚〕享保四年（服部清一郎家文書『史料 京都の歴史 第八巻 左京区』京都市、一九八五年所収）
南禅寺牡丹鋒講中所蔵「支出簿」（大正六年から昭和四十六年までのトウヤの支出およびその時々の取決めなどが記載される）
黒田一充『祭祀空間の伝統と機能』（清文堂、二〇〇四年）
創祀千八百年　藤森神社　編集部編『創祀千八百年　藤森神社』（藤森神社、二〇〇七年）

（土居 浩）

紫野今宮神社 今宮祭

毎年五月五日 神幸祭
五月十五日に近い日曜日 還幸祭
今宮神社
京都市北区紫野今宮町

① 祭礼と由緒

地域の概要

今宮神社は、京都市北区紫野今宮町に鎮座する。近隣は大徳寺などの古刹が多く点在する地域である。平安京の北端に位置する大内裏（現在の千本丸太町周辺）から更に北へ約三キロメートルの地点にあり、天皇家直轄地である洛北七野のうちの一つ、紫野の内にある。大己貴命、事代主命、奇稲田姫命、素盞嗚命を主祭神として祀る。北区・上京区にまたがる氏子区域をもっている。

今宮祭に鉾を出す町が集中する地域は西陣と呼ばれ、糸や織物関係の職に従事する人が多く住む地域である。各町には現在も一、二基の鉾と吹散が伝わっているが、特に吹散には、この祭りが西陣の祭りであることを実感させる凝った織りや刺繍が施されている絢爛豪華なものが多く見られる。

今宮神社（内田みや子，平成23.5.5）

現在、今宮祭には九町から各一基ずつ剣鉾（以下、鉾とする）が出される。戦後数年まで鉾は十二町から出されていたが、住人の高齢化や新しい住民の増加、祭りに参加する人が少なくなったなどの諸事情によって、現在、上善寺町（沢潟鉾）、芝大宮町（蓮鉾）、観世町（蝶鉾）の三町は祭りに鉾を出すことを止めている。また戦前は各町が神幸祭、還幸祭の両日ともに鉾を出していたが、次第に祭への参加方法も簡略化され、現在両日ともに出すのは東千本町（扇鉾）、歓喜町（松鉾）の二町だけである。そのほかの七町が鉾を出すのは、神幸祭・還幸祭のいずれか一日となっている。

祭礼次第

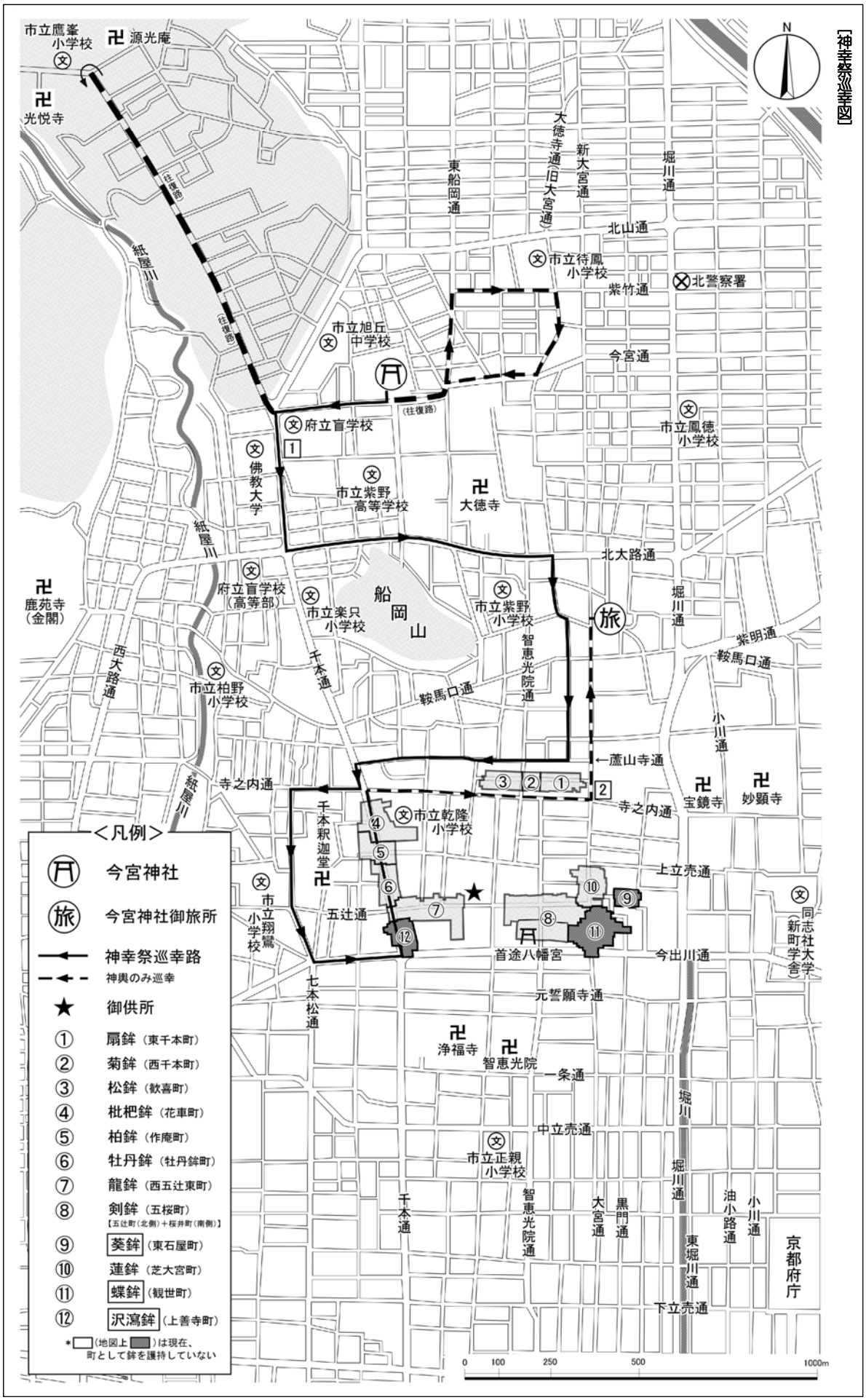
今宮祭は神幸祭と還幸祭、その間に行われる湯立祭（五月第二土曜日または日曜日）から構成される。鉾は神幸祭と還幸祭の神輿渡御に加わる。

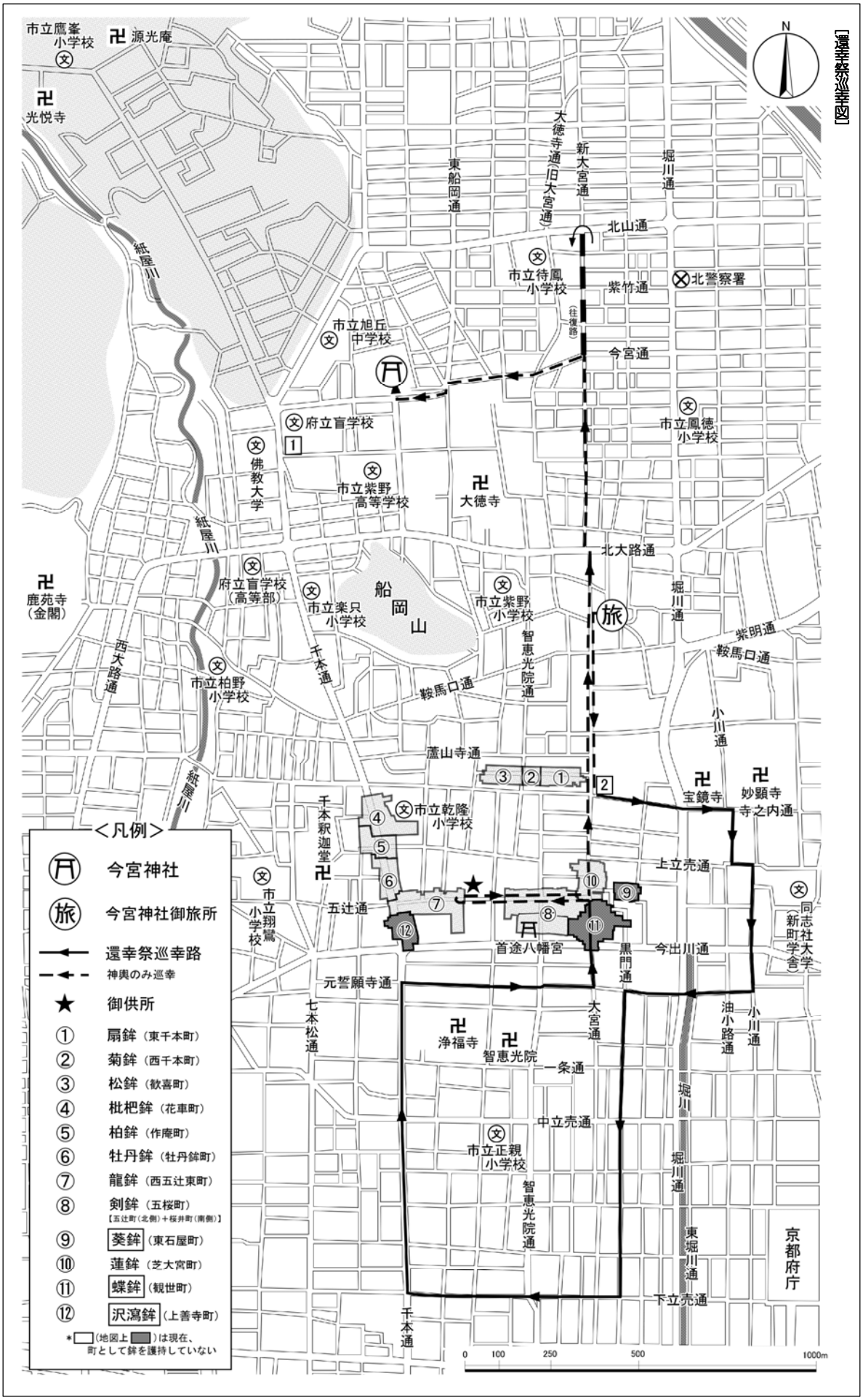
以下に、神幸祭の神輿渡御に加わる六町（東千本町、西千本町、歓喜町、花車町、作庵町、牡丹鉾町）の当日の概要を記す。

神幸祭の前日または当日の午前中に、各町で鉾の組立てなどの準備が行われる。それが終わると正午、正装に着替えて鉾とともに徒歩で神社に向けて出発する。神社に到着すると、南門から境内に入り、一町ごとに本殿前まで進む。本殿前には鉾を立てかける台が設置されており、ここにいったん鉾を立てかけて吹散を装着する。鉾の準備が整うと神職が鉾に祈禱を捧げ、一同はその後方で低頭して控える。その後、神職は一同に対して修祓を行う。それが終わると、鉾から吹散を外し、鉾を持って神社を退出する。修祓を受ける順番は、各町の神社へ到着する進捗具合によって前後するが、概ね、渡御列での並び順（行列次第を参照）に即している。

渡御列は、千本通沿いの歩道（佛教大学前）ですでに修祓を終え待機している他の町と一緒に、先に神社を出発して鷹峯方面へ巡行している神輿が下ってくるのを待つ（図中1）。神輿が千本通で合流すると渡御列が完成し、渡御が始まる。

午後五時ごろ、ようやく渡御列が御旅所に到着し、神輿は御旅所に常設されている建屋（「神輿宿り」と呼ばれる）に安置される。神輿は還幸祭までの約十日間、御


[神幸祭巡幸図]
N
市立鷹峯小学校
源光庵
光悦寺
紙屋川
(往復路)
東船岡通
大徳寺通(旧大宮通)
新大宮通
堀川通
北山通
市立待鳳小学校
北警察署
紫竹通
市立旭丘中学校
今宮通
府立盲学校
市立鳳徳小学校
佛教大学
市立紫野高等学校
大徳寺
北大路通
鹿苑寺(金閣)
府立盲学校(高等部)
市立楽只小学校
船岡山
市立紫野小学校
智恵光院通
紫明通
鞍馬口通
西大路通
市立柏野小学校
千本通
小川通
蘆山寺通
寺之内通
宝鏡寺
妙顕寺
市立乾隆小学校
千本釈迦堂
上立売通
市立翔鸞小学校
五辻通
首途八幡宮
今出川通
同志社大学(新町学舎)
七本松通
元誓願寺通
浄福寺
智恵光院
一条通
堀川
中立売通
市立正親小学校
黒門通
油小路通
東堀川通
下立売通
京都府庁
0 100 250 500 1000m
＜凡例＞
今宮神社
今宮神社御旅所
神幸祭巡幸路
神輿のみ巡幸
御供所
① 扇鉾（東千本町）
② 菊鉾（西千本町）
③ 松鉾（欽喜町）
④ 枇杷鉾（花車町）
⑤ 柏鉾（作庵町）
⑥ 牡丹鉾（牡丹鉾町）
⑦ 龍鉾（西五辻東町）
⑧ 剣鉾（五桜町）【五辻町（北側）＋桜井町（南側）】
⑨ 葵鉾（東石屋町）
⑩ 蓮鉾（芝大宮町）
⑪ 蝶鉾（観世町）
⑫ 沢瀉鉾（上善寺町）
*□（地図上■）は現在、町として鉾を護持していない


【還幸祭巡幸図】
N
市立鷹峯小学校
源光庵
光悦寺
紙屋川
東船岡通
大徳寺通（旧大宮通）
新大宮通
堀川通
北山通
市立待鳳小学校
紫竹通
北警察署
（往復路）
今宮通
市立旭丘中学校
府立盲学校
市立鳳徳小学校
佛教大学
市立紫野高等学校
大徳寺
北大路通
鹿苑寺（金閣）
府立盲学校（高等部）
市立楽只小学校
船岡山
市立紫野小学校
智恵光院通
紫明通
鞍馬口通
西大路通
市立柏野小学校
千本通
小川通
蘆山寺通
宝鏡寺
妙顕寺
寺之内通
千本釈迦堂
市立乾隆小学校
上立売通
市立翔鸞小学校
五辻通
首途八幡宮
黒門通
今出川通
同志社大学新町学舎
元誓願寺通
七本松通
大宮通
浄福寺
智恵光院
油小路通
一条通
堀川
中立売通
市立正親小学校
東堀川通
京都府庁
下立売通
0 100 250 500 1000m
＜凡例＞
今宮神社
今宮神社御旅所
還幸祭巡幸路
神輿のみ巡幸
御供所
① 扇鉾（東千本町）
② 菊鉾（西千本町）
③ 松鉾（歓喜町）
④ 枇杷鉾（花車町）
⑤ 柏鉾（作庵町）
⑥ 牡丹鉾（牡丹鉾町）
⑦ 龍鉾（西五辻東町）
⑧ 剣鉾（五桜町）
【五辻町（北側）＋桜井町（南側）】
⑨ 葵鉾（東石屋町）
⑩ 蓮鉾（芝大宮町）
⑪ 蝶鉾（観世町）
⑫ 沢瀉鉾（上善寺町）
＊□（地図上■）は現在、町として鉾を護持していない

今宮神社にて祈禱をうける（内田みや子，平成 23.5.5）

御供所神事（内田みや子，平成 24.5.13）

旅所におかれる。鉾は御旅所まで行かず、千本通寺之内あたりで各町へと帰って行く。

還幸祭の神輿渡御に加わる五町（東千本町、歓喜町、西五辻東町、五桜町、東石屋町）は、前日または祭り当日に鉾の組立てなどの準備を行う。当日の正午、昼食や着替えなどを済ませた町の人々が鉾のもとへ集合し、各町から鉾が出発する。御旅所には行かず、大宮通寺之内あたりで車太鼓を先頭に、列を成して待機する（図中 2）。その間、各鉾は神職より修祓を受ける。午後一時半、神輿が御旅所を発つと、列の先頭で待機する車太鼓に連絡が入り、渡御列は進み始める。還幸祭の渡御列は神幸祭と同じ構成であるが、巡幸路は大きく異なる。還幸祭では御旅所を出発し、大宮通、小川通、黒門通、下立売通、千本通、元誓願寺通を経て、再び大宮通に至り、今宮神社に戻る巡行路を行く。氏子範囲のおおよそ南半分を廻ることになる。午後四時、鉾が再び大宮通に戻ってくる。鉾については特に儀式もなく、各町へ向けて帰って行き、町に着くと解体作業が行われる。

午後六時、神輿が大宮通に到着、そこから五辻通を西に入ったところにある一式町にて御供所神事が行われる。通りに面したH氏宅前を「御供所」としている。神職が神輿に対して修祓、献饌を行い、氏子による玉串奉奠の後、撤饌が行われる。神事が終了すると神輿は再び大宮通へ出て北上し、北山通まで巡幸した後、神社へ戻る。

行列次第

行列は次のとおりである（平成二十三年度の次第より）。

○神幸祭

車太鼓―社名旗―先駆神職―高張提灯―剣鉾（松鉾、枇杷鉾、牡丹鉾、柏鉾、菊鉾、扇鉾）―子供鉾―八乙女旗―八乙女―花車―子供御輿―獅子―真榊―伶人―幸鉾―御楯―御矢―御弓―御剣―御幣―西社町（童子）御車―高張提灯―先御輿（鷹）―高張提灯―中御輿（アゲイ）―高張提灯―大宮御輿―宮司―高張提灯―役員。

○還幸祭

神幸祭と同じであるが、剣鉾の構成が異なる。

車太鼓―社名旗―先駆神職―高張提灯―剣鉾（松鉾、五桜町の剣鉾、葵鉾、龍鉾、扇鉾）―以下省略。

現在のような渡御列の構成になったのがいつかははっきりしない。昭和十六年（一九四一）の『今宮祭列書』（今宮神社発行）には十二の鉾の名前が見られるが、昭和四十七年（一九七二）のものでは神幸祭、還幸祭ともに名前が見られるのは扇鉾、菊鉾、松鉾の三本で、神幸祭のみ見られるのが牡丹鉾と柏鉾、還幸祭だけに見られるのは葵鉾、剣鉾、枇杷鉾、龍鉾である。蓮鉾、蝶鉾、沢瀉鉾については この時すでに祭りに出ていなかったようで記載がない。扇鉾と松鉾は毎年順番が固定されているが、他の町はくじ引きで順番を決めるということである。

由緒と歴史

今宮祭は正暦五年（九九五）の船岡山御霊会にその起源を求めることができる。

『日本紀略』によれば、この年、都で疫病が流行し多くの死者が出た。これを鎮めるため朝廷は神輿二基を造り船岡山上に安置し、僧たちに仁王経を唱えさせ、音楽を奏上するなどして御霊会を行った。都中から多くの人が御幣を捧げ集まったため、町は人で溢れた。御霊会は一日のうちに終わり、のちに神輿は難波の海に放たれたとある。

さらにこの御霊会から五年後、長保二年（一〇〇〇）の『本朝世紀』の記述によれば、再び天災や疫病が都を襲い、このため翌年の長保三年（一〇〇一）に御霊会が行われたとある。この時、朝廷は船岡山ではなく紫野に「神殿三宇、瑞垣等」、つまり社殿を建造し、そこで御霊会を行った。御霊会に集まった人々はこの社を「今宮」と呼んだ。「今宮」とは新しく祀った神社という意味で、古くからこの地で祀られていた疫社に対する呼び名であったと考えられる。この時に今宮神社が創建され、ここで行われる御霊会は後々「紫野御霊会」と人々に呼ばれるようになった。当初は災害や疫病の流行などに応じて臨時に行われていたが、後に恒例化し、やがて「紫野今宮祭」という呼称が一般化し現在に至る。

今宮祭における鉾の史料上の初見は『康富記』応永二十九年（一四二二）五月十四日条である。但しこの当時の鉾が現在でいうところの「剣鉾」かどうかの詳細は不明である。今宮祭に関しては祭りの実態を語る史料が乏しく、現在の祭りにつながると確信できる史料は近世に入ってからである。

今宮祭がより現在の形に近づくのは、織田信長が本能寺で討たれ豊臣秀吉に政権が移った時である。秀吉は京の町の景観が大きく変わるような区画整理を積極的に行った。その影響を受け今宮神社の御旅所も移された。これが現在の大宮通にある御旅所である。『時慶卿記』文禄二年（一五九三）によれば、「旅所已下初テ被立候、御幸道等改ト云々」と記されており、御旅所の移設だけではなく、それにともなって神輿巡幸の道順も改められたようである。この時整備された道順が現在の巡幸路のもとになっている。そして慶長年間（一五九六-一六一五）の後半に、理由は不明であるが、還幸祭の日がそれまでの五月九日から十五日に変更された。

また、明暦四年（一六五八）に刊行された『洛陽名所集』には、「祭礼にはたてほこ十二本もたせ産人供奉しける事なり」という記載がある。「十二」という数から、この時すでに現在と同じ十二の鉾が出されていたと考えられる。

豊臣秀吉の時代から百年後の元禄期になると、今宮祭は低迷期を迎える。それを挽回したのが将軍徳川綱吉の生母である桂昌院であった。桂昌院は大徳寺周辺の出身と伝えられており、自身の氏神が廃れていくのを見過ごせなかったのか、元禄七年（一六九四）に今宮神社社殿の再建を行った。そしてその翌年、元禄八年（一六九五）の今宮祭は善美を尽くしたと伝えられている（『基凞卿記』）。そして氏子の範囲について、『京都御役所向大概覚書』享保二年（一七一七）には「東ハ西堀川限、西ハ七本松通限、南ハ二条御城番北之方御役屋敷迄、北ハ千束村上限」とあり、これは現在の氏子区域とされている範囲とほぼ一致する。

その他

平成十四年に、今宮祭の鉾の衰退を懸念した一個人の呼びかけにより、各町の有志が集まって「今宮鉾研究会」が発足した。今宮神社の神職や学識者を交え研究会を開くとともに、各鉾の現状についてのヒアリングや、町保有の古記録の収集と解読、一部の鉾の計測などの本格的な調査が行われた。調査結果は平成十七年に報告書としてまとめられている。

② 剣鉾と組織

扇鉾（上京区 東千本町）

概要

東千本町は寺之内通の北一筋目の通りを挟んだ両側町である。町の東端は大宮通である。この通りには東から順に、東千本町、西千本町、歓喜町の三町が隣接している。近世以降、東千本町は、今宮祭に出る十二本の鉾の中でも「親鉾」と称される扇鉾の管理と運営を行っている。現在でも神幸祭、還幸祭両日とも祭りに参加しており、渡御列における順番は神輿のすぐ前を行くことが決まっている。

扇鉾（東千本町）の巡行（西野文彦，平成 23.5.15）

東千本町の居祭り（内田みや子，平成 23.5.15）

現在は鉾の棹を短く切断し、台車に載せて曳く方式をとっている。

東千本町では巡行に使用するものと、当屋宅で飾るもの、計二基の鉾がある。いずれも製作年代は未詳である。二基ともほぼ同じ意匠で、群雲と満月の絵柄の扇と州浜を組み合わせた形の受金の周りを囲むように六本の扇と二本の羽（または植物の葉）を象った錺が付く。錺受と受金は一体型で、巡行に使用するものはこの州浜の一つ（最下部）が菊紋になっている。二基ともに剣の茎に近い部分に十六菊紋がついている。吹散は二流あり、朱地に三本の扇を円形に組み合わせた紋を織り出したものを巡行用とし、緑地に金糸で十六菊紋の刺繍が施されたものを当屋宅で飾る。劣化の度合いから見て、後者の方が古いものと思われる。

祭りへの参加にあたっては、有志とはいいつつ、ほぼ町内の全戸が参加し、鉾の組立てや巡行については町会長を中心に行われる。当屋は町内の輪番制で、家の並び順に順番が巡ってくるしくみである。当屋宅では祭りの期間中、巡行しない方の鉾が飾られる。鉾の部品などの保管は、かつては町内各戸で分担していたが、現在は今宮神社の倉庫に一括して保管している。

鉾祭りの次第

神幸祭の当日、午前八時半にN氏宅前にて鉾と台車の組立てを開始する。これには毎年、手順をよく知っている二人の方が担当される。九時ごろから当屋宅で当屋飾りの準備が並行して行われる。巡行用、当屋飾り用、それぞれの鉾の組立てが完了すると、巡行用は台車に、居祭り用は当屋宅内に設置される。準備は十時半ごろに終わる。これらの準備は男性を中心に行い、女性は洗い米や酒などの供物、巡行の際の衣装の準備を行う。巡行に参加する人は一度自宅へ戻って昼食をとり、裃姿に着替えて再び集合する。正午、今宮神社へ向けて出発となるが、東方の大宮通に出る前に、西隣の西千本町との境まで行き、そこでUターンし、再び当屋宅前まで戻ると一同記念撮影を行い、大宮通を北進して神社へ向かう。

巡行の際の順列は、最初に菊紋が描かれた高張提灯二人、赤いビロード地に金の菊紋が入ったカバーを被せた剣の箱持ち一人、同様の意匠の吹散の箱持ち一人が行く。その後を鉾を載せた台車と、電線を避けるための竿持ちが続く。台車は三人で曳く。鉾の後に裃・袴に菅笠姿で、町会長をはじめとする七名が行く。現在では高張提灯や鉾などの担当は学生アルバイトを募って人手不足を補っている。神社から御旅所までについては祭礼次第で述べたので省略する。

午後四時、大宮通で御旅所へ向かう神輿の渡御列から離れ町内へ戻ると、出発時同様、町内を一巡、N氏宅前にて鉾の解体を行う。鉾は棹を外した鉾頭の部分を当屋宅に運び、居祭り用の鉾と並べて飾る。解体した部品は、還幸祭の日まで町内で分担して保管する。片付けが終わるとその日は解散となる。

還幸祭の日も神幸祭同様、午前八時にN氏宅前にて鉾の組立てが行われる。組立てが終わると、午後からの神輿渡御が始まるまで、巡行に参加する人は自宅にて待機となる。

午後一時、巡行に参加するため町を出発する。この時、御旅所までは行かずに、

大宮通寺之内まで出て、神輿が御旅所を出発したとの合図があるまで待機する。この間、神職から修祓を受ける。出発の合図があると氏子区域を神輿とともに巡行する。午後五時、再び大宮通に戻ってくるが、大宮通から五辻通を西進して御供所に向かう神輿とは別れ、鉾はそのまま大宮通を北進し東千本町へ戻る。神幸祭の日と同様に町域を一巡し、当屋宅前で停止し巡行を終える。その後、町で待機していた人々によってすぐに両方の鉾の解体・撤収作業が行われる。一方、女性二、三名により、居祭りの供え物を町内各戸へ配り歩く。各家では供え物を受け取り、用意していた湯飲みで献酒を一杯いただく。

鉾の部品すべてがトラックに積まれ今宮神社の倉庫に収納されると祭りは終了となる。後日、町内で宴席が設けられる。

鉾差し

かつては鉾差しが来て鉾を差していたらしいが、ある年、鉾が転倒して負傷者が出たため、巡行用の鉾は棹を短くして台車に据える現在の形になったとのことである。それが始められた年代は不明である。鉾は周囲を幕で囲った台車の上に、吹散が神社からいただいた御幣とともに据えられ、渡御列に加わる。これを町の人々は荷鉾と呼んでいる。

トウヤ飾り

鉾の組立てと並行して当屋宅の飾り付けが行われる。その年の当番に当たった家では、道行く人に見てもらえるように、通りに面した部屋が用いられる。当屋宅の間取りによってはガレージに設えられる場合もある。当屋宅の表には扇を三つ円形に配した三つ扇の紋を染めた幔幕と、菊紋入りの提灯が飾られ、室内に入ると正面に「今宮大神宮」と書かれた神号軸が掛けられ、その前に三段の八足が設置される。天井からは紫地に三つ扇と「昭和十一年」の年号が染め抜かれた幕と、鈴、吊り燈籠が下げられる。八足の左側に古い方の吹散と鉾が飾られる。右側には新しい方の吹散と巡行用の鉾を飾るためのスペースを空けておく。

八足には、上段中央に鏡と水器を載せた三方、その左右に御神酒が供えられる。中段には赤飯、昆布、するめ、大根が三方に載せて供えられる。下段には榊と紅白餅、小皿に乗せた洗い米と塩が供えられる。居祭りは神幸祭から還幸祭が終わるまでの期間中行われる。

その他

東千本町には、江戸時代の今宮祭における鉾町のようすを詳細に記録した『神事記録帳』が伝わっている。それには、文化十四年（一八一四）から昭和四十二年（一九六七）までの祭礼関係の出来事が記録されている。記録が始められたのは文化十四年からであるが、当時の筆者によって分散していたそれ以前の記録も収録されたため、実際には文化元年（一八〇四）からの記録を見ることができる。特に文化七年（一八一〇）の記事には、その年の今宮祭の準備物やしきたり、作法が詳細に記されている。今宮鉾研究会による調査報告書『今宮鉾　平成の記録』（平成十七年発行）にはその部分の翻刻と解読がされている。『神事記録帳』は、現在は京都市歴史資料館にて保管されている。

以下、他町については、東千本町と重複する部分は省略しつつ、各町の特徴的な部分を中心に報告を行う。

菊鉾（上京区　西千本町）

概要

西千本町は大宮通から寺之内通を西へ入ったところにある。十五軒程度からなる。祭りに鉾を出す十二町の中で最も戸数が少ない町である。東千本町と隣接し、歓喜町とは路地を一本挟んで隣接している。

現在、西千本町は神幸祭にのみ参加しており、鉾持ち役の四名が鉾を地面に対して水平にして運ぶ方式で巡行する。巡行の間、鉾を差すことはない。かつては町内から鉾持ち役を選んでいたが、現在は京都市内の大学生をアルバイトに雇い、この役に当たらせている。

鉾は二基あり、それぞれ、剣の茎に天保十三年（一八四二）の銘と、明治八年（一八七五）の銘が見られる。前者は平成二十一年に京都府の助成を受け全面修復し、巡行に使用している。後者は京都市歴史資料館にて保管されている。「菊鉾」

菊鉾（西千本町）の巡行
（内田みや子，平成 23.5.5）

菊鉾の組立て（内田みや子，平成 23.5.5）

の名の通り、鉾の鍔は立体的な造形の枝菊で、雲型の中央に三日月を配した受金（鍔受と受金は一体型）の周囲をこの枝菊が飾っている。棹は総漆塗りで菊花の鍔金具が全体に散らすように打ち込まれた意匠となっている。吹散は新旧二流あり、二流ともほぼ同じ意匠で、紫地に金糸で十六菊紋が刺繍されている。古い方には地模様として鳳凰の紋があしらわれている。

鉾の保管は町内で行うが、火災などで鉾が損なわれるリスクを回避するために、町内を一組あたり三～四軒の四組に分け、各組で鉾の部品を分割し保管している。祭りを中心になって行う役も、この四組の輪番である。しかしもともと町内の戸数が少ないため、実際には町会長を中心に町内総出で一連の作業が行われる。当屋もまた四組の輪番制で、家の並び順に順番が巡ってくる。当屋宅では神幸祭から還幸祭の祭りの期間中、鉾を飾る。

鉾祭りの次第

神幸祭の当日、毎年、午前八時半からY氏宅前にて組立てを開始する。以前は祭日の前日から準備を行っていたが、次第に短縮し、祭りの当日ですべてを完結させるようになったとのことである。以降、神幸祭での次第は東千本町と同じである。午後四時、寺之内通を東進して御旅所へ向かう神輿の渡御列から離れ、智恵光院通を通って町内へ戻ると、すぐにY氏宅前にて鉾の解体を行う。棹を外した鉾頭を当屋宅へ運び飾る。その夜は「足洗い」と称して、町近隣の飲食店で宴席が設けられる。

鉾差し

子供の時から町内にお住いのT氏から、昭和三十年ごろ、高校生の時に東山の方へ鉾差しを呼びに行った経験があるという話をうかがうことができた。東山の造園業または農家など、力仕事に従事していた人に依頼することになっていたようである。鉾差しに対する花代はもちろん、衣装や食事、入浴の世話まで町内で行っていた。そのころまでは鉾を差していたとのことである。

トウヤ飾り

当屋宅の飾り付けは鉾の組立てと並行して行われる。当屋宅では通りに面した部屋に飾りを設置する。部屋の表には菊の紋を染めた幔幕と「菊鉾」と書かれた提灯が飾られる。部屋の正面に「今宮大神宮」の神号軸と、明治新政府から明治三年（一八七〇）に下された、菊紋入りの祭具の使用を許可する旨の文書を表装した掛け軸が掛けられる。その左右に吹散が掛けられる。天井からは吊り燈籠が下げられる。

掛け軸と吹散の前には二段の八足が設置され、上段中央に神社から頂いた御幣を飾り、その左右に御神酒、赤飯、昆布、するめ、大根が三方に載せて供えられる。下段には榊と紅白餅、洗い米と塩が供えられる。八足に向かって左脇には鉾頭を立てて設置するための木製の台が置かれる。巡行から戻った鉾がここに飾られる。

松鉾（上京区 歓喜町）

概要

歓喜町は寺之内通の北一筋目の通りを挟んだ両側町である。西千本町とは智恵光院通を挟んで隣り合っている。もともとこの辺りに歓喜寺（現在は上京区鶴山町）があったことから歓喜寺町と呼ばれていたが、明治十二年（一八七九）に歓喜町となった。

渡御列には神幸祭、還幸祭両日ともに参加しており、渡御列における順番は、車太鼓―社名旗―先駆神職―高張提灯に続き、鉾の中で一番と決まっている。鉾を地面に対して水平にして運ぶ方式で巡行する。巡行の間、鉾を差すことはない。

歓喜町では現在、巡行に使用するものと、留守鉾と呼ばれ巡行には使用しないもの、計二基の鉾がある。留守鉾の方は損傷が激しく、二十五年ほど前（昭和六十年代）から蔵に収納したままになっている。いずれも製作年代は未詳である。巡行に使用する鉾の剣の茎に近い部分に十六菊紋が一点ついている。鉾頭を彩る鍑は松が枝と松笠、受金は雲型の中央に飛鶴を配している。鍑受と受金は一体型である。棹は総漆塗りで、剣に近い方と松端部には七宝紋様、その間の部分には雲（または波）紋様の鍑が全体に散らすように打ち込まれた意匠となっている。吹散は四流を確認することができた。朱地に白糸で菊紋が刺繍されているものが二流、緑地に金糸で菊紋が刺繍されているものが一流、紫地に三階松を織り出したものが一流である。巡行には最も新しい朱地に菊紋入りのものを使用する。

現在、町内は三十七戸からなっており、それを六組に分け、毎年、町内会の会議で組ごとに組長を選出している。さらにその組長六人の中から、祭りの実行責任者として会長、副会長、会計以下役員が選出される。三役が中心となって、祭りに参加するための有志を募るなど一切を執り仕切る。当屋の制度はない。歓喜町が所有するガレージの奥にある集会所がお飾りの場となる。集会所では祭りの期間中、鉾が飾られる。鉾の部品などはガレージ奥にある倉庫に一括して保管されている。

鉾祭りの次第

歓喜町は神幸祭、還幸祭の両日とも参加する。

神幸祭の前日に集会所の掃除をし、集会所の祭壇や鉾の準備を行う。役員を中心に、かつて祭りに参加していた年配者の協力を得ながら作業が進められる。

神幸祭の当日、午前九時に集会所に提灯が吊るされ、町の人々が集合し始める。渡御に参加する人は裃の着付けをする。また、鉾頭を棹に取り付ける作業もこの時に行う。会長夫人を中心とする女性たちが集会所に集まった人々にお茶をふるまうなどの世話をする。十一時半、会長のあいさつがあり、御幣持ち、提灯持ち、吹散・剣の箱持ちのみ町内を巡行する。その後今宮神社へ向けて出発となる。

袴姿の会長とお供一人、菊紋が描かれた高張提灯二人、赤いビロード地に「禁裏御所御寄附」と刺繍されたカバーを被せた剣の箱持ち一人、同様の意匠の吹散の箱持ち一人が行く。その後を四人の鉾持ちが鉾を地面に対して水平にして運び、鉾頭の台座（木製の十字台）と吹散持ち二人、その後を裃・袴姿のお供五人が行く。現在では高張提灯や鉾などの担ぎ手に学生アルバイトを募って人手不足を補っている。以降、神幸祭でのようすは東千本町と同じである。

午後四時、寺之内通を東進し、御旅所へ向かう神輿の渡御列から離れ、智恵光院通を通って町内へ戻ると、出発時同様に、御幣、提灯、箱持ち、鉾のみ町内を一巡する。それが終わり鉾が集会所へ戻ってくると解体を行う。棹を外した鉾頭を集会所に納めて解散となる。

松鉾（歓喜町）（長谷川奨悟，平成 23.5.15）

還幸祭の日も神幸祭同様、午前八時半に人々は集会所に集合し始める。装束を整え、剣の手入れなど巡行の準備を行う。正午過ぎ、町内を一巡した後、巡行に参加するため、町を出発して寺之内通の鉾の集合場所へ向かう。以降、還幸祭でのようすは東千本町と同じである。

午後五時、巡行を終え町内へ戻るとすぐ片付けを始め、その日のうちに終了する。

鉾差し

七十九歳の古老から、三、四十年前（昭和五十～六十年代）までは鉾を差していたというお話をうかがうことができた。東山（他の方は鷹峯とおっしゃっていた）から鉾差しを呼んでいたとのことである。その際、近くの仕出し屋からとったお膳や自家製の料理をふるまったり、銭湯を使ってもらったりするなど、かなりの出費があった。その費用は町会長が支出していたとのことである。

トウヤ飾り

鉾の組立てと並行して集会所の祭壇の飾りつけが行われる。歓喜町ではこれについて特に名称はなく単に「飾り」と呼んでいる。飾りは集会所で行われる。集会所の表には三階松紋を染めた幔幕と、菊紋入りの提灯が飾られる。室内に入ると正面に「今宮大神宮」と書かれた神号軸が掛けられ、その前に二段の八足が設置される。天井からは、御簾と鈴、吊り燈籠が下げられる。八足の左右には二枚ずつ計四枚の吹散が掛けられる。八足に向かって左側には神社からいただいた御幣を立てて置く。八足正面には鉾頭を立てて飾るための木製の台が設置されており、神幸祭から還幸祭の間はそこに鉾を飾る。

八足には、上段中央に昆布とするめを載せた三方、その左右に御神酒が供えられる。下段には洗い米と塩を載せた三方、紅白餅の膳、献酒が供えられる。

その他

歓喜町には、『松鉾歓喜町文書』が伝わっており、鉾同様に町のガレージ奥の倉庫にて保管されている。江戸中期（宝暦年間）以降の祭礼関係の町内での取り決めなどが記載されている。なかでも嘉永元年（一八四六）の「富之松御剣鉾由緒書」には『日本紀略』の今宮祭の記事を引用しつつ、同町が往古から鉾を守護してきたこと、その鉾が文禄元年（一五九二）に破損したため松の鉾に造り替えたこと、その後、宝永六年（一七〇九）に御所から「富の松鉾」と命名されたことなどの鉾の由緒が記載されている。なお、『今宮鉾　平成の記録』に詳細が記載されている。

枇杷鉾（上京区　花車町）

概要

花車町は千本通寺之内下ルに位置し、千本通を挟む両側町になっている。町の南端は作庵町と接している。現在、花車町は神幸祭にのみ参加しており、鉾の棹を短く切断し、台車に載せて巡行する。

花車町の鉾は二基ある。一基は「留守鉾」と呼ばれ、棹に付けて千本通に面した松文商店前に立てて飾り、もう一基は巡行に使用する。棹に付けて立てて置く鉾は、日輪と思われる円を受ける形をした雲紋様の受金の周囲を、枇杷の実と透かし彫りの葉が付いた枝が飾る。棹は総漆塗りで花（桜か）と車輪の錺金具が全体に散らすように打ち込まれた意匠となっている。巡行に使用する鉾は、枇杷の実と浮かし彫りの葉が付いた枇杷の枝の錺が、雲型の中央に三日月を配した受金の周囲を飾っている。錺受と受金は一体型である。それぞれ剣の茎に近い部分に十六菊紋がついている。

吹散は、「琴棋書画図」と題され、綴れ織りで鳳凰や中国の文人を表現した豪華なものである。江戸時代のもので個人から寄贈されたと伝わっている。古い吹散もほぼ同じ意匠であったと思われるが、現在は損傷が少ない鳳凰の図柄の部分だけをカットして台車の前面に掛けている。これらは今宮神社の倉庫に一括して保管されている。

現在、町内には三十六戸あるが、祭りにあたっては特に役を取り決めたりすることはない。祭りの参加に関しては自由で、新規に移転してきた人も希望すれば参加できる。ただし、町内全戸に鉾の維持費を含む町会費を支払うことが義務づ

けられている。また町会とは別に鉾の保存会があり、鉾関係の支出はそこから行われる。当屋は町会長が務める。

鉾祭りの次第

準備は神幸祭の前日の午前八時半、鉾と台車の蔵出しから始められる。その後、松文商店の前で留守鉾と巡行用の台車が組み立てられる。男性だけでこの作業を行う。午前九時半には終了し、午前十一時からは町の会所で参加者全員が集まって昼食をとる。昼食は当屋である町会長が準備する。

神幸祭の当日も午前八時半に集合し、前日から当屋宅に飾ってあった鉾頭を台車に据える作業を行う。午前十一時半、礼服に着替え当屋宅に集合し、一同で祭壇に拝礼、出発の挨拶を行った後、町内を出発する。以降、神幸祭でのようすは東千本町と同じである。

午後四時、千本通寺之内の交差点で御旅所へ向かう神輿の渡御列は右折するが、枇杷鉾の一同は千本通からそのまま町内へ戻る。戻るとすぐに町会長宅前にて鉾と台車の解体を行う。台車から下し、棹から外した鉾頭を当屋宅に納め解散となる。鉾頭は還幸祭の翌朝まで飾られる。

鉾差し

昭和三十年ごろまでは鷹峯から鉾差しを招いて鉾を差していたとのことである。その方が高齢で引退されたのを機に、台車に載せて引く方式に変えたということ

枇杷鉾（花車町）
（村上佳也子，平成 23.5.5）

である。

トウヤ飾り

当屋宅の飾り付けは鉾の組立てと並行して行われる。女性が中心になって行う。当屋（その年の町会長）宅では、部屋の北側に飾りを設置する。間取り上それが難しい場合は天井に「北」と書いた紙を貼る。部屋の正面に「今宮大神宮」の神号軸を掛け、その前には二段の八足が設置される。上段中央に御神酒を載せた三方と明治二年（一八六九）に明治天皇が東京へ遷られる際に下賜されたという菊紋入りの土器、榊が供えられる。下段には向かって右から洗い米を載せた三方、塩を円錐に高く盛った三方、筍・大根・昆布・するめを載せた三方が並ぶ。八足の両脇に、吊り燈籠を載せた台と、鉾頭を立てて設置するための木製の台が置かれる。巡行から戻った鉾はここに飾られる。祭壇の上部には注連縄が掛けられる。

その他

花車町には、明和二年（一七六五）からの記録、『花車町文書』が伝わっており、現在は京都市歴史資料館に保管されている。なお、『今宮鉾　平成の記録』に詳細が記載されている。

柏鉾（上京区　作庵町）

概要

作庵町は千本通上立売上ルに位置し、千本通を挟む両側町になっている。町の北端は花車町と接している。現在、作庵町は神幸祭にのみ参加しており、鉾を地面に対して水平にして運ぶ方式で巡行する。巡行の間、鉾を差すことはない。

作庵町の鉾は新旧二基あるとのことであるが、古い方は長らく倉庫に収納したままである。調査時に剣のみ古いものを含め四点確認することができた。茎にはそれぞれ年号と作者の銘が入っており、古いものから順に①「宝暦十二年（一七六二）」、②「文化三年（一八〇六）」、③「文政三年（一八二〇）」、④「大正十一年（一九二二）」である。巡行に使用するのは最も新しい④で、これには唯一、中ほどに菊紋の彫りが入っている。鉾頭を彩る錺は立体的に形作られた柏

柏鉾（作庵町）（松藤輝，平成 23.5.15）

の葉で、雲型の中央に十六菊紋を配した受金を中心として左右三枝ずつ付く。錺受と受金は一体型である。棹は総漆塗りに柏の葉を象った錺金具が全体に巻き付くように配置された意匠となっている。吹散（町では見送りと称していた）は紫地に金糸で菊紋が刺繍されている。

棹は町内のIガレージの倉庫で、剣をはじめその他の部品はW氏宅で保管することになっている。

現在、町内には三十四戸あるが、毎年四月に町会長を選出し、当屋はその年の町会長が務める。

鉾祭りの次第

準備は神幸祭の前日の午前九時、当屋の飾り付けから行われる。当屋は毎年選出されるが、飾り付けを行う場所はスペースの関係上、例年K氏宅のガレージとなっている。

神幸祭の当日は午前十時前に集合し、K氏宅のガレージにて前日から飾っていた鉾頭を棹に取り付ける作業を行う。午前十時半には準備が完了する。午前十一時半、礼服に着替え再集合し、一同で御神酒、昆布、するめをいただいた後、町内を出発する。以降、神幸祭でのようすは東千本町と同じである。

午後四時、千本通寺之内の交差点で御旅所へ向かう神輿の渡御列は右折するが、柏鉾の一同は千本通からそのまま町内へ戻る。戻るとすぐにK氏宅のガレージ前にて鉾の解体を行う。提灯だけは還幸祭までそのままにしておくが、それ以外はすべて片付けてしまう。宴席なども設けず、巡行の参加者には寿司などの軽食が配られる。

鉾差し

聞き取りによる情報の収集はできなかった。

トウヤ飾り

K氏宅ガレージ正面向かって右に「今宮大神宮」の神号軸、左に「住吉大明神」の神号軸を掛け、その前に鉾頭を飾る。鉾の前には向かって右から御神酒・するめ・洗い米・塩を載せた小型の八足、十六菊紋入りのカワラケが入った木箱、御神酒・昆布・洗い米・塩を載せた小型の八足、巻きあげた状態の吹散と鈴を並べる。

牡丹鉾（上京区 牡丹鉾町）

概要

牡丹鉾町は千本通五辻上ルに位置し、千本通を挟む両側町になっている。かつては大下之町と称していたが、牡丹鉾を奉仕するようになってから町名を変えたと伝わっている。嘉永元年（一八四八）の『花車町文書』には現町名が見られる。牡丹鉾町は神幸祭にのみ参加しており、鉾を地面に対して水平にして運ぶ方式で巡行する。巡行の間、鉾を差すことはない。

牡丹鉾町の鉾は二基ある。一基は留守鉾と呼ばれ、棹に付けて当屋宅前に立てて飾られる。もう一基は本鉾と呼ばれ、巡行に使用されるとともに当屋宅でも飾られる。留守鉾は、中央に十六菊紋と牡丹の葉が組み合わさった意匠の錺を配した州浜型の受金に、牡丹花と蕾、葉を象った錺が付く。本鉾もほぼ同様の意匠である。ただし本鉾の受金は雲型の中央に北斗七星と波の浮かし彫りが施されている。錺受と受金は一体型である。いずれも棹は総漆塗りで牡丹花と葉を象った錺が全体に巻き付くように配置された意匠となっている。それぞれ剣の茎に近い部分に十六菊紋の錺がついている。

吹散（町では見送りと称していた）は、白地に金糸で牡丹花の紋様を織り出したもの

である。なお吹散はこれ以外にも複数あり、祭日が雨になると古いものを使用しているとのことである。調査時は一流しか確認できなかった。鉾の保管は町内で行う。町内を六組に分け、各組のくじ引きで鉾の部品を分割し保管している。ただし棹だけは、収納するために長い廊下がある家というように、保管できる条件が限られているため毎年決まった家に保管される。また神号軸と吹散は町会長が保管することになっている。

祭りにあたっては、特に役を取り決めたりすることはなく、祭りの参加は町会長を中心に有志によって行われている。飾りを行う家の選出方法については聞き取れなかったが、通りに面して飾りを設置できる家という条件があるため、ほぼ決まった家で行われるようである。居祭りは還幸祭が終わるまで行われる。

なお、牡丹鉾に関しては祭日とは別の日程で計測班が調査を行っているため、銘文等は資料編を参照されたい。

鉾祭りの次第

準備は神幸祭の前日の午前九時ごろから始まる。町会長宅前に有志が鉾の部品を持ち集合する。かつて祭りに参加していた年配者の協力を得ながら作業が進められる。正午前には留守鉾が千本通に面して立てられ、居祭りの飾りも完成する。

牡丹鉾の巡行（内田みや子，平成 23.5.5）

牡丹鉾の留守鉾（秦和也，平成 24.5.5）

神幸祭の当日は午前十一時に礼服にて町会長宅前に集合し、一同で御神酒をいただき、町内を出発する。以降、神幸祭でのようすは東千本町と同じである。

午後四時、千本通寺之内の交差点で御旅所へ向かう神輿の渡御列は右折するが、牡丹鉾の一同は千本通からそのまま町内へ戻る。戻るとすぐに町会長宅前にて鉾の解体を行う。棹を外した鉾頭を当屋宅に納め、町内一軒ずつに御神酒とお供えのお下がりを分配し、解散となる。例年はこのあと宴席が設けられるが、調査時（平成二十三年度）は東日本大震災による自粛ムードがあったため、行われなかった。

鉾差し

昭和十八年（一九四三）頃までは鉾差しを招き、鉾を差していたとのことである。北白川または園部（現在の京都府南丹市園部町）の造園業に従事する力持ちの人であったという。衣装や食事、入浴の世話まで町内で行っていた。

町役員の方のってで、平成十五年の祭の時に平岡と嵯峨から鉾差しを招き町内周辺のみ鉾を差してもらった。謝金などの支出が多く、その年と翌年の二回で呼ぶのを辞めてしまったが、その時の様子はビデオで記録されているとのことである。

トウヤ飾り

当屋宅の飾り付けは鉾の組立てと並行して行われる。当屋宅では、通りに面した部屋に飾りを設置する。室内に紅白幕をめぐらし、正面に「今宮大神宮」の神号軸と「香取大神宮」の神号軸が掛けられる。天井からは吊り燈籠と白地に牡花が織り出された幕が下げられる。神号軸の前には二段の八足が設置され、上段中央に榊、紅白餅を載せた三方、昆布・するめを載せた三方、その間に水器・塩・洗い米を載せた折敷が並ぶ。下段には御

神酒や献酒が供えられる。八足に向かって右脇には金幣、左脇には吹散を巻いた状態で設置し、その前に剣を立てて設置するための木製の台が置かれる。巡行から戻った鉾頭がここに飾られる。

龍鉾（上京区 西五辻東町）

概要

西五辻東町は五辻通千本東入ルに位置する、五辻通を挟んだ両側町である。西五辻東町は還幸祭にのみ参加しており、鉾の棹を短く切断し台車に載せて曳く方式で巡行する。

西五辻東町の鉾は一基で、剣は二基あり、それぞれ、剣の茎に天明元年（一七八一）の銘と、寛政七年（一七九五）の銘が見られる。調査時（平成二十三年度）は、寛政七年の銘がある方が巡行に使用された。

鉾頭を彩る鍑は向かい合った左右一対の龍で、受金は宝珠を象っている。鍑受と受金は一体型である。棹は総漆塗りで、銀鍍の龍の鍑が全体に巻き付くように配置された意匠となっている。吹散は紫地に白糸で菊紋が刺繍されている。

鉾を載せる台車に使われる懸装品もまた豪華な意匠になっている。まず台車の四方に波模様の幕を巡らせ、前後に赤地に花菱紋様の織りがある帯状の布を垂らす。両側面には龍が描かれた胴懸が掛けられる。これは居祭りで飾られるタペストリーと同じ意匠で、台車に使用されるのは新調されたものである。裏に「昭和五拾八年壱月吉日新調／西五辻東町／春水□〔印〕〔印〕／株式会社川島織物謹製」と墨書がある。後面には四人の異国の人物が描かれたペルシャ絨毯が掛けられる。

祭りにあたっては、町内六十戸を八組に分け、そのうち二組が当番となり、祭りを執り仕切る。その二組の中から飾りを行う家を選出する。ただし鉾の飾り付けは町内総出で行う。鉾の部品などは町内Y氏宅の蔵に一括して保管されている。

鉾祭りの次第

神幸祭の巡行には参加しないが、還幸祭の日から鉾の準備は始められる。午前九時に町の人々が集合し始める。Y氏宅へ行き、鉾の蔵出しを行う。男女ともに協力しながら鉾と台車の飾り付けを行う。午前十時半ごろ、飾り付けが終わると、町内の人々が順に拝礼し御神酒をいただく。この時同時に御神酒料をお供えする。午前十一時には全ての作業が終わり、町内の公共施設である嘉楽会館にて宴席が設けられる。

還幸祭の当日、午前八時にY氏宅の蔵から鉾の台車やその他の部品を出す。そのまま同氏宅前で、おもに女性が拭き掃除、男性が台車部分の組立て作業を行う。

午前八時半頃、榊に紙垂をつける。この紙垂は数日前に町会長が今宮神社からいただいてきたもので、その数は町内の戸数と同じ数だけあるということである。午前九時、鉾の組立てに取りかかる。午前十時すぎには鉾も台車も組立てが完了し、御幣、紙垂を取り付けた榊、鉾、吹散が台車に据えられて準備が完了する。鉾の組立て終了後は、一同、当屋の飾りに拝礼し、その後宴会となる。巡行に参加する人は裃・袴姿に着替えて、正午にY氏宅前に集合する。

巡行への参加者は、裃・袴姿が十人、高張提灯が二人、専用の棒を使って電線を除ける役が一人、鉾を載せた台車を曳く役が四人で、提灯持以下七人の衣装は白丁姿である。白丁は町内の若い人が勤めるが、人手が足りない時は大学生のア

龍鉾（西五辻東町）の巡行（内田みや子，平成 23.5.15）

ルバイトを募って補う。

正午過ぎ、Y氏宅前を出発し、五辻通を西進し千本通を渡って町の西端まで行く。その後引き返して智恵光院通を北に、寺之内通を東に、大宮通を北に行き鉾の集合場所に向かう。以降、還幸祭でのようすは東千本町と同じである。

午後五時、大宮通を北進し、帰社する神輿の渡御列から離れ、龍鉾の一同は五辻通を左折し町へ戻る。戻るとすぐにY氏宅前にて鉾の解体を行う。まず榊を降ろす。これは切り分けられて町内に配られる。各家ではこれを神棚に祀る。鉾は棹から外し、鉾頭を当屋宅に飾る。午後六時には終了する。居祭りは翌日の朝に片づけられる。

鉾差し

鉾を台車で巡行するようになったのは五十年くらい前のことで、それ以前は現在と同じ台（車輪部分はなし）に載せて担いでいた。また同じころに、電線にかかるのを防ぐために棹を一メートルくらい切断したということである。

トウヤ飾り

その年に飾りの当番となった家では、「正二位清原宣光謹書」と署名がある「今宮大神宮」の神号軸を正面に掛ける。神号軸は南面あるいは東面して掛ることが決まっている。神号軸に向かって右側に剣の箱を和紙で包み、その上に剣を重ねて紐で固定したものを立てて置く。箱の中にはもう一本の剣が入っている。神号軸と剣の前に八足が置かれる。八足の上には正面に御幣と菊紋入りのカワラケが置かれ、向かって左側には筍と大根を載せた三方、右側には鯛とスルメと昆布を載せた三方、その間に、洗い米・塩・御神酒が供えられる。昆布は火であぶって直径八センチメートルくらいに巻き、和紙で包み水引をかける。するめも和紙で包み水引をかける。八足の両脇には、燭台と吊り燈籠を置く。

部屋の南側には、向かい合った龍の絵柄のタペストリーを飾る。この裏側には「明治二十六年五月二日小林庄太郎調進」と寄贈者の名が入っている。この飾りは神幸祭から還幸祭が終わるまでの期間中飾られる。

その他

現西五辻東町では、かつて龍鉾西町と龍鉾東町（現西五辻東町の西側と東側）が交互で鉾を出していたが、東町は費用がかさむことを理由に祭りへの参加を止めた（年代未詳）。それ以来、西町だけで龍鉾を管理してきた。

五桜町の剣鉾（上京区 五桜町〔五辻町・桜井町〕）

概要

五桜町は、剣鉾（つるぎほこ）を管理運営するにあたって作られたまとまりといわれ、実際五辻町と桜井町からなる。五辻通と智恵光院通の交差点を中心にした地区である。ただし、桜井町は京都市立西陣中央小学校が大部分を占めており、個人宅はない。

五桜町は還幸祭にのみ参加しており、鉾を地面に対して水平にして運ぶ方式で巡行する。巡行の間、鉾を差すことはない。

五桜町の鉾は、聞き取りでは三基であるが、調査時はそのうちの一基しか確認できなかった。雲形の中心に十六菊紋を配した受金から、両方へ四方ずつ剣を突き出し、それらを囲むように、写実的に象られた菊の一枝の錺が配されている。一本の枝には菊花五つと葉十数枚が付いている。錺受と受金は一体型である。剣の茎に近い部分にも十六菊紋がついている。棹は総漆塗りで、剣と雲形の錺金具が全体に散らされた意匠となっている。吹散は複数ある。巡行に使用するのは、赤地に菊紋があるものである。

祭りにあたっては、町内を三組に分け、その三組が輪番で町会長を選出する。その年の町会長および、町会長を選出した組の人が祭りを執り仕切り、有志が手伝って準備などを行う。鉾の部品などは、町の会所である首途八幡宮（かどではちまんぐう）の倉庫に一括して保管されている。居祭りも同社務所で行われる。

鉾祭りの次第

還幸祭の前々日、倉庫から部品を出しておく。前日の午前九時前になると、続々と町の人々が社務所に集合する。十五、六人で作業を行うが、ほぼ毎年同じ人が

首途八幡宮の社務所で組み立てられた五桜町の剣鉾（内田みや子，平成 23.5.14）

同じ作業を担当するので、作業は順調に進む。午前十時には全作業が完了し、町会長のあいさつがあり、ジュースやお菓子がふるまわれる。

還幸祭の当日は午前十時に集合し、巡行に参加する人は袴・袴姿に着替える。衣装も町で管理しており、普段は倉庫に保管されている。

巡行の参加者は、袴・袴姿が八人、高張提灯二人、唐櫃（中に雨具などが入っている）二人、吹散箱二人、剣箱一人、鉾五人で、提灯持以下は大学生のアルバイトを募って補う。

正午、町会長から巡行時の諸注意があり、首途八幡宮を出発し、智恵光院通を北進し五辻通を西へ、町の西端まで行くとUターンし、五辻通を東へ進み大宮通に出て鉾の集合場所に向かう。以降、還幸祭でのようすは東千本町と同じである。

午後五時、大宮通を北進し、帰社する神輿の渡御列から離れ、剣鉾の一同は五辻通を左折し首途八幡宮へ戻る。鉾を社務所に入れ、一同着替える。その後、宴席が設けられる。片付けは翌日の朝九時から行われる。

鉾差し

聞き取りによる情報の収集はできなかった。

トウヤ飾り

首途八幡宮の社務所では、床の間に「今宮大神宮」の神号軸を掛ける。神号軸に向かって右側床に赤いビロード地に金糸で「剣鉾」と刺繍されたカバーを被せた剣の箱、左には同じ意匠の吹散箱二つを置く。掛け軸と剣の前に八足が置かれる。八足の上には正面に水器を載せた三方、その両側に洗い米と塩、さらにその外側に榊を供える。八足に立てかけるように今宮神社からいただいた御幣を置く。床の間上部の落とし掛けから菊紋入りの提灯をさげる。床に献酒を供える。床の間の前に専用の架台を置き、鉾を棹に付けた状態で寝かせて飾る。この飾りは還幸祭の翌日まで飾られる。

その他

調査時に確認できた吹散四枚のうち、一際異彩を放っているのが、鳳・桐竹・麒麟の絵柄を色糸で織り出した綴織で、昭和初年の作と言われているものである。また、古老の記憶をもとに平成十四年に倉庫から発見された「青貝鉾」と呼ばれる鉾は、棹に蒔絵と螺鈿の技法で瑞雲と剣の模様が描かれており、その後の調査で江戸後期の享和三年（一八〇三）の作であることが判明している。いずれも同町の人々の祭りへの熱意がうかがえる一級の工芸品であるといえる。

また五桜町には、幕末以降の記録が多数残されている。平成十六年に本格的な整備が行われ、現在は京都市歴史資料館にて保管されている。

葵鉾（上京区　東石屋町）

概要

東石屋町は五辻通大宮東入ルに位置する。江戸幕府五代将軍徳川綱吉の生母である桂昌院の出身地でもあり、そのため葵鉾は桂昌院によって寄贈されたものであると伝えられている。

葵鉾は近年まで東石屋町が管理運営してきたが、昭和三十年代に諸事情により町として祭りに参加することはしなくなった。その後、町の有志三人の方によって運営されてきたが、平成十七年からは同志社大学が参画し、現在は教員が学生

に呼びかけ参加者を募り、祭りに参加している。

現在、葵鉾は還幸祭にのみ参加しており、鉾を地面に対して水平にして運ぶ方式で巡行する。巡行の間、鉾を差すことはない。また、同志社大学との連携を始めた平成十七年に、今宮神社の神紋にちなんだ三階松鉾を新調し、巡行に参加するようになった。平成二十年の祭りでは、この鉾を差したとのことである。現在この鉾は修理中とのことで調査時には見ることはできなかった。

葵鉾は二基ある。調査時は巡行に使用するものしか見ることができなかった。巡行用の鉾は、雲型の中央に一株の葵の葉と花の錺を配した受金を、実物さながらに葉脈が浮かし彫りで刻まれ、四方へ向かって伸びる葵の枝葉を象った錺が囲んでいる。錺受と受金は一体型である。棹は総漆塗りで菊花と葵の錺金具が全体に散らすように打ち込まれた意匠となっている。吹散は、朱地に植物（唐草か）の紋様が織り出されたものに金糸で十六菊紋が刺繍されている。

鉾祭りの次第

還幸祭の当日、午前十時から今宮神社御旅所南の空き店舗にて組立てを開始する。鉾の部品や衣装など、祭りの関係の道具はここに収納されている。鉾の組立ては東石屋町のS氏（東石屋町が鉾を護持していたときから鉾の組立てを担当していた人物）が一人でされる。十一時ごろ、巡行の際の提灯や鉾を担ぐのを担当する同志社大学の学生が集合し始める。各自装束に着替え昼食をとる。S氏も礼服に着替えるために一度自宅へ戻る。以降、還幸祭でのようすは東千本町と同じである。午後四時、寺之内通を西進し御供所へ向かう神輿の渡御列から離れ、大宮通をそのまま北上し空き店舗へ戻る。到着後、学生達は着替えをし、S氏の指示のもと鉾の片付けを手伝う。それらが終了すると解散となる。

葵鉾（内田みや子，平成 23.5.15）

トウヤ飾り

居祭りは行われない。

その他

慶長十四年（一六〇九）の日付がある古記録が伝わっている。これは現存する十二の鉾に関する記録の中で最も古い。留守鉾を収納する箱の蓋の裏面に貼り付けてあった一枚の書き付けであり、『神事預り物覚』と題し、誰が鉾のどの部品を預かって保管しているかを記録したものである。吹散箱、吹散掛、吹散絹、八束（原文ママ）台、房など、この当時すでに、現在に見られるものの記載が見られ、鉾を部品ごとに分けて保管する方式をとっていたことがわかる。

また、現在も東石屋町にお住まいのY氏（昭和十六年生まれ）より、町として祭りに参加していた当時の状況を聞きとることができたので以下に記す。

かつては居祭りを行い、留守鉾も出していた。町で管理する町家があり毎年そこで居祭りを行っていた。ただし鉾の部品の保管は各家で分担して行っていた。祭りは町会長を中心に行い、神幸祭の日から祭壇を設え、還幸祭の日は一同で巡行の準備をし、巡行後は町家にて宴席が設けられた。鉾を差していた当時は、毎年粟田神社から鉾差しを招いていたとのことである。

蓮鉾（上京区 芝大宮町）

概要

芝大宮町は、大宮五辻上ルに位置し、大宮通を挟んだ両側町である。現在、芝大宮町は町として祭りに参加していない。ただし調査を行った平成二十三年から、町の有志によって、還幸祭でのみ居祭りを行うようになった。実に二十二年ぶりということである。

芝大宮町の鉾は一基で、雲型の中央に下がり藤紋を配した受金を、蓮の花と蕾、

蓮鉾（芝大宮町）の居祭り
（内田みや子，平成 24.5.12）

葉を象った鍔が囲む。鍔の造形は細かく、蓮特有の立体感や葉脈、花弁の重なり方などまでが実物のように再現されている。鍔受と受金は一体型である。剣の茎に近い部分にも十六菊紋がついている。吹散は朱地に金糸で十六菊紋が縦に二つ刺繍されている。これらは町で管理する蔵に保管されている。かつて巡行に出ていた当時は、鉾の棹を短く切断し木枠に載せて神輿のように舁く方式をとっていたらしく、その木枠に付属する懸装品も保管されている。

なお、蓮鉾に関しては祭日とは別の日程で計測班が調査を行っているため、銘文等は資料編を参照されたい。

鉾祭りの次第・トウヤ飾り

還幸祭の前日、午後から町の有志によって準備が始められる。居祭りが設えられる場所は、もともと町で所有する町家と蔵があった場所である。町家が老朽化したため、これを取り壊してできた空き地に屋根を付け整備したことをきっかけに、居祭りが復活した。準備は町会長を中心に行う。しかし、二十年以上も途絶えていたため、町内で鉾を組立てることができる人がおらず、東石屋町のＳ氏に組立てを依頼している。

その他

また、現在も芝大宮町にお住まいの古老（昭和十年生まれ）より、町として祭りに参加していた当時の状況を聞きとることができたので以下に記す。

かつては前述の町家で祭壇を設え居祭りを行っていた。お話をうかがった古老が小学生だった頃、すでに巡行に鉾は出ていなかったそうである。ただし、鉾は木枠に載せた状態で町家の前に出して飾っていたという。

蝶鉾（上京区　観世町）

概要

観世町は、大宮通今出川上ルに位置し、大宮通を挟んだ両側町である。

観世町では祭りの担い手が激減したため、戦後数回祭りに参加した後、参加することを止めた。その後も数年間、居祭りだけは行っていたようであるが、年代などは未詳である。同町の昭和五年（一九三〇）生まれの方に尋ねたところ、その方が中学生のころまでは祭りに鉾を出していた記憶があるそうなので、鉾を祭りに出さなくなったのは昭和二十年代と思われる。また平成十四年、保管場所であった町家が取り壊されることをきっかけに今宮神社に鉾を委譲することになった。現在は京都市歴史資料館にて保存されている。寄贈する前の見納めとして、この時約五十年ぶりに町で鉾を組み立てた。

蝶鉾の特徴であるが、筆者が把握しているものは、受金は流水と雲型を組み合わせた形で、中央に下がり藤紋が付いている。その周囲を立体的な菖蒲の花の鍔が囲んでいる。受金の上部では、菖蒲と戯れるかのように蝶の鍔が左右一つずつ付く。鍔受と受金は一体型である。棹と吹散については未確認である。

なお、蝶鉾に関しては計測班が調査を行っているため、銘文等は資料編を参照されたい。

沢瀉鉾（上京区　上善寺町）

概要

上善寺町は、千本通五辻下ルに位置し、千本通を挟んだ両側町である。

平成十三年、鉾の保管場所であった店舗（現在はマンションが建っている）が廃業す

ることをきっかけに、今宮神社に鉾を委譲することになった。現在は京都市歴史資料館にて保存されている。

筆者が把握している沢瀉鉾の特徴は、雲型に流水の模様が入った受金の周囲を、沢瀉の葉と花を象った銻が囲むというものである。銻受と受金は一体型である。棹と吹散については未確認である。

吹散に関しては、蘭亭曲水図綴（寛政二年〔一七九〇〕、双岡亭忠元作）、唐子遊図綴（文政四年〔一八二一〕、桜井基近作）、群仙図綴（文政五年〔一八二二〕、桜井基近作）の三点が西陣織の傑作として広く知られており、昭和六十一年（一九八六）の『京の祭の遺宝・剣鉾の伝統展』にも出品された。

また、現在も上善寺町にお住まいの古老（昭和十年生まれ）より、町として祭りに参加していた当時の状況を聞きとることができたので以下に記す。

かつては毎年M氏宅で祭壇を設え居祭りを行っていた。昭和四十年代までは鉾差しを招いて鉾を差していたが、その後は、鉾を地面に対して水平にして運ぶ方式で巡行していたとのことである。

なお、沢瀉鉾に関しては計測班、文書班が調査を行っているため、銘文等は資料編も参照されたい。

子供剣鉾（内田みや子，平成 23.5.5）

③ その他の鉾

その他、今宮祭では「子供剣鉾」が神幸祭の渡御列に参加する。これは、今宮鉾研究会によって、祭りの後継者の育成を目的に行われた「今宮こども鉾差し教室」に端を発している。平成十七年の今宮祭から渡御列に参加するようになった。現在も神幸祭の巡行路に接する京都市立乾隆小学校の「楽童クラブ」の活動として継続されている。各鉾町より二十名の方が有志で活動に参加している。

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

出雲路敬直「剣鉾覚書（一）」（『京都精華学園研究紀要』十輯、一九七二年）
出雲路敬直「剣鉾覚書（二）」（『京都精華学園研究紀要』十一輯、一九七三年）
京都市『史料 京都の歴史』四巻 市街・生業、七巻 上京区（一九八〇年）
坂本博司「今宮祭と西陣」（『藝能史研究』七十一号、一九八〇年）
今宮神社社務所『今宮神社由緒略記』（一九八二年）
出雲路敬直「上京の祭（下）」（『上京乃史蹟』四十三号、一九八六年）
財団法人京都市社会教育振興財団『京の祭の遺宝・剣鉾の伝統展』（一九八六年）
今宮鉾研究会『今宮鉾 平成の記録』データディスク（二〇〇五年）
村山弘太郎「近世の今宮祭と巡幸路」（『京都民俗』二十三号、二〇〇六年）
及川亘「東京大学史料編纂所所蔵「芝大宮町文書」の町入用関係史料について」（『東京大学史料編纂所研究紀要』十九号、二〇〇九年）
山口耕平『立命館大学文学部 京都歴史回廊プログラム調査報告書 今宮祭のいま —剣鉾と西陣の町々—』（立命館大学文学部、二〇〇九年）
本多健一「中世後期の京都今宮祭と上京氏子区域の変遷 —そこに顕現する空間構造に着目して」（『歴史地理学』五十一巻四号、二〇〇九年）
本多健一「中世京都の祭礼における鉾とその変容 —比例祭礼分化史のための基礎

的考察―」（『藝能史研究』百八十九号、二〇一〇年）
村山弘太郎「首途八幡宮ににおける神仏分離と再興」（『京都民俗』二十八号、二〇一一年）
本多健一「近世後期の都市祭礼における空間構造 ―京都の今宮祭を事例に―」（『人文地理』六十巻一号、二〇一二年）

剣鉾祭礼記録・古文書

黒川道佑著『日次紀事』延宝四年（一六七六）序
『花洛細見図（宝永花洛細見図）』元禄十七年（一七〇四）
『京都御役所向大概覚書』享保二年（一七一七）頃成立
『今宮御神事行事勤来控』安政六年（一八五九）（『日本祭礼行事集成・五巻』一九七二年）
『年中行事大成』文化三年（一八六一）序

（内田 みや子）

八大神社 上一乗寺氏子祭

毎年五月五日
八大神社
京都市左京区一乗寺松原町

① 祭礼と由緒

地域の概要

一乗寺地区は比叡山西山麓、一乗寺川の扇状地一帯に位置する。北は修学院地区、西は高野地区、南は北白川地区と接する。地区のほとんどが住宅地であり、白川通り、曼珠院通り沿いには商店が展開している。地区内には詩仙堂など寺院が多数存在する。

松原町に鎮座する八大神社は「素盞嗚命」「稲田姫命」「八王子命」の三柱を祀る、一乗寺地区の産土神である。氏子は一乗寺地区の住民であるが、彼らは異なる三つの集団を形成している。まず「上一乗寺氏子会」である。カミイチとも呼ばれる。白川通り以東、一乗寺通りから曼珠院道両側に展開した薬師堂町、下り松町、門口町などの住民で組織される。これは旧一乗寺村の範囲であり、修学院小学校学区でもある。地区内の中央、釈迦堂町の曼珠院道沿いに集会所があり、北の堀ノ内町には北薬師堂、中央の釈迦堂町には釈迦堂、南の薬師堂町には南薬師堂があって、これらも集会所として利用されている。

次に「下一乗寺氏子会」は白川通り以西の宮ノ東町、里ノ西町、中ノ田町など、修学院第二学区二六町内会の住民で構成される氏子集団である。シモイチと呼ばれる。下一乗寺は上一乗寺（旧一乗寺村）の耕地が、明治以降宅地化した地域である。

最後に「一乗寺住宅地域氏子会」は、一乗寺地区北側の柳ヶ坪、松田、清水、青城という四か町からなる氏子組織である。同地域は戦時中の昭和十七年（一九四二）に、当時の政府外郭団体「住宅営団」によって創出された四百戸あまりの住宅を基としている。戦後、住宅は個人が取得することになって、「営団住居者会」という自治組織がつくられ、現在の自治会の基礎となった。

三つの氏子組織はそれぞれに年間の祭事を行う。毎年五月五日に行われる氏子祭も、三つ同時に行われ、八大神社宮司のみが、それぞれに関係する。下一乗寺氏子会は昭和五年（一九三〇）に設立され、神輿を別に新調して上一乗寺から分離した。一乗寺住宅地域が八大神社と関係を有するようになったのは終戦後のことである。地域内に朽ちていた柊社を再建して氏神とし、これを八大神社の末社とした。昭和二十五年にはすでに、八大神社祭礼に神輿を出している。

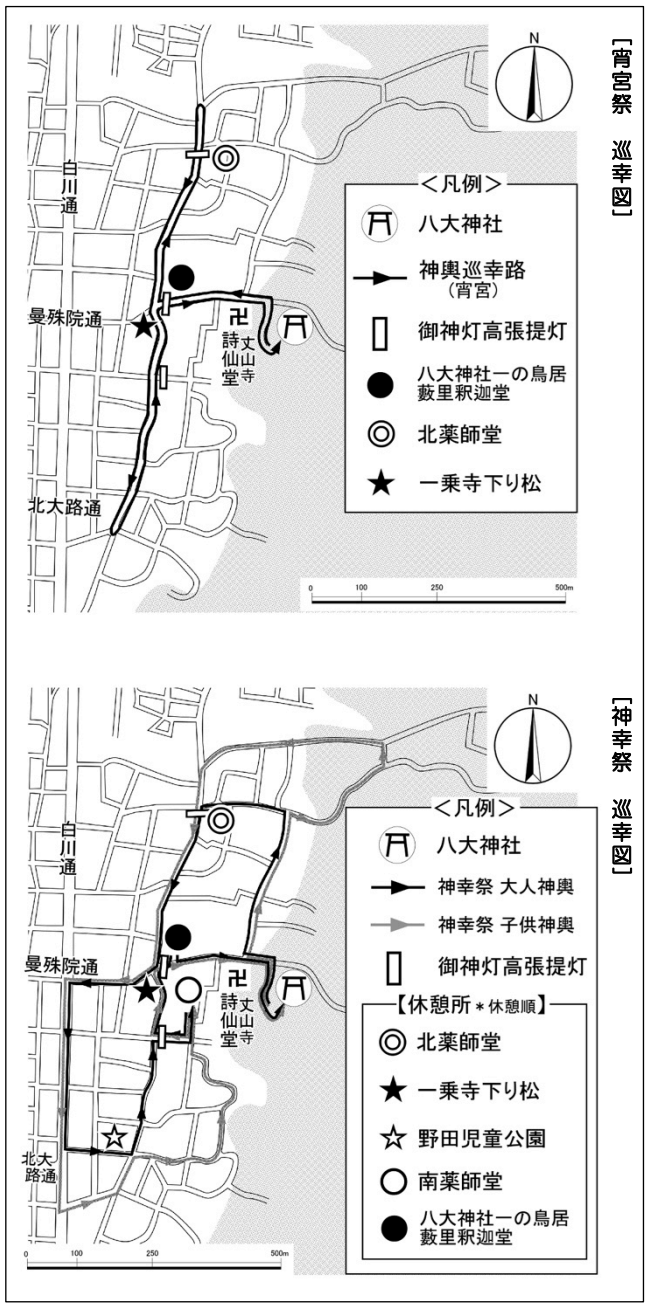
さて剣鉾は、三つの氏子集団のうち上一乗寺氏子会に伝来している。「菊鉾」「柏鉾」「龍鉾（りょうほこ）」という三基の剣鉾がそれである。下一乗寺や一乗寺住宅地域には存在せず、上一乗寺の剣鉾が両者に関係することもない。したがって本報告書は、上一乗寺氏子会が行う氏子祭について記す。

まず祭礼に関係する諸団体についてみていこう。

氏子会は、上一乗寺地区の住民で組織される。会長一名、副会長二名、総務三名、会計二名、各町から選出される総代で役員が構成される。氏子会の中で比較的年齢の若い者は、神輿舁きを担当する（大人神輿奉賛会）。他地域にみられる「若中会」といった組織は形成されていない。他の氏子会メンバーは、時により子供たちの世話や下準備に従事する。

宮座は上一乗寺氏子会の中核をなす組織であり、男性三十二名で構成される。上座と下座に分けられ、各十六名が配されている。臈次（ろうじ）制で、席次の呼称をバンジョウ（番上）という。下座十六番上に入った座員は年次ごとに上位に昇り、下座一番上を務めると上座十六番上に入座する。したがって座員は、三十二年かけて昇順していき、上座一番上を終えると、「師匠」と呼ばれる後見役を一年務めた後、宮座から離れて巴会（後述）に入会する。

宮座への入座は、氏子会などの推薦で年長者から順に認められ、四月下旬に「入座式」が行われる。現在では二十歳代での入座がほとんどである。下座の十六番



上に入ると、九番上までは氏子祭において「奉幣太鼓」を担当する。八番上から三番上までが神幸行列における吹散持ち、二番上と一番上は神輿に従う。下座員は一文字笠に袴、着物は黒紋付、白足袋という出で立ちで、各自の役割のほか、氏子祭では庶務を担当する。

上座は、十六番上から五番上までが烏帽子に素襖という装束で、氏子祭においては各部署の責任者を担当する。そして四番上と三番上は同じく烏帽子素襖姿だが「御供師」という呼称が付与される。次いで二番上は冠に白装束、手には笏を持った浄衣姿で「準列」、最高位の一番上は「督殿」と呼ばれ、宮司と同じ斎服である。「準列」と「督殿」は宮司と共に諸神事にあたる。

巴会 ― 宮座退会者で組織される長老衆。

子供たち ― 神幸行列に参加する、上一乗寺地区の小学生男女。

北中会 ― 一乗寺の北側を中心とした氏子約九十名で組織される特別社団法人。比叡山山林の管理等を担う。氏子祭においては北薬師堂において神幸行列の接待を行い、その場で神事も執り行う。

中山会 ― 同じく上一乗寺の南側を拠点とする特別社団法人。比叡山山林の管理権を有す。南薬師堂において接待と神事を行う。

祭礼次第

【準備】

祭礼の準備は、宮座を中心に行われる。

四月二十九日午前中、上座の面々が御神燈建て、各御旅所への砂盛り、剣鉾を立てる櫓（やぐら）の設置作業を行う。そして督殿以下五名と師匠により、各鳥居・各御旅所・本殿等に注連縄や忌竹が飾られる。氏子会役員は祭礼の特別寄附者の札を参道に掲示し、その後、注連縄の架け替え作業を手伝う。

午後からは上座により神輿の飾り付けが行われる。境内では、祭礼に参加する子供の剣鉾差しの練習が鉾差しの皆さんの指導のもと行われる。

下座はこの日、神事列書を書く担当、下り松の注連縄を造り、架け替える担当、巡幸路・御旅所の清掃及び確認を行う担当等に分かれ、夕方まで作業を行う。また神社の参集殿では五色の紙を組み合わせて、サンヨウレ箒が造られる。夕刻、下座による奉幣太鼓の初打ちが行われ、午後六時頃に終了する。

【宵宮】

五月四日。上一乗寺の宵宮は神輿の飾り付けから始まる。午後七時、下一乗寺の宵宮祭が進行している最中に上一乗寺上座が境内へ集まり出す。宮司へ挨拶の後、諸道具の搬出、神輿と子供神輿の飾り付けが始まる。その間、下座、若衆、児童、保護者などの関係者が境内へ集まる。午後八時前、飾り付けられた神輿二

基が本殿へ上げられ、関係者一同が揃って神事が執り行われる。

神事が終ると隊列を組み、神輿が地区内を巡幸する。ただしその順路は祭礼当日とは異なり短く、剣鉾も出ない。神輿が神社に戻り、拝殿に安置された後、最後に神輿の神前に神饌が供えられ終了する。

【祭礼当日】

五月五日。午前八時前に御供と「おのれ餅」を神前に供える「朝御供祭」が神社で行われる。これには宮司のほか、督殿、準列、御供師が必ず出席する。午前十時、下座一番上、二番上は裃姿で曼珠院を訪れ、挨拶とおのれ餅の進呈を行う。また午前中のうちに、上一乗寺集会所の室内に「八大神社」の掛け軸が掛けられ、祭壇が設置される。その前には机が並べられる。

正午過ぎ、集会所へ関係者が集まり、午後十二時半より奉幣式が行われる。室内では祭壇を背に、宮司、督殿、準列、氏子会役員三名が正面に座り、その前に上座の面々が着席する。青い着物姿の鉾差し二名が入室し、祭壇の神酒と御供を取り、宮司、督殿という順に上座の十六番上まで献じていく。最後に祭壇へ戻して、奉幣式が終了する。その間、室外では下座による奉幣太鼓の奉納が続けられる。

サンヨウレ箒（中野洋平，平成 24.5.5）

奉幣式の間、屋外では駕輿丁と児童、保護者等が待機している。式が終了すると、上座によって神事列書に記載された巡行の先頭から役職と氏名が読み上げられる。呼ばれるとその場で応え、神社へと向かう。全員が神社に集まると隊列が整えられ、神輿渡御が始まる。

渡御は神社を出ると北へ向かい、菊―龍―柏という順で剣鉾三基を差しながらゆっくりと進行していく。行列のうち、サンヨウレ箒を持った稚児たちと、下座の奉幣太鼓担当者は、「あーれはなんじゃ、おーどーりーじゃ、さーんよーれ、さんよーれ」と囃し立てながら行進する。また神輿は所々で高く振り上げられる。

一乗寺堂ノ前町まで進むと、子供神輿一行と柏鉾は本体から別れて東に迂回し、一乗寺水掛町、月輪寺町、馬場町を廻る。本体は堀ノ内町の北薬師堂に入り、飲み物がふるまわれ休憩する。宮司と上座の督殿、準列、氏子総代、巴会役員は堂内に入り、紋付袴姿の北中会六名と共に神事を行う。堂内には薬師如来と共に「八大天王」の掛け軸が掛けられている。堂の外では、下座による奉幣太鼓が行われる。

北薬師堂を出発した一行は曼珠院道を南下し、八大神社一の鳥居から白川道に出てさらに南下する。野田町までくると、子供一行と柏鉾は分流して庵野町、松原町を廻る。本体は野田児童公園にて休憩。その後、一乗寺道を北上して薬師堂町の南薬師堂を目指し、到着すると同様に休憩して堂内では宮司等と中山会による神事が行われる。こちらにも「八大天王」の軸が掛けられている。堂外では奉幣太鼓が行われる。

南薬師堂を出ると、そのまま一乗寺道を北上し一の鳥居に到着する。下座が鳥居前で最後の奉幣太鼓を奉納する。また宮司、督殿、準列は釈迦堂町の釈迦堂にて薬師堂と同じく神事を行う。これが済むと一行は神社へ向かい、渡御が終了する。

下座による奉幣太鼓の準備（中野洋平，平成24.5.5）

行列次第

社旗―前衛（上座一名）―一番鉾・菊鉾（鉾差し、下座一名付添）―吹散持ち（下座一名）―二番鉾・龍鉾（鉾差し、下座一名付添）―吹散持ち（下座一名）―三番鉾・柏鉾（鉾差し、下座一名付添）―吹散持ち（下座一名）―前駆準列（上座一名付添）―榊（稚児持つ、上座一名付添）―督殿（上座一名付添）―御幣（稚児持つ、上座一名付添）―唐櫃（上座一名付添）―踊子稚児係（上座一名）―踊子二十名ほど（小学一年男子）―稚児二十名ほど（小学一年女子）―太鼓係（上座一名）―奉幣太鼓（下座八名）―神輿係（上座四名）―行列係（上座一名）―宮司（上座二名付添）―氏子会会長以下、関係役員―巴会―駕輿丁数十名。

由緒と歴史

江戸期の一乗寺村は、下り松より北の本郷、南の舞楽寺、太田川を挟んだ西側の藪里、という三つの集落から成り立っていた。それぞれに氏神として八大天王（本郷）、八大天王（舞楽寺）、牛頭天王（藪里）があり、それぞれに宮座が組織されていた。神社には専属の神職はおらず、宮座の最高位が「神主」として一年間奉仕していた。席次を現わす「和尚」の初見は寛永十六年（一六三九）と古い。

江戸時代における祭礼の様子は、文化三年（一八〇六）の『諸国図会年中行事大成』三月五日条によると次のようにある。

七里祭　比叡山西の麓七箇村生土神の祭なり。所謂一乗寺村、豊楽寺村、祭神八大天王〈祇園三座の内八王子なり〉。藪里村、祭神比良貴天王〈神輿一村に一基宛あり〉。

祭式古へ旅所の地なりとて圃の中に竹を立、注連を引て旅所とし、神輿渡御は其神慮にまかせ田圃の中を構はず作物を踏荒し、横行に渡御あるなり。先一乗寺、豊楽寺の二基を舁て社を出る。此時藪里の神輿道を替て同じ旅所に渡御あり。両祭とも竹の先に色紙を切付てこれを踊鉾と称へ、児童等先に立、さんやれ〳〵と諷ひ、太鼓、鉦に合しおどり囃す。神輿を舁ものも同じくこれを諷ふ。さんやれといふは、さあやれといふ言の転じたる成べし。各祭鉾を出す。旅所に於て神供の事あり。（以下略）

これによると当時は、三月五日に「七里祭」といって一乗寺から修学院一帯の七か村が一斉に神社祭祀を行っている。そのなかでも現一乗寺地区にある三か村は合同であった。祭式も現在とは大きく異なる。各村の神輿が田畑のただ中に設けられた旅所に渡御するのである。旅所の現在位置は不明であるが、おそらく宅地開発の途上で消滅したのだろう。現在の神輿巡幸に旅所が存在しないのはこのためである。

相違点のほかに、共通点もみられる。子供たちの「踊鉾」である。「さんやれ」という囃子ともに、現在の「サンヤレ箒」と同様の風流拍子物が行われていたことがわかる。また各祭りに鉾を出すとあることから、現在三基ある剣鉾は、もともと三か村に一基ずつ祀られていたものであった可能性が考えられる。

さて、明治六年（一八七三）には藪里の牛頭天王、翌七年には舞楽寺の八大天王が本郷の八大天王に合祀され、社名が八大神社と改められた。この時、三つの宮座も統合されたものと考えられる。さらに他所から宮司が赴任し、一和尚の神職としての役割が変化することとなった。

それまでの祭祀は宮座が中心で、経済的な負担のほか、各種行事も宮座の個人宅で行っていた。宮座に加入する権利を有す家も、限定的であったと考えられる。それが経済的負担の増大と人員不足から維持が困難になり、昭和三十一年（一九

五六）には、宮座から上一乗寺という地域に神社祭祀の主権が移譲された。そして同三十五年（一九六〇）には上一乗寺八大神社氏子会が組織された。これにより上一乗寺の氏子会で費用を分担し、集会所で神事を行い、宮座座員を氏子から出すという、現在の形態ができあがった。

その他

一乗寺八大神社剣鉾保存会は、平成二年（一九九〇）に京都市より京都市登録無形民俗文化財に登録された際に、それまで活動していた一乗寺の鉾差しを中心に組織された。一乗寺地区における鉾差しの由来は明らかでないが、以前から親―子、あるいは師匠―弟子という関係において鉾差しの技術が伝承されてきたことは確かである。また同時に他所の祭礼にも出向いていたと考えられる。

② 剣鉾と組織

菊鉾・柏鉾・龍鉾（上一乗寺地区）

概要

【形態】

菊鉾は左右に対となる菊の鍔がついた剣鉾で、剣には菊の御紋が付けられている。鍔受（額）には「八大天王」とある。柏鉾は柏の葉の鍔がついた剣鉾で、同じく額には「八大天王」とある。龍鉾は左右に一体ずつ龍の鍔がついた剣鉾で、鍔受（額）には「八大天王」とある。三基とも黒漆塗りに螺鈿や金細工を施された長さ五メートルの棹に固定され、祭礼において差される。

【歴史】

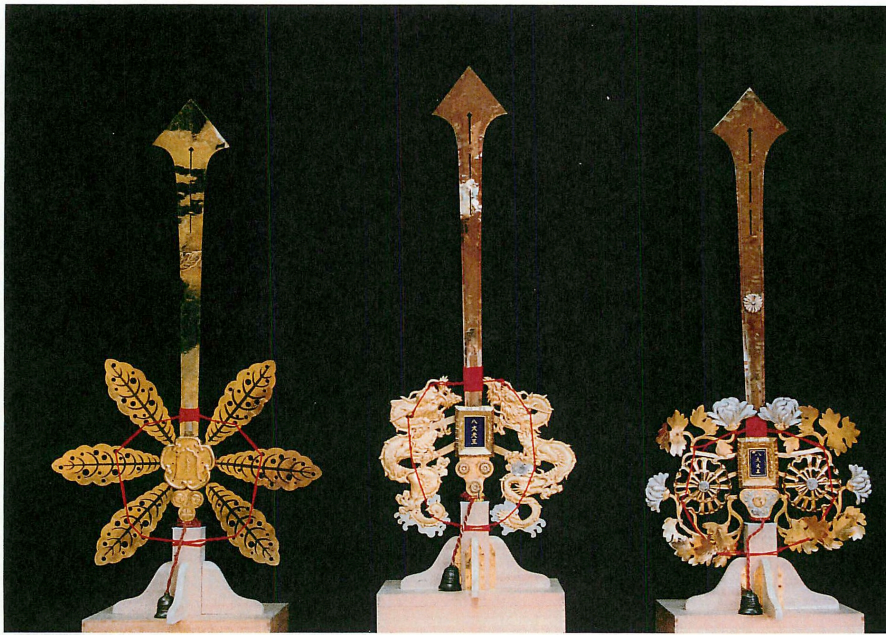
剣鉾の創始は不明。柏鉾の剣に文化十四年（一八一七）三月、菊鉾に天保十三年（一八四二）三月の銘がある。吹散は宝暦～文化年間といった十八世紀半ばから十九世紀初めに、曼珠院から寄付されている。明治初年の一乗寺共有文書によれば、一乗寺村に存在していた鉾は、当時から菊・龍・柏の三基であったことがわかる。

【護持組織】

三基の剣鉾は、上一乗寺地区すなわち旧一乗寺村全体で護持、管理される。他地域のような特定の家が連合する鉾仲間といった組織はない。また「宮座」のうち、特別に剣鉾に関係する成員も存在しない。ただ実質的に剣鉾を取り扱うのは、一乗寺八大神社剣鉾保存会による。

【収蔵場所】

平素は八大神社境内の上一乗寺地区倉庫に収蔵されている。剣鉾すべて、ある



左から柏鉾・龍鉾・菊鉾（『八大神社御鎮座七百年記念誌』より転載）

いは一部が特定氏子の住居に保管されるといったことはない。

鉾祭りの次第

八大神社の場合、剣鉾に対する祭祀はいっさい行われない。五月四日の宵宮で組み立てられ、祭礼当日の神幸行列に出された後はすぐに解体されて片付けられる。

【準備】

五月四日の宵宮祭が始まる前に、上一乗寺集会所へ剣鉾の道具類が運び込まれ、午後八時から保存会によって同所で三基同時に組み立てられる。出来上がると三基それぞれ試しに差される。午後九時過ぎに練習が終わると、剣鉾は集会所内に置かれ、保存会の面々は神社に詣で神酒を受ける。

【祭礼当日】

五月五日の朝八時、保存会によって集会所が開けられると、午後十二時半からの奉幣式が終了し神幸行列が出発するまで、三本の剣鉾は集会所前に立てかけられる。神輿渡御が終わり、神社に剣鉾が帰ってくると、吹散をつけて境内の櫓に立てかける。そして数回差した後、すぐに集会所へ運ばれる。そこでは他所の剣鉾差しが集まっており、一乗寺の剣鉾が試し差しされる。その後集会所内にしまわれ、翌日解体される。

鉾差し

一乗寺八大神社剣鉾保存会が担任する。保存会は、八大神社と上一乗寺地区の氏子で構成され、現在十名前後である。祭礼時には他所の鉾差しも参加する場合がある。例えば平成二十四年（二〇一二）では吉田神社剣鉾保存会の鉾差しが二名、粟田神社剣鉾奉賛会から一名が来ていた。

保存会は冬期を除き、月二回程度他所の保存会と一緒に、八大神社で鉾差しの練習を行う。また氏子祭の十日から一週間前より毎日、午後七時半から十時まで柏鉾を用いて練習を行う。鉾先の「まねき」と呼ばれる部分が、柏鉾のみ練習用にステンレス製のものを作ったためだという。

また八大神社の氏子祭以外にも、保存会は他所祭礼に出向き鉾差しを担任する。その範囲は京都一帯におよび、一乗寺は京都の神社祭礼における鉾差しの主たる供給源のひとつである。

釈迦堂内の祭壇（中野洋平，平成 24.5.5）

トウヤ飾り

特になし。ただし、北薬師堂・南薬師堂・釈迦堂では祭壇が設けられ、八大天王が祀られる。

その他

かつては鉾仲間が存在していたのか、あるいは当初から旧一乗寺村全体で管理していたのかについては現在不明である。

③ その他の鉾

子供用の剣鉾が五本存在する。これは昭和六十三年（一九八八）の第四十三回国民体育大会に八大神社の剣鉾と鉾差し、奉幣太鼓が協力参加した後、京都市文化財保護課から贈られたものである。氏子祭では子供神輿を先導して差される。

鉾差しは上一乗寺地区の小学六年男子で、鉾差し技術の伝承を目的に保存会によって祭礼前から練習を行っている。

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

八大神社七百年祭委員会編『八大神社御鎮座七百年記念誌』（一九九三年）
八大神社ウェブサイト http://www.hatidai-jinja.com/
末松剛「一乗寺八大神社について」（京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編『京都の剣鉾まつり』二〇一一年）

剣鉾祭礼記録・古文書

一乗寺共有文書

（中野 洋平）

鷺森神社　神幸祭

毎年五月四日宵宮祭
五月五日神幸祭
鷺森神社
京都市左京区修学院宮ノ脇町

①　祭礼と由緒

地域の概要

鷺森神社は、旧修学院村の産土神であり、東に比叡山を望む旧修学院村の南側に位置する。旧修学院村は江戸期より比叡山・一乗寺・高野とのあいだで山相論・境相論等を繰り広げてきた。

現在の修学院地区は、中心部を音羽川が東西に流れ、川の北側を北修学院（北修）、川の南側を南修学院（南修）と呼んでいる。江戸期以来の集落は北修学院側にあたり、宅地化の進んだ現在でも、修学院離宮内や近辺傾斜地において有機農業が行われている。その一方で叡山電鉄の走る一帯は、修学院の出郷であった山端地区にあたる。若狭街道沿いに面した山端は、江戸期から続く茶屋や飲食店が建ち並んでいる。また昭和十七年（一九四二）より、修学院駅近くに集合住宅である「営団住宅」が建設され、比較的早くから宅地開発が進められてきた地区でもある。

旧修学院村（北修学院・南修学院・山端・上一乗寺、営団）のうち、氏子は修学院地区（北修・南修）、山端地区を中心に約二百名を数える。これとは別に奉賛会が組織されており、神社・氏子と地域住民とを結ぶ役割を果たしている。修学院地区・山端地区を合わせて、約九百名の会員がいる。神社は氏子や奉賛会員から「宮さん」と呼ばれ、例大祭や新嘗祭、火焚（おひたき）祭などの神事で親しまれている。

鷺森神社では、宮座を中心として神事が執り行われる。宮座は十四名で構成されており、うち六名が氏子総代（ウジコソウダイ）を務め、八名が宮掛（ミヤガカリ）と総称される役を担う。宮座は次のような階梯制をとる。見習い（ミナライ）（一年～四年目）→督殿（コドノ）（五年目）→先禰宜（センネギ）（六年目）→火の子（ヒノコ）（七年目）→一番上（イチバンジョウ、七町会共有文書には「一和尚」と記載）（八年目）→氏子総代（九年～十四年目）の順である。氏子総代のうち、十四年目に該当する者は、筆頭総代（ヒットウソウダイ）として宮座全体を統括する。宮掛の八名は、修学院地区・山端地区の氏子それぞれ四名が務める。宮掛の一番上を終えると、翌年からは氏子総代を務める。総代は修学院から三名、山端から三名の計六名で構成され、六年目の総代が筆頭総代となる。三月五日の神事「お鍵渡し」（オカギワタシ）において、筆頭総代が引退し、新人の宮掛が加入する。なお新人は、修学院地区と山端地区から毎年交互に加入する。一般に、氏子総代は神事の統括にあたる「ご意見番」にあたり、実際の神事の準備は宮掛が中心となって行われる。また神事に際して、氏子総代・宮掛は白衣で参加することが定められている。

このほかに、氏子域にあたる修学院地区・山端地区では、複数の団体が活動している。修学院地区には、旧修学院村の七か町にあたる約七十世帯を中心として、「特別社団法人七町会」が運営されており、同会が修学院御旅所の管理にあたる。他方、山端地区では若狭街道沿いの商家を中心とする、約三十世帯による団体「同志会」が山端御旅所を管理する。毎年八月二十七日の大日盆には、京都市の無形民俗文化財に登録されている「修学院大日踊・紅葉音頭」が、修学院御旅所において行われ、紅葉音頭保存会の人びとを中心に、近隣の多くの氏子・住民が参加する。また翌二十八日には、修学院離宮の西側に近接する善華院において、「大日さん」と呼ばれる古くからの近隣住民を中心とした大日講が行われている。

祭礼次第

三月五日の神事「お鍵渡し」により、宮掛への新人加入と督殿の交代が行われ、例大祭に向けた準備が始まる。各地区の宮掛・神輿掛が中心となり、四月上旬にしめ縄づくり、五月一日に神社境内・御旅所の飾り付けが行われる。

五月四日の宵宮祭は、修学院地区の氏子によって執り行われ、修学院の氏子総代が神輿舁きをもてなし、神輿掛が神輿の管理、神輿巡幸の統率を行う。午後三

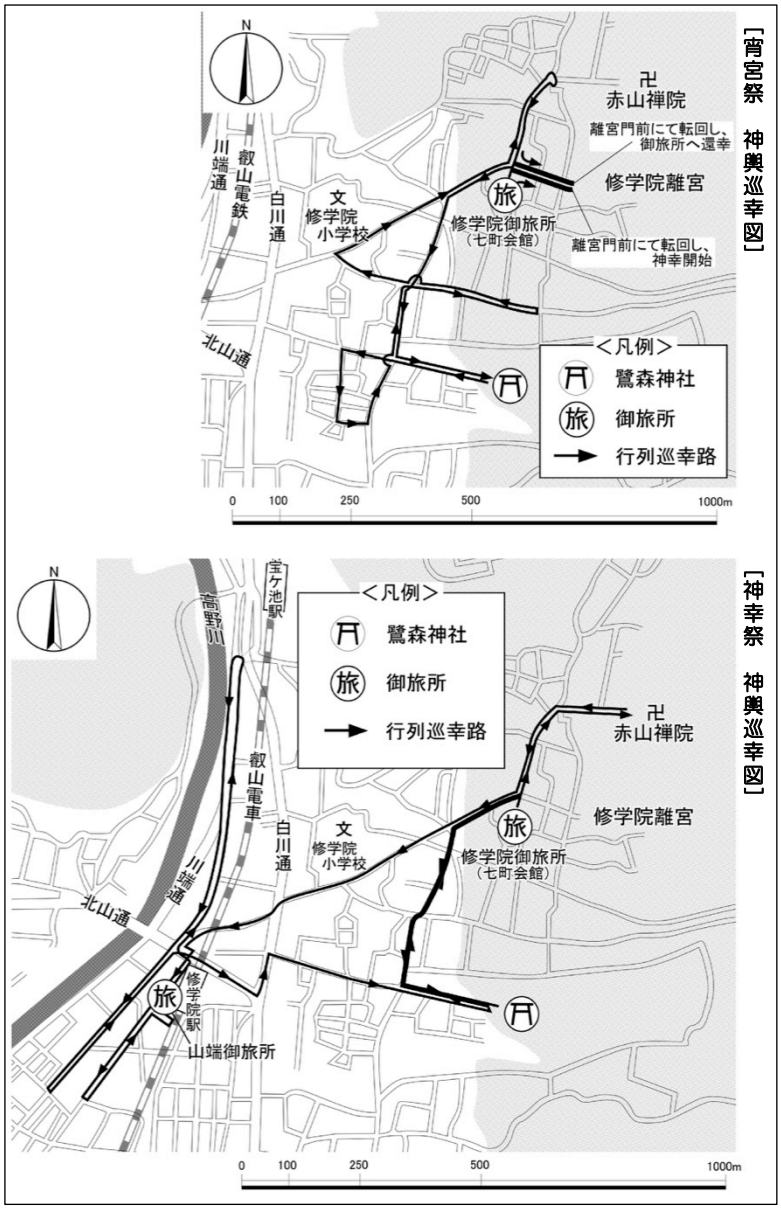
時、火の子が赤山禅院を参拝し、御幣として赤飯を供える。赤山禅院からは御神酒の奉納を受ける。午後四時、修学院神輿掛のうち、神輿巡幸を統括する取締役を中心に、三名が赤山禅院を参拝する。午後五時、神社で宵宮祭が斉行された後、氏子総代・神輿掛は修学院御旅所へと移動する。この時、氏子総代の二名は神社より提灯に火を灯して御旅所へと移動する（これをオムカエと呼ぶ）。午後六時すぎ、筆頭総代による挨拶の後、神輿は修学院御旅所を出て、修学院離宮へと向かい、そこで神輿の台車を取りつける。そして神社へと向かい、御霊を神輿へと移す（途中、宮掛も行列に加わる）。その後、神輿の行列は修学院地区を巡幸する。午後十時三十分頃、神輿は修学院御旅所の神輿倉へと入り、七町会館では修学院神輿掛を中心に直会が行われる。火の子は神輿倉で神輿とともに一夜を過ごし、蝋燭に火を灯して御霊を迎える。

五日の神幸祭は、山端地区の氏子が中心となり執り行われる。まず午前八時三十分に神社において宮司・氏子総代・宮掛・奉賛会長による勧盃の儀を執り行う。終了後、行列を整えて神社を出発し、修学院御旅所に入る。修学院御旅所において、さんよれ・はやし方・神輿を伴って赤山禅院を参詣した後、修学院御旅所に戻り神事を執り行い、女人舞楽を奉納する。そして小学生のさんよれ、はやし方による囃し「さんよれ」を催しつつ、行列は山端御旅所に向けて出発する。正午頃、行列は山端御旅所に入り、神事を催行して女人舞楽を奉納する。その後、山端地区を巡幸し、夕方には神社へと還幸する。督殿によって御霊が神輿から本殿に戻された後、神輿は修学院御旅所へ巡幸し、神輿を神輿倉へと納める。その後、山端の神輿掛・氏子・神輿舁きは山端御旅所において直会を行う。翌六日、宮掛・氏子総代が祭礼具を、修学院神輿掛が修学院御旅所を、山端神輿掛が山端御旅所をそれぞれ片づけ各自で足洗いを行う。

行列次第

宵宮では、触太鼓―提灯―松明―小若（小学生）―中若（中学生）―囃子方―取締役―大神輿―相談役―山端地区の神輿掛（上番・下番・補佐係の三名）―火の子―氏子総代―宮掛の順で、修学院地区を巡幸する。

翌日の神幸祭では、鷺森神社より巡幸を始め、旗―金棒―紅提灯―さんよれ（修学院御旅所より供奉）―囃子方（修学院御旅所より供奉）―花車―奉賛会―舞人―大榊―宮掛―総代―御弊持ち―督殿―子供神輿（修学院御旅所より巡幸）―大神輿（修学院御旅所より巡幸）―宮司車の順で行列が続く。



由緒と歴史

江戸期まで神幸祭は三月五日であったが、明治期以降、五月五日が祭日となった。また、比叡山山麓に位置する一乗寺村・舞楽寺村・藪里村・修学寺村・山端村・大原村・高野村では、同時期に一斉に神幸祭が執り行われてきたことから「七里祭」と称されていた（『諸国図会年中行事大成』三月五日条）。

鷺森神社は貞観年間（八五九-八七七）の創建とされる。当初は現在の赤山禅院の地に位置していたが、応仁の乱の兵火により修学院離宮内へと移り、さらに離宮造営の際に、現在の修学院宮ノ森の地に遷社したと伝えられる。明治期まで、現在の神社参道は馬場であり、神幸祭の際には競馬が行われていた。

また『京都古習志』によれば、もともと修学院御旅所は修学院離宮前にあり、往時の名残として、宵宮祭の神輿巡幸では離宮前まで参詣するとしている（二百五十五頁）。近年では奉賛会員が増えたことから、従来の北修学院に加え、南修学院の住宅地にも神輿が巡幸するようになった。

② 剣鉾と組織

菊鉾・桐鉾・橘鉾（鷺森神社）

概要

剣鉾は、菊鉾・桐鉾・橘鉾の三基あり、宵宮祭・神幸祭に際して、修学院御旅所内において飾られる居祭りの形態をとる。宵宮祭の朝、最初に準備される祭礼具であり、組み立てられた後、用意された木枠に入れられ吹散・鈴を付けて飾り立てられ、翌日の夕方、神輿巡幸が終わるまで御旅所内に据えられる。

剣鉾の片付けは、神幸祭における神輿巡幸を終え、神輿倉に神輿が納められた後に始まる。宮掛が中心となり、剣鉾は木枠からとり出され、七町会館内において解体される。翌日の午前中に鉾の後片付けが行われ、うす紙・新聞紙に包んだ後、木箱に入れられ、御旅所の神輿倉へと納められる。棹はそのまま神輿倉へと納められる。

三基の鉾のうち、菊鉾の鍔は菊をモチーフに装飾されており、鍔受（額）、受金に菊紋が描かれている。菊紋の由緒は不明だが、地元では菊紋は修学院地区や七町会を表現する紋として知られている。桐鉾も同様に、鍔は桐をモチーフに装飾され、鍔受（額）、受金に桐の紋が描かれている。桐紋の由緒は不明だが、地元では桐紋は山端地区を表現する紋として知られている。橘鉾も、鍔は橘をモチーフとした装飾であり、鍔受（額）、受金に橘の紋が描かれている。橘紋の由緒は不明である。これらの剣鉾は、修学院御旅所内にある神輿倉の北側に飾られる。鉾を並べる順番は、西側から菊鉾・桐鉾・橘鉾と定められている。

夏期には、虫干しが行われる。主に毎年七月下旬の土曜日に、神社境内・修学院御旅所において行われる。

鉾差し

昭和三十年から四十年頃まで、剣鉾は差し鉾として神輿の巡幸に供奉していた。鉾差しは修学院地区の農家の人びとがあたっていた。修学院御旅所で、鉾差しの練習を行っていたことが知られる（六十代男性より聞き取り）。この練習に合わせて、一乗寺の鉾差しも来訪して交流していた（七十代男性より聞き取り）。昭和三十年から四十年代ごろに差し鉾が断絶し、その後、差し鉾復興の気運が高まった時期もあったが、差し手の確保が難しく、差し鉾の再興は断念されている。

その他

剣鉾の棹は、一昔前まで神輿舁きの練習の際、修学院御旅所において子供たちの遊びの中で担がれていた。

差し鉾の記録としては、『京都古習志』に「列中に橘、帽額、菊の三鉾が有る」（二百五十五頁）とある。『鷺森神社改築記念誌』の神幸祭行列順の記載には、「菊鉾（紺地模様付単衣）桐鉾（同様）橘鉾（同様）」（二十四頁）とあり、剣鉾も巡行していたことが窺われる。修学院地区には先代が鉾差しであった家もあり、剣鉾が神輿とともに巡行していたことを記憶している方もおられる。

吹散については、朝廷より拝領したことが確認できる。神社所有の口上書「乍恐口上書の覚　慶長十九年寅十一月」によれば、「寛文二寅年の春より　後水院法

王祭、修学院御茶屋へ御幸被成在候につき氏神、鬚咫天皇、神具御寄付被為候次第の覚　一、ほうれん　一、御幕　一、御紋提灯　一、御冠　一、御装束　一、御紋付吹ちり三幅　一、御さんもつ」とあり、仙洞御所より吹散三幅が下賜されている（『鷺森神社改築祈念誌』十八―十九頁）。また『七町会共有文書』（一）の「文化十四年丑年三月目録」によると、禁裏御所より菊紋の吹散を二掛、中宮御所より三重の菊紋を一掛、それぞれ拝領している。

差し革は六個残存している。祭礼具を入れる木箱内に、差し革はそれぞれひもで括られて保管されている。このうちの三個には、「明治四十年新調」と布地に黒糸で刺繍されている。

③ その他の鉾

神社所有の鉾として、日鉾、月鉾が三基ずつ計六基ある。日鉾・月鉾は宵宮祭、神幸祭の際に、本殿前に居祭りのために飾られる。

日鉾の三基のうち、一基は吹散が日紋で、朱色の木枠・朱色の紐で固定され飾られる。その他の二基は、吹散が菊紋であり、木枠に固定されて飾られる。月鉾も同様で、一基は吹散が月紋で、朱色の木枠・朱色の紐によって固定されて飾られる。他の二基は、吹散が菊紋であり、木枠に固定されて飾られる。

三本の剣鉾（杉浦理恵，平成 23.5.4）

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

杉浦丘園『洛北修学院村道しるべ』（雲泉荘、一九二七年）

井上頼寿『京都古習志 ―宮座と講』（地人書館、一九四三年）

植木敏弐編『鷺森神社改築祈念誌』（鷺森神社造営委員会、一九六七年）

修学院各種団体連絡会『修学院史誌』（修学院各種団体連絡会、一九六八年）

儀礼文化研究所編『諸国図会年中行事大成』（桜楓社、一九七八年）

修学院小学校ＰＴＡ八十周年記念誌編纂実行委員会編集『修学院風土記』（修学院小学校ＰＴＡ、一九九七年）

石田千香子「近代における女人舞楽の創始者、原笙子の生涯 ―鷺森神社との関係を中心に」（『芸術学学報』十七、二〇一〇年）

末松剛「一乗寺八大神社について」（京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編『京都の剣鉾まつり』、二〇一一年）

剣鉾祭礼記録・古文書

京都市歴史資料館架蔵写真「七町会共有文書」

（東城 義則）

崇道神社　大祭

毎年五月五日
崇道神社
京都市左京区上高野西明寺山

①　祭礼と由緒

地域の概要

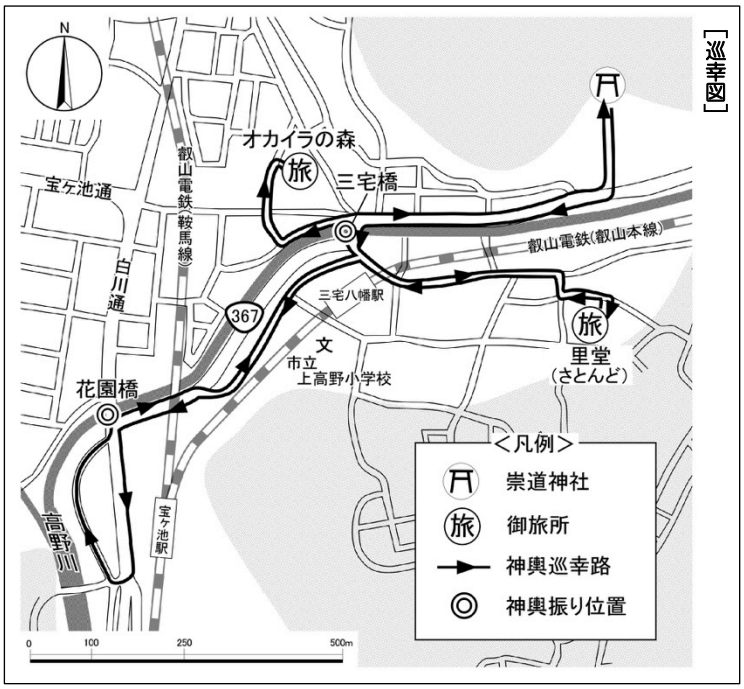
左京区上高野西明寺山に鎮座する崇道神社は、社名の通り、桓武天皇の皇太弟早良親王、後の崇道天皇を祀る神社である。日本史上最大の御霊のひとつである崇道天皇を祀る神社が、なぜ高野村の産土とされるのかはよくわかっていないが、すでに江戸時代には高野御霊として有名であるとともに高野村の氏神でもあった。

高野村は、高野川の谷口扇状地に位置し、北から東にかけて八瀬村と、南に修学院村、西に岩倉村に接する。集落は、高野川の左右両岸に分かれ、江戸時代を通じて全村が禁裏御料地であった。明治初期には、百三十四戸、六百八十二人を有する比較的大きい集落であり、現在は住宅地開発が進んで、三千世帯、七千人余りの人口を抱える。

祭礼次第

崇道神社の大祭は、毎年五月五日を祭日として行われる。五月三日には、地元で里堂（さとんど・上高野植ノ町）といわれる御旅所にて、神輿や剣鉾等の祭具の飾り付けを行う。里堂には神輿蔵をはじめ、会所もあり、祭具等は全てここに納められている。五月五日には、里堂から神輿行列が出発し、氏子地域やオカイラの森（後述）を経た後、本社に着輿する。そういう意味では、還幸祭のみが残されて伝承されてきているわけである。ただし、昭和戦前期においても、神輿の巡幸は里堂を起点にしており、もともと神幸祭と還幸祭という形式をとっていたかはわからない。

［巡幸図］



行列次第

行列順は次の通りである。

①総代―②稚児―③唐櫃―④鉾―⑤剣―⑥布鉾―⑦榊―⑧太鼓―⑨さんよれ―⑩子供神輿―⑪神輿―⑫神馬―⑬宮司―⑭御供―⑮総代

唐櫃（③）と太鼓（⑧）はそれぞれ四名ずつ上座の者が任にあたり、鉾（④）と布鉾（⑥）は中学生くらいの男子四名が任に当たる。

剣（⑤）は剣鉾のことであり、数え歳二十四歳の若者四名がその任にあたる。二基の剣鉾を寝かせたまま前後二人ずつで担ぐ。担ぐ人たちは絣の着物を着、白の地下足袋ばきといういでたちである。

平成二十五年五月三日の行列経過は、次の通りである。

十三時　お旅所（里堂）出立
十三時十分　小休止。子供神輿のみ三宅橋のたもとへ進む。
十三時二十分　三宅橋のたもと、南北二か所で神輿を振る。
十三時五十分　花園橋のたもと、南北二か所で神輿を振る。
十四時一五分　上高野上荒蒔町にて小休止。
十四時四十分　花園橋のたもと、南北二か所で神輿を振る。
十五時十分　三宅橋のたもと、南北二か所で神輿を振る。
十五時三十分　オカイラの森到着。神輿を安置した後、献饌の準備をし、神事。清祓の後、祝詞奏上、玉串奉奠（宮司→稚児→氏子総代→上座→中座→下座→崇道神社奉賛会→崇道神社護持会→自治会長→町内会長の順）。
十六時　オカイラの森出立
十六時十七分　三宅橋のたもと、南北二か所で子供神輿を振る。
十六時二十三分　三宅橋のたもと、南北二か所と、橋の中央にて神輿を振る。
十六時三十七分　崇道神社到着。太鼓は参道脇へ退避。
十六時五十二分　神輿は拝殿におさめる。剣鉾・子供神輿は参道脇の駐車場へ入り、拝殿まで行かない。
十七時五分　本殿前にて神事。宮司が祓えの詞奏上、修祓の後、総代が供饌。その後玉串奉奠。順番はオカイラの森でのそれと同様。祭典終了後、神輿、剣鉾は里堂へ戻す

由緒と歴史

江戸期には毎年三月五日に行われ、「高野祭」といわれていた。『都名所図会』の後編として天明七年（一七八七）に刊行された『拾遺都名所図会』の「高野社」の項には、次のような興味深い記載がある。「神輿一基、祭礼の時神幸道定らず、只神慮に任て田畑川脉に限らず、常に路なき所を渡るなり、これに逆ふ時は神輿重くして上らず、あるひは神輿の勢によつて人家の方へおもむき給ふときは、檐活檐を破らるゝ事あり、御霊の御こゝろに協はざれば、忽其所を動かずして去給はず、村民手に汗を握りて神威を恐れ奉るなり、惣じて神輿舁は、所の古老の者出て烏帽子素袴を着し、無言にして祭礼をわたすなり、」とあり、高野御霊としての畏怖を示すような内容が記される。

崇道神社の祭祀組織は、現在は平成十年に組織された護持会と、以前からの氏子総代会が中心となり、それに町内会が協力する形になっている。伝承によれば、かつてはコウドノ（督殿、あるいは神殿）と称される当番神主の制度があり、コウドノを中心に祭祀が行われた。コウドノには上中下があり、上が後厄、中が本厄、下が前厄の者がなった。現在は当番神主の制度そのものは廃されたものの、専任の神官が旧村民のなかから選ばれている。

井上頼寿の『京都古習志』には、昭和戦前期のコウドノの役目や儀礼が詳述されている。それによれば、明治までは八軒のコウドノ株があったというが、昭和戦前期には十五軒にまで株数が増えたという。株といっても、閉じられた特権的なものではなくて、年齢に従って加入する開放的な組織であったようである。祭礼組織と

オカイラの森に着輿した神輿（村上忠喜，平成 23.5.5）

巡行中の剣鉾（村上忠喜，平成 23.5.5）

しては、二十四歳までの若中が神輿舁きで、二十四歳になると抽選でそのうちの四名が剣鉾を持つ。神輿舁きが済むと中座と称する組織に自動的に加入する。中座の頭は四名で、中座頭と称し、大体四十五、六歳の年齢の者があたった。その上がコウドノであり、年齢順に一年間の当番神主を務め、その任を終えると、先役と称しコウドノの教育係を行う。先役を終えると、神社祭祀の全ての役から退くという。

以上のような年齢階梯的な組織のありようは、高野村の村内組織にみられる年齢集団の強さに基づいている。『京都古習志』には、トモダチ（友達）とカクセツという同性の同齢集団が報告されている。トモダチは男児の組で、小学校六年になる頃に組織される。一組が四、五十人というから、結構な人数である。この組ごとに、年に数回寄合って酒食を共にし、三十代の頃にはトモダチとして崇道神社の祭礼に馬を奉納する。その後トモダチは解散し、皆は、祭礼の際に献灯するチョウチン（提灯）と称する終身の仲間に入る。

カクセツは女性の組で、小学校入学時から結婚までは付き合う。五月と十月に米五合をヤド（おそらくまわり持ち）へ持ち寄り、会食して一晩話し明かしたという。

ちなみに、オカイラの森は、崇道神社の御旅所ともいわれる。小高い丘状の土地であるが、『延喜式』木工寮条に記された小野瓦屋と推定される平安時代中期の官営瓦工房跡で、丘自体が人工的な盛り土によって作られている。「小野瓦窯跡」として京都市の指定史跡となっている。

② 剣鉾と組織

剣鉾は二基存在する。双方とも現在は神社所有であり、里堂の神輿蔵に保管される。明治七年（一八七四）の金具一式修理銘のある箱書に、施主名と共に神殿（コウドノ）の名前が挙げられており（資料編参照）、宮座の役職であるコウドノが寄贈していることからも、剣鉾は特定の村組ではなく、村所持、あるいは氏神所持の祭具であったことが推測できる。

剣鉾は、二基とも受金のないタイプで、鍔は左右に鳳凰と龍をあしらい、飾受は円形で三つ巴紋である。

布鉾（村上忠喜，平成23.5.3）

③ その他の鉾

大祭には、布鉾という竹と布で作られた鉾が出される。布鉾は昭和四十七年（一九七二）に、当時の神社総代のひとりであったO氏がはじめたものである。四メートルほどの竹を棹とし、竹で一辺が一メートル六十センチメートルほどの三角形を組んで取り付け、そこに晒し木綿をかけたものである。竹や布の固定には棕櫚の繊維を使用し、先には榊を取付ける。

（村上 忠喜）

八瀬天満宮社 例祭

毎年五月五日
八瀬天満宮社
京都市左京区八瀬秋元町

① 祭礼と由緒

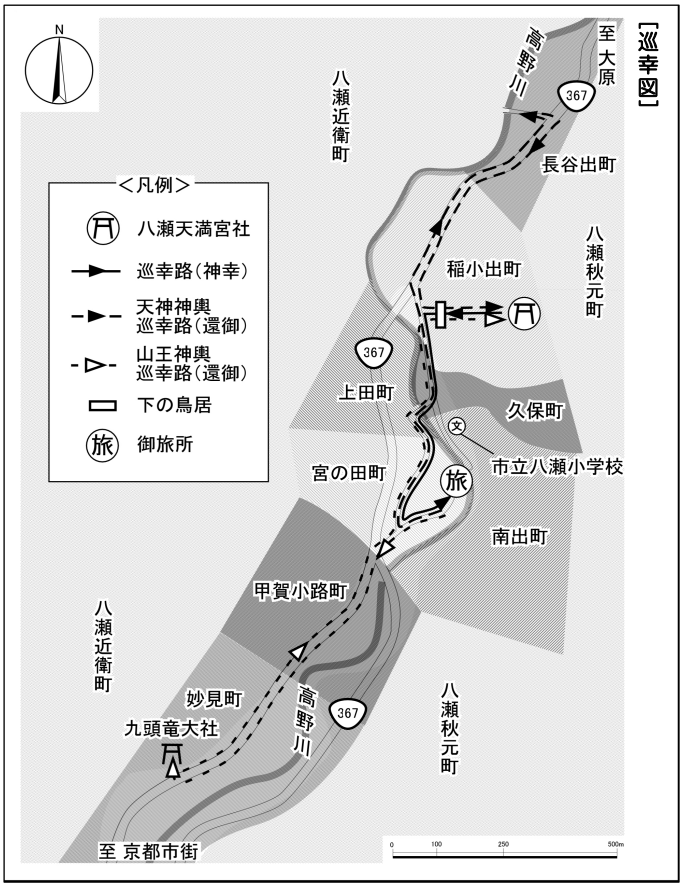
地域の概要

八瀬天満宮社は、菅原道真が勉学のために比叡山に登る途中、休息したとされる地に、道真の死後、彼の師の法性房尊意が道真の霊をここに勧請したのが発祥と伝える。八瀬の産土神である。境内には、本社に向かって右奥から、十禅師大権現、山王神社・八王子、秋元神社、幸ノ神社、八幡大神、左奥から白井大明神、六所大権現、若宮大明神の祠がある。また、社務所の脇には、貴船大明神・岩上神社・白髭大明神が合祀された祠がある。

八瀬は北の大原から南に流れる高野川沿いに発達した集落で、地名の由来は壬申の乱の際、大海人皇子がこの地で背中に矢を受けその療養のために村人が「かま風呂」を作って奉じたことから、「矢背」と呼ぶようになったと伝える。現在は、北から八瀬花尻町、八瀬近衛町、八瀬秋元町、八瀬野瀬町の地域行政区があり、八瀬天満宮社のおもな氏子地域は、高野川を挟んで区分される近衛町と秋元町である。左岸の秋元町は、北から長谷出町（はせだしちょう）、稲小出町（いなこでちょう）、久保町（くぼちょう）、南出町（みなみでちょう）、右岸の近衛町は上田町（うえだちょう）、宮の田町（みやのたちょう）、甲賀小路町（こかこうじちょう）、妙見町（みょうけんちょう）の八か町に分かれている。この八か町は中世に遡るもので、旧町名と呼ばれている。八瀬八幡宮社の一年間の世話をする町を祭礼当番といい、この八か町が順番にあたる（順番は記載の通りで、平成二十三年は宮の田町）。祭礼当番の町からは、神主を一年ごとに勤める高殿（こうどの）を選出する。また、十月の八瀬赦免地踊では、この八か町をもとにした四つの組からそれぞれ最も年配の男性を長老として、その家を宿に定め、それぞれ一基の灯籠が奉じられる。

高殿の選出方法は町によって多少異なるが、宮の田町の場合、前年の九月中旬に町の世話方（町の長、副、会計など四、五人）で会議を行い、合議をもって高殿、実行委員長を決める。しかし、以前は町ごとの当番制ではなく、八か町全体で準備などにあたり、高殿も八か町のなかで選出され、任期は二年であった。また、高殿は、明治までは大家（だいけ）と呼ばれる株の家から選出されていたという（『京都古習志』）。

ここで、祭礼に関する組織、役割を整理しておきたい。職業的な神主がいない八瀬天満宮社では、高殿だけが本殿の中に入ることができ、神事の一切を取り仕



切る。高殿になると、四足（よっあし）のものを食べてはいけないといった禁忌がある。また、身内に不幸があった場合、たとえ喪主を務めるような関係にあっても、葬送儀礼には関わることができない。

副高殿は、次に高殿を務める者で、前年の十一月の御火焚きから、高殿の見習いとして出席し、年越しをもって高殿を引き継ぐ。

高殿を勤め終えた者は、先禰宜（せんねぎ）となり、高殿の指導にあたる。神事の際には先禰宜も参加し、神事を手伝う。その他、祭りの責任者として、実行委員長がおり、行事の裏方として高殿を助ける。因みに、近年では高殿は六十歳代、実行委員長は七十歳代ぐらいの人が選ばれている。

神輿舁きは、駕与丁（かいちょう）と呼ばれ、二十歳前後から六十歳前後の男性があたる。そのうち、数え年で四十九歳の者の中で、早く生まれた者が駕与丁頭（かいちょうかしら）を務める。もともと駕与丁頭は神事目付役であり、高殿および老衆以外の者は、すべて駕与丁頭の指図に従うものとされていた（『愛宕郡各町村沿革調』）。また、昔は近江坂本から、駕与丁として応援に来てくれていたという。

満六十才を迎えた人は、老衆と呼ばれ、老衆の年長の者から順に三人が、一和尚、二和尚、三和尚と呼ばれる。かつては年齢順で、定員も十八人と決まっていた。

須行（すぎょう）とは、御供物を調進する役で、明治以前には「おうえ座」「しゆくのえ座」の二座に分かれ、それぞれ二名一組で調理をしていたという（『京都古習志』）。

そのほか、八瀬天満宮社の例祭には、高殿息子（中年男性）、孫役稚児（男児）、賽銭のろい（女児）など、八瀬の地に独特の呼称の諸役があるが、その詳細は未調査である。

祭礼次第

五月三日には境内の神輿蔵にて神輿などの点検を行う。高殿宅では、午前十時から七色、平餅などお供えの準備を行なう。七色とは、若布、青海苔、わらび、茗荷、筍、牛蒡、山芋を、ちさの葉で巻き、藺草で束ねたものである。

五月四日の午前中は、男性によって神社の注連縄などの準備、女性によって煮しめ、白しごきなどを準備する。午後二時に先禰宜、老分衆ら高殿宅に集まり、午後三時より宵宮祭のために神社に向かう。高殿は、口髭・顎鬚を付け、白の直垂に烏帽子を着けて参列する。

（行列次第）

竹の御幣十五本（先禰宜一名）、御幣三本（稚児〔孫役〕）、賽銭のろい（女子一、二名）、御幣櫃二棹（須行四名）、高殿（一名）、息子（一名、足半）

お供え物は、前日に用意した七色十五膳、平餅は三枚束ねたものを十五組、ちまき十五本、箸十五膳、白しごき（糯米を蒸したもの）十五膳などである。社頭で祭典の後、酒宴がある。その後、鉦、太鼓、御幣櫃は、高殿宅に持ち帰る。

午後八時にはふれ太鼓がある。高殿宅から、軽トラックに太鼓を載せて、地域全体を叩いて回る。

五月五日の例祭の当日は、午前九時より老衆らの「朝参り」の行列が高殿宅を出発する。高殿は、口髭・顎鬚を付け、青の直垂に烏帽子を着けて参列する。また、息子は化粧まわしを着けて参列する。

（行列次第）

榊御幣（先禰宜一名）、竹の御幣十五本（稚児〔孫役〕及び付け人）、賽銭のろい（女子一、二名）、御幣櫃二棹（須行四名）、金の御幣（副高殿二名）、息子（一名）、高殿（一名）、老衆、駕与丁頭、傘持（一名）

午前九時二十分頃より社頭にて祭典がある。各社を参拝し、供物を供える。金の御幣は、老衆が居並ぶ拝殿に祀られる。

午前十時より駕与丁らの「朝参り」がある。各社参拝したあと、高殿が神輿蔵を開錠し、駕与丁らは神輿の飾り付けや、鉾の組み立てを行う。神輿は二基あり、大きいほうの天神神輿は拝殿前で、小さいほうの山王神輿は十禅師社・山王神社の前で飾り付けが行われる。その間に、高殿は仮屋にて衣冠束帯に着替える。

午前十一時頃、神輿の飾り付けを終えた駕与丁らは、いったん旧街道まで下がり、駕与丁頭が赤鳥居の注連縄を切った後、赤鳥居をくぐって、駕与丁頭を先頭に社参する。

午前十一時三十分頃、拝殿で市殿による神楽舞がある。採物は、神楽鈴と榊で、老衆が締太鼓と銅拍子（小型の銅鈸）の演奏を担当する。神楽舞は、時間にして十分ほどで、その間に駕与丁らが足半を脱いで拝殿にお参りする。神楽舞が終わると、拝殿の老衆が神酒をいただく。

正午ごろ、高殿により、御宮遷し（御霊遷し）が行われる。まず、山王社の遷宮があり、続いて天満宮の遷宮がある。駕与丁頭が「駕与丁衆よう参らっしゃったの」と言うと、神輿が立ち上がる。高殿が先に石段を降り、手水付近で剣鉾や花鉾とともに待機する。駕与丁頭が鳥居に張られた細い注連縄を外すと、神輿が石段を降りる。天神神輿、山王神輿の後ろに、剣鉾、花鉾、息子、高殿らが続く。

赤鳥居をくぐって旧街道に出ると、神幸列は南へ向かい、御旅所を目指す。天神神輿は台車に載せて曳行し、山王神輿は舁いていく。

御旅所は、宮の田町の妙傳寺の向かいにあり、敷地の一部が八瀬保育園になっている。御旅所の南端には、立ち木と電信柱を支柱にして青竹を渡してくくったところがあり、そこに剣鉾を立てかける。御旅所の中央にある平たい石の上に祭壇を設け、金幣を祀る。祭壇の両脇にある立ち木には注連縄が張られる。祭壇の南側にはコモ（莚）が敷かれ、高殿がお神酒を供え、御幣を振った後、祭壇に向かって両掛に腰掛ける。祭壇の北側に神輿が安置され、さらに北側には神楽舞を奏するための莫蓙が敷かれる。神楽舞は、市殿により神輿に向かって奏される。採物はまず檜扇、次に神楽鈴である。神楽舞の後、駕与丁らが神輿に参拝する。

午後一時頃、御旅所から還御の行列が出発する。神輿以外の諸役が先に出て、往路をそのまま戻り、天満宮社の赤鳥居を目指す。天神神輿も、その後ろをついていくが、鳥居の前を通り過ぎて、長谷出町まで行く。山王神輿は御旅所から南へ向かい、妙見町の九頭竜大社の前まで行く。折り返し地点では、長谷出町と妙見町の人たちによって酒などのふるまいがある。また、高殿宅前でもふるまいがある。

神輿が鳥居を通ってからでないと、その他の諸役は鳥居を通れない。そのため、高殿らは旧街道の赤鳥居の周辺で、神輿の到着を待つ。ただし、剣鉾は先に天満

朝参りの列（前列左より金幣、賽銭のろい、稚児、金幣。後列に御幣櫃など）（那須良浩，平成 23.5.5）

渡御の列（左より花鉾、高殿息子、高殿、傘持ち）（福持昌之，平成 23.5.5）

御旅所祭（市殿の正面に二基の神輿と高殿）（福持昌之，平成 23.5.5）

宮社に帰社し、解体され、収納される。

午後四時頃、二基の神輿が帰社すると、御霊遷しが行われ、参列者はいったん帰宅する。午後六時、公民館にて直会がある。

行列次第

祭礼当日の行列の順序は次の通り。

金の御幣（副高殿二名）、鉾三基（高殿の町内の者六名）、天神神輿（駕与丁、台車）、山王神輿（駕与丁、台車）、御幣三本（先禰宜一名）、高殿宅御幣（稚児数名）、守役、賽銭のろい（女子二名）、守役、御幣櫃二棹（須行五名）、太鼓・鉦（五名）、花鉾（一名）、息子（一名）、高殿（一名）、傘持ち（一名）、市殿（巫女）、宮総代（三名）、老衆。

由緒と歴史

八瀬天満宮社の祭礼は、明治初年までは四月上の辰の日であり、新暦になって五月十日に定めたが、雨が多かったことから五月九日に変更した（池田昭『天皇制と八瀬童子』）。大正十一年（一九二二）の江馬務『日本歳事史』には、八瀬祭は五月九日とあり、そこに行事の次第がおおよそ記されている。内容は以下のとおり。午前九時に社前の馬場で馬駈があり、神饌を供進する。午前十一時に二回目の馬駈があり、正午に騎馬の神主を先頭に、諸役人、駕輿丁の順で神社に参勤する。午後一時、神饌、剣鉾三本、神輿（天満宮）、神輿（山王社）、太鼓、鉾、神主（騎馬）、老分衆、一般参拝者の順で御旅へ渡御する。午後二時、還御（列順は渡御と同じ）。午後三時、三回目、四回目、五回目の馬駈があり、午後四時に終わる。

また、『日本歳事史』には、神事には一和尚二和尚らが、浄衣姿で扇を開いて歌を唱えながら、舞いながら歩くという。その後ろには、数十人の子供が踊鉾といって、竹の先に五色の紙を付け人形様の物を付けたものをかざしながら、「さんやれ、さんやれ」と囃しながら歩くとある。そして太鼓、鉦の囃子が続き、二基の神輿舁きたちも、「さんやれ、さんやれ」と囃すという。

池田昭は、『天皇制と八瀬童子』で、『八瀬村記録』などを根拠に、昭和十年（一九三五）に神事に関する大改正があったことを指摘しており、「谷北文書」と「八瀬民間習俗調査資料」をもとに、それ以前の年中行事の様子について紹介している。なお、宇野日出生『八瀬童子 ―歴史と文化』によると、『八瀬村記録』は明治五年（一八七二）成立の重要な資料であるが、所在不明とのことである。

その他

市殿と呼ばれる巫女は、以前は左京区松ケ崎の人に頼んでいたが、現在は妙見町の玉置氏に頼んでいる。

御旅所の祭壇を設ける横に長い黒い石は、御供石と呼ばれ、御旅所のもっとも古い形式であるといわれている（『京都民俗志』）。

② 剣鉾と組織

特徴

八瀬天満宮社の剣鉾は、神社の祭具であり、鉾町や鉾仲間は形成されていない。剣鉾は三基あり、地元では単に「鉾」と呼ばれ、それぞれを区別する名称はない。いずれも神輿蔵に保管され、収納箱も区別されていない。

まず、額に「八幡宮」「正徳四歳三月廿五日」と刻まれた鉾であるが、鷹の羽の鍔を左右三枚ずつ配する。次に、額に「六所権現」「正徳四歳三月廿五日」と刻まれた鉾は、鍔が澤瀉の意匠である。最後の一基は、棹と剣の間に鍔状の部材が付き、鍔受や受金がない鉾で、棹の上部の左右に穴が開けられており、そこに日月の扇が取り付けられている。さらに、棹の正面には小さな穴が開いて織り、ピンを差し込んで扇と棹を固定する。

これら三基の剣鉾の剣はいずれも、長さが短く、柔らかい素材でできていることが共通する。おそらく、銅に金メッキしたものが使用されていると思われる。

剣鉾の製作年代は、額の正徳四年（一七一四）の銘が参考になるが、その他には箱書なども伝わっておらず、製作者や製作の経緯など詳細は不明である。

八瀬童子会文書によれば、寛政十一年（一七九九）に「鉾之吹散　二流」を禁裏より拝領している（一四七　禁裏御所祭具渡状）。その後、そのうち一方（紅と紫のうち、紅のほう）が破損したため、安政三年（一八五六）に再び拝領した（一六一　天満宮祭具奉納書）。これらの吹散については、今回の調査では確認できなかった。なお、現在剣鉾に使用している吹散は、表地は三流とも紫地に菊唐草の文様で、裏地はそれぞれ紅色（白抜きで鳩）、紺色（白抜きで三つ巴）、蓬色（白抜きで沢瀉）である。ただし、これらは古いものではない。

鉾差し

八瀬では、鉾差しとは呼ばず、鉾持ちと呼ばれている。鉾は、かつては立てたまま巡行していたと伝えられているが、詳らかではない。

剣鉾一基につき、前後二名で、肩に乗せて運ぶ。おおよそ、高殿の居住する町の者から六名が選ばれて担当する。

トウヤ飾り

剣鉾は、巡幸当日に神社境内で組み立てられ、渡御行列に供奉し、還御してすぐに片付けられる。鉾を護持するトウヤはなく、トウヤ飾りとして剣鉾が飾られることはない。

鷹羽の意匠の剣鉾
（福持昌之，平成 23.5.5）

澤瀉の意匠の剣鉾
（福持昌之，平成 23.5.5）

扇の意匠の剣鉾
（福持昌之，平成 23.5.5）

③ その他の鉾

花鉾

一般的な鉾の穂先に、つつじ、山吹、卯の花の色花をくくり付け、八瀬では花鉾と呼んでいる。五月三日の、神輿などの点検を行う際に、花鉾に使用する色花を切って準備する。色花は、境内の手水につけておき、五月五日の朝、渡御の出発前に、鉾に蔓でくくり付ける。

岩上神社鉾

江馬務『日本歳事史』では、神輿の前に「剣鉾三本」、後に「鉾」があるという。また、『天皇制と八瀬童子』では、昭和十年（一九三五）の神事に関する大改正が行われる以前の様子として、「鉾三梳」と「岩上神社鉾」があるとしている。そして、御旅所に渡御した際、鉾三梳は妙傳寺の門に立てかけられ、岩上神社鉾は天満宮神輿の後方へ立てかけられるとしている。「剣鉾三本」と「鉾三梳」は、現在伝わる三基の剣鉾であると思われるが、「鉾」「岩上神社鉾」については、詳らかではない。

さいの鉾

八瀬童子会文書によれば、文化十三年（一八一六）に天満宮と山王の神輿を新調（もしくは大規模修理）した際、あわせて「さいの鉾　壱本」を新調している（一五

一 天満宮神輿仕様帳）。製作者は堺町竹屋町上ルの錺師、藤屋権兵衛（体阿弥権兵衛）であった。その際の費用は三十四匁五分で、さらに附属する色紐に四匁五分がかかっている。ただし、この鉾については、これ以上のことはわからない。

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

京都府立総合資料館蔵『愛宕郡各町村沿革調』（明治一九年）より「八瀬村」の部。

江馬務『日本歳事史』（内外出版、一九二二年）

井上頼寿『京都民俗志』（初版一九三三年。一九六八年、平凡社より復刊）より「八瀬天神御供石」の項。

平山敏治郎「山城八瀬村赦免地一件（一）」（『人文研究』二十三巻十号、大阪市立大学文学部、一九七二年）

八瀬小学校創立百周年記念事業実行委員会編・発行『八瀬校百年史』（一九七七年）

池田昭『天皇制と八瀬童子』（東方出版、一九九一年）

宇野日出生「八瀬の年中行事」（『京都市歴史資料館紀要』十七号、二〇〇〇年）

宇野日出生『八瀬童子 ―歴史と文化』（思文閣出版、二〇〇七年）

沼田愛「学外実習調査報告 ―八瀬の赦免地踊の組織の現況」（『アジア文化研究』十二号、二〇一二年）

剣鉾祭礼記録・古文書

京都市歴史資料館編・発行『叢書 京都の史料4 八瀬童子会文書 増補』（初版二〇〇〇年、増補版二〇〇三年）

鉦銘：口縁部に「大正四年五月 奉納 正木源治郎」の刻銘がある。また、皿底部には、「京都高製」の刻銘がある。

金幣の銘：透かし彫りがある金幣は、鏡が（御幣の先端部分）方形で「山城国八瀬／天満宮」とあり、そのうち「山城国八瀬」は線刻、「天神宮」は透かし彫りされている。透かし彫りがない金幣は、鏡が五角形で、その表裏に「山城国／愛宕郡／八瀬里」、幣串の中ほどの金具に「大屋但馬守家臣井上氏勝奉納之」の刻銘がある。

（福持 昌之）

地主神社 神幸祭

毎年五月五日
地主神社
京都市東山区清水一丁目

① 祭礼と由緒

地域の概要

地主神社は、古くから清水寺の鎮守としての性格を有し、同寺の本堂の北側に鎮座している。当神社は、主祭神を大国主命とし、素戔嗚命、奇稲田姫命、足摩乳命、手摩乳命を正殿に祀る。

地主神社の氏子地域は同神社から西に広がっており、その北限は霊山町、南限は清水新道あたりまで、そして西は東大路通りを渡った清水五丁目までである。これはおおよそ清水学区に相当する。具体的にいうと、清水一丁目、清水二丁目、清水三丁目、清水四丁目、清水五丁目と、新道一丁目、清水新道、霊山、五条新道といった町々である。このうち清水四丁目に関しては、東・西・南の三地区に分かれているため、氏子地域は全部で十一の町からなっているといえる。

以上のうち、お飾り場を設けるのは、清水一丁目、清水二丁目、清水三丁目、清水四丁目、清水五丁目、清水新道、新道一丁目などの町で、その中には神輿を出す町もある。とくに、清水五丁目は先達（せんだつ）という役柄で、「榊組」とも称し、昔は竹竿を曳いて歩く先導役であったという。この町の神輿には榊と太鼓が据えられている。

剣鉾を所有している町は、清水一丁目と清水二丁目となっており、どちらの剣鉾も現在は行列で差すことはなく、町内で祀るのみの状態になっている。

祭礼次第

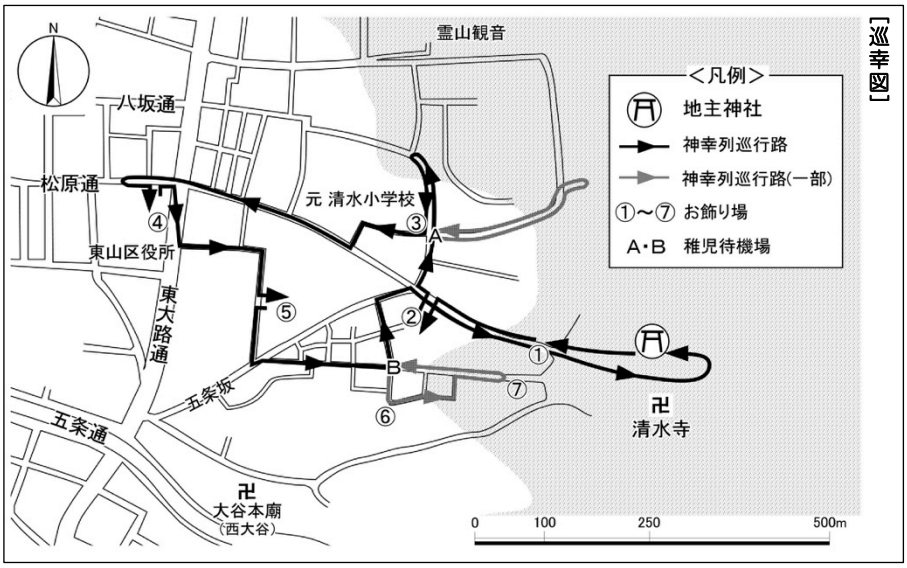
神幸祭前日の五月四日、清水二丁目や清水五丁目などでは飾り付けが行なわれ、また宮司により神輿のお祓いを受ける町がある。

神幸祭当日の五日は、午前九時より、清水一丁目をはじめとして、各町で宮司と権禰宜による祓いが行われる。平成二十四年度の例でいうと、まず、清水一丁目の交番跡のお飾り場（地図番号①）で午前九時より十六分ほど、次いで九時二十分に清水二丁目の土産物屋順正（②）、九時二十四分に清水三丁目（③）、清水五丁目のK氏宅（④）、そして清水四丁目（⑤）、十時二十分に清水新道の集会所（⑥）、最後に十時二十八分に新道一丁目（⑦）と、各町の飾り場で順に修祓の儀を行なった。これらが終了すると、宮司らは神社へ戻る。

午後一時、神幸祭の行列が地主神社を出発する。行列は途中休憩をはさみながら氏子地区を順次回った後、午後二時五十分頃に清水寺山門前の階段に到着する。その後、記念撮影があり、午後三時に地主神社へ到着し、午後三時十二分に御霊遷しが行われる。この後、すぐに祭典となり、三時十二分より献饌、祝詞奏上、玉串奉奠と続く。こうして祭典が終了すると、三時二十六分より直会となる。

行列次第

行列次第は、旗一名、太鼓



清水一丁目の剣鉾（藤本愛，平成24.5.5）

三名、雅楽四名、傘一名、宮司、権禰宜、榊、巫女二名、白川女、武者六名、稚児十一名、氏子役員ら十五名の順である。

行列は午後一時に地主神社を出発した後、一時八分に清水一丁目のお飾り場①に到着し、一時十二分頃には、清水二丁目の飾り場②に到着する。ここで、前もって着替えを済ませている稚児および武者と合流する。

行列はその後三年坂を通り北へ向かい、その後東に曲がり、霊山町まで行った後、午後一時二十七分には清水三丁目のお飾り場③に到着する。続いて西へ向かい、清水四丁目、清水五丁目を通過し、一時四十六分に清水四丁目のお飾り場である京都共済組合保養所きよみずの敷地内（建物南側の空き地⑤）で休憩となる。この後、行列は清水通りを通り、さらに北上して再び清水二丁目の飾り場②にて午後二時二十分頃より十分ほど休憩を取る。後は、松原通りを東行して清水寺の山門前の階段に来ると、全員が「ヨーサノ、ヨーサノ、ヨーサノ、ヨー」と言い、手を打つ。一行はここで集合写真を撮り、地主神社へと還幸する。以上の渡御の順路は巡幸図を参照されたい。また、当日は各町による子供神輿の渡御もある。

由緒と歴史

地主神社は非常に古い歴史を持つことで知られているが、剣鉾の歴史については詳らかではない。しかし、剣鉾の錺受（額）裏に「文化三歳」の銘があることから、その時期にまで製作もしくは修理の年代が遡れそうである。

また、神幸祭の祭日の近年の変化としては、もともと五月八日に行なわれていたものが、昭和五十年代後半頃に子供が参加できるようにとの配慮から、祝日の五月五日に日程が変更されたという。加えて、六十年ほど前には祭礼に花傘が出ており、非常に華やかであったという。なお、現在、花傘の布は清水三丁目のお飾り場で、垂れ幕として使用されている。これには「大正十一年」（一九二二）の墨書がある。

② 剣鉾と組織

鉾（清水一丁目）

概要

清水一丁目の鉾は、後述する清水二丁目の鉾と同様、現在は飾り鉾である。この剣鉾は、普段はお飾り場となる交番跡の向かいにある、土産物屋もみじ屋で保管されている。当町の剣鉾は、額に「地主大権現」と陽刻があり、飾部分に菊が透かし彫られている。さらに吹散の意匠も菊および波にうさぎとなっている。鈴は、鉾に直接つけることはせず、鉾頭を飾るための台の上に置かれるのみとなっている。

鉾祭りの次第

剣鉾は五月四日の午前十一時半から十二時にかけて組み立てられる。

そして、翌五日の午前八時頃に清水寺前の交番跡に運ばれ、清水一丁目の住民の手によってお飾り場がしつらえられる。諸道具は、以前は地主神社の倉庫で管理していたが、現在は町内の各家で保管している。この町は全戸で三十二軒であるが、準備にはおおよそ一軒に一人は参加する。

飾り付けでは、祭壇を組んだ後、最上部に「ご神体」と呼ばれる「南無地主大明神」の神号軸を掛ける。これは町内会長が持ち回りで管理する。祭壇には紅白

の餅など種々の神饌が供えられる。そして剣鉾は、祭壇の向かって左側に設置される。また、子供神輿が交番跡建物の屋外に安置される。

その後、午前九時より地主神社宮司と権禰宜により修祓が行われる。修祓の次に玉串奉奠が行われ、祭典は十五分ほどで終了し、その後神酒が参加者にふるまわれる。

神幸祭が始まってからは、留守番の住民が一名お飾り場にいるくらいで、特に何もしない。お飾りは、午後三時半ごろに片付けられる。

鉾差し

鉾は、戦時中に差すのを止めていたようであるが、昭和三十年代にはまだ担ぐ人がいたようである。詳細は不明である。

トウヤ飾り

現在、清水寺山門の西側の、松原通り入口に当たる、交番跡にお飾り場が作られる。ここに作られるようになってから、二十年は経つようである。それ以前は、清水一丁目内でも、さらに西側の別の場所に作られていたようである。

鉾（清水二丁目）

概要

現在は、居祭りで、剣鉾は清水二丁目のお飾り場、土産物屋順正に設置される。当町の剣鉾は、飾り部分が日月に波とうさぎの意匠となっている。錺受（額）には「地主大権現」の陽刻がある。吹散は菊にうさぎのモチーフとなっている。ここでは鈴は見当たらなかった。

鉾祭りの次第

神幸祭前日、四日の午前十時より、お飾り場の横で、鉾の組み立てと飾り付けが行われる。この時参加するのは、清水二丁目の住民であるが、清水一丁目からも応援が出る。若年から老年まで多くの人が参加する。

剣鉾は、祭壇の向かって右側に据えられる。剣鉾の横には鎧五領と子供神輿も飾られ、かなり大規模なお飾り場となっている。

そして、午後一時半になると地主神社へ赴き、神職から神輿のお祓いを受ける。そして、晩には、神輿はお飾り場から清水門前の赤門まで行き、そこで道を引き返し、清水道から産寧坂を少し下がったところを右折して再びお飾り場へ戻る。

翌五日、午前九時二十分頃より飾り場で、住民らが見守るなか、清水一丁目と同じく宮司と禰宜による修祓および玉串奉奠が行われる。

なお、このお飾り場の奥にある五龍閣という建物の二階が、武者と稚児の着替え場所となっており、午前十一時頃より子供らが着替え始める。武者と稚児はここから行列に合流することとなる。

鉾差し

不詳である。

トウヤ飾り

現在、松原通りに面する清水二丁目の土産物屋順正がお飾り場になっている。

（藤本 愛）

清水二丁目の剣鉾（村上忠喜，平成24.5.4）

藤森神社　藤森祭

毎年五月五日
藤森神社
京都市伏見区深草鳥居崎町

① 祭礼と由緒

地域の概要

藤森神社の由緒には諸説あるが、社伝によると、深草郷内にあった真幡寸（まはたき）社・藤尾（ふじのお）社・塚本（つかもと）社の三社を合祀したものとされる。時代による変遷は見られるものの、現在では、本殿中座に主神として素戔嗚尊、東座に舎人親王、西座に早良親王と伊豫親王・井上内親王を祀っている。さらに別雷命・日本武尊・応神天皇・仁徳天皇・神功皇后・武内宿禰・天武天皇が祭神として祀られている。

藤森神社の氏子地域は、北は東福寺のあたりから、南は丹波橋通りの北側にいたる広大な範囲に広がっている。黒田一充は、南は上板橋町から深草大亀谷で御香宮の氏子区域と接し、北は、かつては三十三間堂から智積院のある東瓦町までであったが、現在では塩小路通で新熊野神社や新日吉神社、稲荷神社の氏子区域と接していると記している（『祭祀空間の伝統と機能』）。氏子によると、藤森祭で神役（後述）を担当する、稲荷学区・一橋学区・藤森学区・砂川学区の四学区に相当するが、一部地域では学区と氏子地域は一致していないという。

現在、藤森神社を護持運営する組織として、藤森神社氏子総代会や藤森神社奉賛会があり、藤森祭を実施運営する組織として藤森祭実行委員会が存在している。それ以外にも、神輿三郷連合会・宮本下之郷神輿保存会・深草郷神輿保存会・東福寺郷神輿保存会・駈馬保存会・神役・鳴鳳雅楽会・藤森太鼓保存会・女神輿会といった組織が存在しているという。

祭礼次第

祭礼の準備は例年、四月二十九日に行われる。この日、宮本下之郷・深草郷・東福寺郷の三基の神輿と女神輿が蔵から出され（神輿出し）、拝殿に安置される。また、神役行列の当町に当たった地域は、神社で鎧甲を受け取り、町内に持ち帰ってお飾りを行う。

次いで、五月一日の午前中には神社で御出祭が営まれ、午後一時からは神職がお祓いのために各当町を回る。五月三日には、午後二時から神輿御霊遷、それに引き続いて藤森太鼓奉納、午後六時から当町のお位もらいが行われる。五月四日の午前十時からは宵宮祭と節句祭が営まれる。

神幸祭当日である五月五日は、午前九時に巡幸行列が藤森神社を出発し、神役・鼓笛隊行列と三基の神輿が異なる経路で伏見稲荷大社を目指す。剣鉾が先行する東福寺郷の神輿は、直違橋通りを一直線に北上して伏見稲荷大社へと向かう。伏見稲荷大社の楼門前にある藤尾社の祠前に三基の神輿が集結すると、伏見稲荷大社から供物を受ける。

午前十一時に伏見稲荷大社を出発すると、さらに北上して東福寺に至り、中門前で僧侶らが回向文を読み上げる儀礼が営まれる。平成五年までは泉涌寺の大門前でも同様の儀礼が行われていた。旧御旅所といわれる瀧尾神社まで来ると折り返しとなる。瀧尾神社を出て、東大路泉涌寺の交差点まで来ると、辻廻しが行われ、剣鉾はそこで行列を離れる。

東福寺郷の巡幸行列が師団街道を南下し、墨染通りを東へ進んで、藤森神社に帰着するのは午後六時半を過ぎるころになる。

巡幸行列が氏子地域を巡幸している間、藤森神社の境内では、午後一時と午後三時の二回にわたって、駈馬神事が行われる。

行列次第

巡幸行列は、鼓笛隊を先頭に、神役行列、三基の神輿と女神輿という順番で藤森神社を出発するが、すぐに分かれて各自の経路を進み始める。平成二十三年の祭礼では、神輿は宮本下之郷・女神輿・東福寺郷・深草郷の順に出発していた。

剣鉾は鼓笛隊よりも先に鳥居を出て待機しており、東福寺郷の神輿が出てきたところで、その巡幸行列に加わる。

神役行列には①「朝渡」（早良親王東征の行装）、②「皇馬」（清和天皇勅諚深草祭の行装）、③「七福神」（七福神の行装）、④「拂殿」（神功皇后凱旋纛旗神祀の行装）という四つの行列があり、それぞれに割り当てられた「神役行列当町」がお飾りから行列までの一切を担当する。平成十七年までは御弓御鎧が行われていたが、平成十八年に藤森神社鎮座千八百年を記念して七福神の行列が復活したため、御弓行列は皇馬行列に吸収されている。

由緒と歴史

藤森祭は、貞観五年（八六三）に時の摂政である藤原良房が清和天皇の勅を奉じて行った「貞観深草の祭」を起源とするという。もともと旧暦五月五日に行われていたが、明治以降新暦の六月五日に改められた。昭和二十三年（一九四八）の子どもの日制定にともない、新暦五月五日に行われるようになった。

かつての藤森祭は、「当町組織」によって神幸祭が仕切られていた。例えば昭和三十年代の「当町組織」は次のような構成となっていた（『創祀千八百年　藤森神社』）。

宮本下之郷：藤森・深草・住吉・桃山の各学区内の南部、中組・久宝寺・谷口・桃山・伏見

深草郷：稲荷・深草・砂川・藤森・住吉の各学区の上八丁・中の郷・下町・本郷・加賀屋敷町

東福寺郷：一橋・月輪の各学区内の本町十一丁目から二十二丁目までと稲森

各郷からはその年の「当町」が選出され、祭礼の一切を取り仕切っていたとされる。神役行列の当町に当たると、鎧・馬・人足を初め、必要な資金も調達していた。巡幸経路も当町が決定し、すべてを取り仕切っていたという（『創祀千八百年　藤森神社』）。

現在の藤森祭は、藤森祭実行委員会がその一切を取り仕切っている。藤森祭実行委員会が資金を集め、道具類は神社が調

瀧尾神社の剣鉾（今中崇文，平成24.5.5）

達することになっている。一方で当町の制度は現存しており、学区ごとに三つから七つに分かれた組が、順番に当町として役に当たっている。学区ごとに規模が異なるため、一町内が当町に当たるのは六年から十年に一度という。巡幸経路は藤森祭実行委員会が決定している（『創祀千八百年藤森神社』）。

藤森神社は、かつて稲荷山の麓にあり、現在の伏見稲荷大社の楼門前にある藤尾社が旧社地であったと伝えられる。稲荷山の山上にあった伏見稲荷大社が山麓に遷され、藤森神社が現在の社地に遷されたのは、いつのころかは詳らかではない。かつては藤尾社前に三基の神輿が集結した際、神輿を舁いた氏子たちが「土地返せ」と連呼したという。また、競馬が行われたとも伝えられる。

② 剣鉾と組織

概要

藤森祭の巡幸行列に加わっている剣鉾は、瀧尾神社の護持するものである。瀧尾神社は、藤森神社の氏子地域である一橋学区に位置していることから、瀧尾神社（佐々木信美宮司）の奉仕として、東福寺郷の巡幸行列の先頭を行くこととなった。剣鉾が行列に加わるようになったのは、平成十五～六年ごろのこととされる。

鉾祭りの次第

神輿出しが行われる四月二十九日に、鉾差しである藤田修氏（藤田造園）の手によって鉾頭と飾りが組み立てられる。組立は午後一時半ごろより始められ、半時間ほどで終了する。完成した剣鉾は、「瀧尾神社剣鉾」と染め抜かれた旗とともに、拝殿に安置された東福寺郷の神輿前に置かれ、巡幸当日までそのまま飾られる。

巡幸では、電線の間隔が広いところを選んで、剣鉾を差している。伏見稲荷大社の表参道や東福寺中門、東大路泉涌寺交差点の辻廻しでの鉾差しは大きな目玉となっている。東大路泉涌寺での辻廻し後、神輿行列は藤森神社を目指して南下していくが、剣鉾は行列を離れて瀧尾神社へと戻り解体される。

鉾差し

藤森祭の剣鉾は、瀧尾神社の祭礼と同じく、藤田造園の方々が差して巡幸行列に加わっている。当初は藤田修氏も鉾差しとして加わっていたが、近年は後進にその役目を譲り、後見役に回っている。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

黒田一充『祭祀空間の伝統と機能』（清文堂、二〇〇四年）
創祀千八百年 藤森神社 編集部編『創祀千八百年 藤森神社』（藤森神社、二〇〇七年）

（今中 崇文）

須賀神社 **例祭**

毎年五月第二日曜日
須賀神社
京都市左京区聖護院円頓美町

① 祭礼と由緒

地域の概要

須賀神社を氏神とするのは旧聖護院村であり、現在の町名にも「聖護院」の名称を冠する地域である。聖護院という名は、本山修験宗総本山聖護院（聖護院中町）に由来する。地区の北東部は、聖護院、須賀神社を含む古い戸建ての住宅街、西部に京都大学医学部、南部に夷川発電所を含む旧工場地区が広がる。

須賀神社も移転を繰り返しているが、同時に旧聖護院村は、近代以降の疏水開削や博覧会場地としての整備、京都大学の進出等により、ずいぶん地域的な変容を受けたところである。

氏子圏では五つの鉾が確認されている。このうち、菖蒲鉾、葵鉾、橘鉾が現在も例祭で差されており、菊鉾、剣鉾は祭りには出ていない。ちなみに、この三本の鉾宿は、本家西尾八ツ橋株式会社、株式会社聖護院八ツ橋総本店、株式会社八ツ橋屋西尾為忠商店（元祖八ツ橋）が務めている。

祭礼次第

例祭の一週間ほど前に、菖蒲鉾、葵鉾、橘鉾の鉾宿では祭壇が組まれ、鉾頭が飾られる。

鉾宿では宵宮としての行事は行われない。子供神輿については、各町内の御旅所に役員が集まり、宵宮を行う。

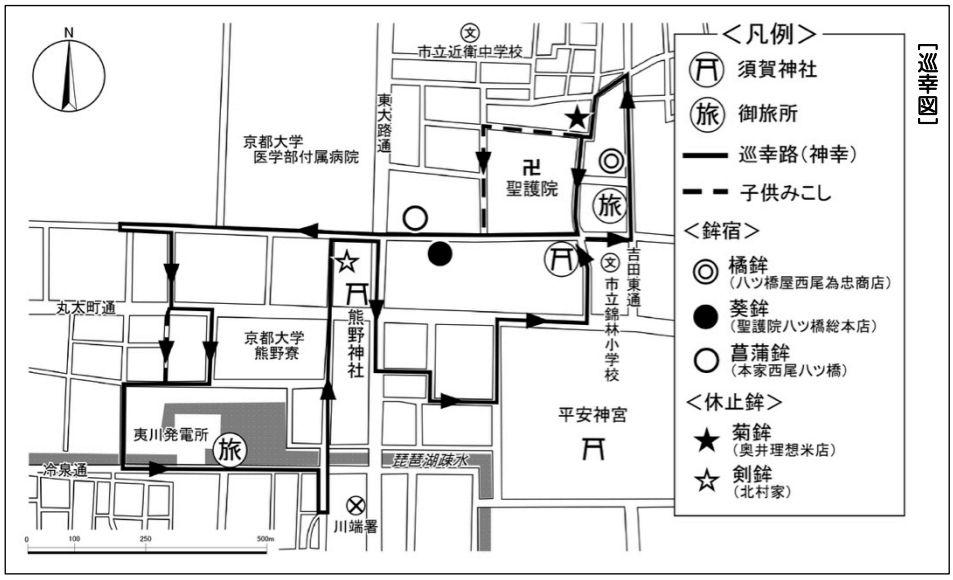
午前九時を過ぎると、行列に参加する人々が須賀神社に集まり、境内で装束に着替えをする。午前十時前に三軒の鉾宿それぞれに鉾差しが到着する。鉾差しは、鉾宿が保管している棹を出し、祭壇に飾られていた鉾頭を組み付ける。いずれの鉾も巡行時に吹散はつけないが、鉾宿の代表が裃をつけて、巻いた吹散を奉持して歩く。

午前十一時過ぎに鉾差しは鉾宿の一室で着替えをし、昼食を摂る。着用する着物は各鉾宿によって異なり、それぞれの鉾の意匠を取り入れたものである（現在鉾差しをしていない剣鉾、菊鉾も、衣装の管理は鉾宿が行っていた）。わらじは毎年、神社から鉾宿に届けられる。

午後十二時四十五分ごろ、鉾差しは組み立てた鉾を担ぎ、鉾宿を出てそれぞれ八ツ橋屋西尾為忠商店に向かう。店ではお神酒がふるまわれ、三つの鉾はそのまま店の前で待機する。

午後一時前に須賀神社拝殿に神主が入り、一時から神幸祭が始まる。一時半に神事が終了し、神輿を擁した行列がゆっくりと出発し始める。

午後一時四十分、八ツ橋屋西尾為忠商店の店主が盛り塩を持って表に出てくる。鉾差しは各自、自分の足元に塩を振り、行列を待つ。



午後一時五十分、行列が八ツ橋屋西尾為忠商店に到着し、各鉾が行列に合流する。

子供神輿はそのころ、錦林小学校脇の道路に集合している。各町で、午前中に町内を歩いたあと移動してきたのである。東町北部、東町南部のみ錦林小学校には移動せず（須賀神社と八ツ橋屋西尾為忠商店の間に御旅所があるため）、御旅所で神輿が来るのを待っている。子供神輿は全部で十三基が巡幸する。

午後二時十分ごろ、神輿行列のあとに、子供神輿が出発する。町によって子供の人数はまちまちで、神輿を曳く子供以外に笛太鼓を持つ子供がいる町もあれば、神輿を曳く人数に満たず、大人が手を貸す町もある。巡行ルートは一致していない。

巡行の途中、決められた場所で鉾を差し、また休憩を挟みながら行列は進む。聖護院の前では僧侶が祭壇をしつらえて神輿を待っており、午後二時十五分ごろ、神輿は聖護院前で停まり、僧の祈禱を受ける。また、御旅所である夷川発電所の前には祭壇が作られており、午後三時ごろ、神輿に帯同してきた宮司が祝詞を挙げ、玉串を奉る神事が行われる。同じころ、神社の御輿とは別ルートを回っている子供神輿は巡幸を終え、各町内へ戻り始める。

夷川発電所から須賀神社に戻る途中、菖蒲鉾は鉾宿である本家西尾八ツ橋の前で差す。また、葵鉾は鉾宿である聖護院八ツ橋総本店の前で差す。その後午後三時五十分ごろ、三基の鉾が須賀神社の境内前で同時に差す。鉾が差し終わると、神輿の行列は境内に入り、還幸祭が行われる。三つの鉾は境内には入らず、各鉾宿に戻る。

橘鉾は八ツ橋屋西尾為忠商店、菖蒲鉾は本家西尾八ツ橋、葵鉾は聖護院八ツ橋総本店前に戻り、それぞれ鉾宿の前などで鉾を差す。およそ午後四時過ぎに、それぞれの鉾宿で棹を取り外し、鉾頭のみを店内の祭壇に再び飾り、棹は片付ける。

聖護院の僧侶により祈祷をうける神輿（福持昌之，平成 24.5.13）

その後、鉾差しは、それぞれの鉾宿で着替え（かつては鉾宿で入浴したり、銭湯へ案内されたりしていた）、鉾差しと鉾宿関係者による直会がある。現在は、三つの鉾宿が合同で近隣の飲食店で催している。

なお、神輿の巡幸中、鉾宿である各八ツ橋店では、それぞれ行列の接待（お茶出し）などを行う。

巡行が終わり須賀神社に到着した剣鉾（左から橘鉾、葵鉾、菖蒲鉾）（鈴木耕太郎，平成 23.5.8）

行列次第

須賀神社の境内から、行列は基本的に以下のような順序で出発する。

太鼓―錫杖二名―榊―猿田彦―社旗―菖蒲鉾―葵鉾―橘鉾―稚児三名―弓矢、剣持ち三名―楽人（笙、篳篥、龍笛）―氏子二名―楽太鼓―矛四名―弓矢二名―翳二つ―水干二名―神輿―唐櫃―傘―水干二名―神職―傘差し一名―町名の旗四基。

獅子は基本的には最後尾につくが、比較的自由な動きで行列の中を行き来する。

神輿は前に一名、左側に三名、右側に二名、後ろに二名の、計八名で曳いている。楽人や氏子などの要職以外は、ほとんどが学生のアルバイトによって構成されている。

子供神輿は、平成二十四年（二〇一二）には、河原町西部―山王町南部―西町―河原町東部―中町―蓮華蔵町南東部―山王町北部―円頓美町―蓮華蔵町北部―蓮華蔵町南西部―東町南部―東町北部―東寺領町の順で巡行した。

由緒と歴史

須賀神社の祭礼については、江戸期から地誌などで何度か触れられている。

『日次紀事』（一六七六）には、六月十五日の項に、「吉田西天王神事」として記載されている。この神事には「神輿一基有鉾五本」が出され、「是称角豆祭」とされていたようだ。神輿は吉田村の西門から出て、かつて「官位記」と呼ばれた旅所が置かれた聖護院の東北にしばらく留まり、聖護院の東側を巡ってまた吉田村の西門に戻ったという。

一般に、現在の岡崎神社を東天王社、須賀神社を西天王社という。西天王社という名称については、『山州名跡志』（一七一一）に説明がある。これによると須賀神社は「西天王社」と呼ばれ、吉田の観音堂の東にあると記載されている。例祭は六月十六日、神輿一基と、本数は不明ながら鉾が出たという。

その二年後に刊行された『滑稽雑談』（一七一三）には、「山城名跡志」から、西天王社の六月十五日の例祭には「神輿一基并に矛六本あり」という記事を引用している。例祭は吉田村と聖護院村の村人によって行われ、聖護院門主の前で儀礼を行うという。

『拾遺都名所図会』（一七八七）では、吉田の神楽岡付近の項目の中に「西天王社」として記載されている。「本社」のふもとにあり、例祭は六月十六日で、神輿一基が出るという。

大正初期にまとめられた『京都坊目誌』（一九一五）でも、須賀神社はやはり、吉田神社の南側、神楽岡に鎮座しているとある。創建は不明だが、かつては岡崎の歓喜光院の鎮守で西天王と呼ばれていたという。元弘年間（一三三一-一三三三）、あるいは延元元年（一三三六）に吉田山に移転し、応仁の乱ののち、神楽岡にさらに移ったらしい。毎年六月十五日に角豆祭という祭りを行い、神輿一基と鉾数本が出るとある。

須賀神社が吉田から現在の場所に移ったのは、大正十三年（一九二四）のことである。

その他

須賀神社自体が数回移転しているせいか、鉾に関する直接の文字資料はほとんどない。前述のように、十七世紀後半には、五本の鉾がすでに出ていたと見られる。近世後半には、たびたび文献に名前を見ることができる。また、剣鉾の箱裏書きから、江戸期に鉾仲間があったことは確実である。葵鉾を管理する聖護院八ツ橋総本店によると、戦後にはすでに本店一軒で持つことになっていたというが、明治期から戦前にかけての動きはよくわかっていない。

ただ、八ツ橋店の相続・独立等で、現在の三店に分かれて所有されていったものかもしれず、後述の菊鉾、剣鉾も含めて、近代、特に昭和に入ってからの鉾の所有・管理の変遷は不明確である。

なお、須賀神社の鉾五本は、どれも長い棹のみであることから、自動車等に載せて回ったことはなく、祭りの際には鉾差しによって差されていたものと推察される。

② 剣鉾と組織

須賀神社の五本の鉾のうち、平成二十四年現在、巡行に出ている菖蒲鉾、葵鉾、橘鉾の三本が、それぞれ別の八ツ橋屋で護持されている。

一方、休み鉾が二本あり、八ツ橋屋との関係はない。八ツ橋屋に保有されてきた鉾とは異なる経緯を持っている。

菖蒲鉾

概要

菖蒲鉾は、本家西尾八ツ橋株式会社が護持しており、本店（聖護院西町）の店舗が鉾宿となる。かつて鉾仲間や町で護持していたかどうかは不明である。

菖蒲鉾錺受（額）には「西天王」の文字が刻まれている。菖蒲鉾の箱裏には、嘉永三年（一八五〇）、嘉永五年（一八五二）、嘉永九年（一八五六）、安政二年（一八五五）、明治三十六年（一九〇三）などの年号が見える。

トウヤ飾り・鉾祭り

祭りの一週間ほど前になると、本店の店舗内に神号軸が掛けられ、その前に鉾が飾られる。鉾を飾るのは、元社員の村岸清次氏で、昭和二十年代前半に入社して以来、当時の社長（十三代西尾為治）とともに菖蒲鉾の鉾宿としての準備万端を担ってきた。退職後も本家西尾八ツ橋および西尾家の祭事係としてこの任にあたっている。

鉾差し

藤田修氏（藤田造園）に鉾差しを依頼し、当日は藤田修氏、藤田隆平氏ら三名によって鉾の巡行が行われる。

その他

本家西尾八ツ橋株式会社は、八ツ橋創業の家と称する老舗である。熊野神社には、聖護院村八ツ橋屋為治郎が文政七年一月に奉納した絵馬が残されているほか、中興の祖といわれる十二代目西尾為治（一八七九-一九六二）の銅像が立つ。

巡行が終わった後に、鉾差しの汗を流してもらう入浴の習慣は、かつては京都のあちこちでみられた。現在は廃れつつあるが、菖蒲鉾の鉾宿では、簡略化されつつも社長宅の風呂場が提供されている。

菖蒲鉾（本家西尾八ツ橋護持）のお飾りの様子
（福持昌之，平成 24.5.13）

葵鉾

概要

葵鉾は、株式会社聖護院八ツ橋総本店が護持しており、本店（聖護院山王町）の店舗が鉾宿となる。

葵鉾の錺受（額）には「天得矛」の文字がある。葵鉾の箱裏書きは、天保十四年（一八四三）に書かれており、ここには「葵鉾仲間」とその構成員十名（山嶋唯七郎、村上権兵衛、藤村藤兵衛、中嶋吉兵衛、岡田文七、石田源兵衛、北村喜兵衛、岸田幸助、岡田弥助、村上治良三郎）の墨書があり、この鉾がかつて仲間で護持されていたことがわかる。また、剣の箱に「聖護院村／葵仲間」とあること、当屋飾りに供される高坏の箱に文化十三年（一八一六）の年記と「葵鉾仲間」の墨書があることから、葵鉾仲間は聖護院村に所在したこと、文化年間には成立していたことがわかる。

トウヤ飾り・鉾祭り

祭りの一週間ほど前になると、本店の店舗内に神号軸が掛けられ、その前に鉾

葵鉾（聖護院八ツ橋総本店護持）のお飾りの様子
（福持昌之，平成 24.5.13）

が飾られる。鉾を飾るのは、重役の両角氏の指導のもと、本社総務課の担当職員があたる。両角氏は、戦前から聖護院八ツ橋総本店に勤務しており、戦後長い間、鉾宿の準備を担当してきた。近年は、三鉾合同の直会の手配もしている。

鉾差し

藤田修氏（藤田造園）に鉾差しを依頼し、当日は藤田圭亮氏ら三名によって鉾の巡行が行われる。

その他

聖護院八ツ橋総本店は、八ツ橋の発祥の地で商売を続けてきた老舗で、大正十五年五月に個人商店から株式会社となった。

なお、京都の土産物としての八ツ橋は明治期より発展し、大正末期に京都八ツ橋製造組合（現、京都八ツ橋商工業組合）が発足し、現在、十六の業者が加盟している。

橘鉾

概要

橘鉾は、八ツ橋屋西尾為忠商店が護持しており、本店（聖護院東町）の店舗が鉾宿となる。ただし、本店は現在、製造のみを分担し、販売用の店舗は別に構えている。

橘鉾の錺受（額）は片面が日（「○」）、もう片面が三日月形（「☽」）の意匠で、日月を意味するものと思われる。箱裏書きは嘉永三年（一八五〇）、鈴には文政二年（一八一九）と刻まれている。

吹散の箱に「釼鉾仲間」とある。飾りの箱には嘉永三年（一八五〇）の年記と仲間の構成員と思われる八名（伊田三郎兵衛、西村次郎助、廣瀬又兵衛、西田藤七、伊田安兵衛、西村次兵衛、瀧原将監、山田元輔）の墨書がある。西尾家は近世には西村を名乗っていたと伝えられており、西村次郎助もしくは西村次兵衛がその一統であった可能性も考えられる。

トウヤ飾り・鉾祭り

祭りの一週間ほど前になると、本店の店舗内に神号軸が掛けられ、その前に鉾が飾られる。鉾を飾るのは、当主の家族と工場の職人が担当する。

鉾差し

渡辺修三氏（一乗寺八大神社剣鉾奉賛会）に鉾差しを依頼し、当日は渡辺義彦氏ら三名によって、鉾の巡行が行われる。

その他

先代の西尾為忠氏は、本家西尾八ツ橋の西尾為治氏（十三代）の弟で、西尾為治氏がシベリアに抑留されていたため、終戦後は西尾為忠氏が本家西尾八ツ橋を預かっていたこともあったが、後に独立した。橘鉾は、本家から分与されたと伝えられる。

剣鉾

北村氏（聖護院山王町）が保管する剣鉾は、先代善一郎氏が死去した平成十一年（一

橘鉾（八ツ橋屋西尾為忠商店護持）のお飾りの様子
（福持昌之，平成 24.5.13）

九九九）以降、祭礼に参加していない。善一郎氏の生前は、京都大学医学部向かいの、聖護院八ツ橋総本店の本社の隣に建っていた北村氏所有の一軒家（聖護院川原町）を鉾宿とし、飾り付けや鉾差しの対応などは全てこの場所で行っていた。鉾差しは藤田造園から三名が派遣されてきていたという。現在一軒家は集合住宅に建て替えされ、鉾は熊野神社西に建つ北村氏の蔵に納められている。現在、棹と吹散の所在は不明である。

左三つ巴が刻まれている錺受（額）に、十本の剣形の錺が放射状に取り付けられている形状である。剣形の錺の根本には雲型の透かし彫りの錺がそれぞれついており、華やかで勇壮な印象を与える。箱の裏書は、明治二十六年のものが見られ、錺に刻まれている年号は昭和十一年である。これらは須賀神社の鉾の中では比較的新しい。

剣鉾（北村家護持）の一部（村上忠喜，平成 24.10.21）

菊鉾

菊鉾は、奥井理想米店（聖護院中町）が保管している。平成二十一、二年ごろから、当主の体調が思わしくなく、春季大祭に鉾を出せずにいる。棹、鉾、吹散、鉾差しの半被などはそのまま保管されている。飾り付けは店舗脇の倉庫の前で行い、店舗の二階で鉾差しの着替えや昼食を摂るなどしていた。藤田造園からは三人が来ていたという。

奥井理想米店が鉾を預かるようになったのは昭和四十六年からである。聖護院に隣接する宿泊施設である聖護院御殿荘で、住み込みで警備の仕事をしていた水口氏が、剣と菊の二本の鉾を護持していたが、水口氏の死去に伴い、北村善一郎氏がこれを引き受けた。そのうちの一本を、さらに奥井理想米店の奥井氏が預かることとなった。北村氏も奥井氏も、水口氏がどういう経緯で鉾を護持していたのかはわからないという。ただいずれも、町で護持してきたという経緯は伝わっておらず、水口氏個人の所有として認識されてきたらしい。

菊鉾（奥井家護持）のお飾りの様子
（奥井理想米店写真提供，平成 13.5.9）

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

聖護院学区社会福祉協議会『聖護院だより』四十八-五十一（二〇一〇年-二〇一一年）

（工藤　紗貴子）

新日吉神宮　小五月会

毎年五月第二日曜日
新日吉神宮
京都市東山区妙法院前側町

①　祭礼と由緒

地域の概要

新日吉神宮は阿弥陀ヶ峰山麓に鎮座し、そこから北・西側にかけて、鴨川を挟み東山区と下京区にまたがるおよそ百か町の広大な氏子地域をもっている。氏子地区は元学区ごとに四区分され、それぞれ修道組、貞教組、菊浜組、崇仁組と称する。各組の町数は、修道地区に二十六か町、貞教地区に二十五か町、菊浜地区に二十六か町、崇仁地区に二十か町（『新日吉神宮氏子地沿革と古式祭』八～四十二ページによる。以下、本書は『沿革』と略記）。氏子数は最盛期には約六千戸を数え、現在は二千戸ほどである。

貞教組は、東と西とに分かれており、伏見稲荷大社と新日吉神宮の氏子が混在している地域である。菊浜組でも、ほとんどは新日吉神宮の氏子であるが、一部は伏見稲荷大社の氏子の町もあって入り組んでいる。

剣鉾は、単独で保管する町が貞教地区に一か町（日吉町）、菊浜地区に五か町（上二之宮町・下二之宮町・八王子町・稲荷町・大宮町）ある。もう一本は五か町で共同管理されていたが（聖護子町・岩滝町・早尾町・波止土濃町・八っ柳町）、これもすべて菊浜地区に属している。このように鉾町の分布は均一ではなく、地理的にみると鴨川右岸沿いの狭い範囲に集中している。

小五月会の神幸祭では、氏子地域の各町が輪番で「当町（とうちょう）」を務め、祭礼の運営にあたっている。現在、「当町」は修道組と貞教組が交替で務めており、平成二十三年（二〇一一）は貞教組、平成二十四年（二〇一二）は修道組が担当した。この順は交互ではなく、両学区の戸数に応じてやや複雑に決められている。修道→修道→貞教の順で、修道が二年で貞教が一年というのが基本であるが、例外もある。当町の編成には近世中期から変遷がある（後述）。なお各組からは組総代一名が出される。

平成二十三年の祭礼当町は貞教組の中の茶屋町・上塗師屋町・南塗師屋町・西之門町・大和大路一丁目・大和大路二丁目の六町。平成二十四年の当町は、修道組の中の東常磐町・西常磐町・庵町・芳野町・石垣町の五町である。平成二十四年の場合、三月ぐらいに話し合いをもち、「幸御鉾」を担当する町、「大榊」を担当する町、「稚児」を担当する町、その他の割り当てをくじで決めた。「幸御鉾」「大榊」にあたった町は、神幸中に行列が立ち寄る祭壇の設置も担当する。この他、当町は警察との折衝、巡行説明会、地元民との交渉などを担当する。

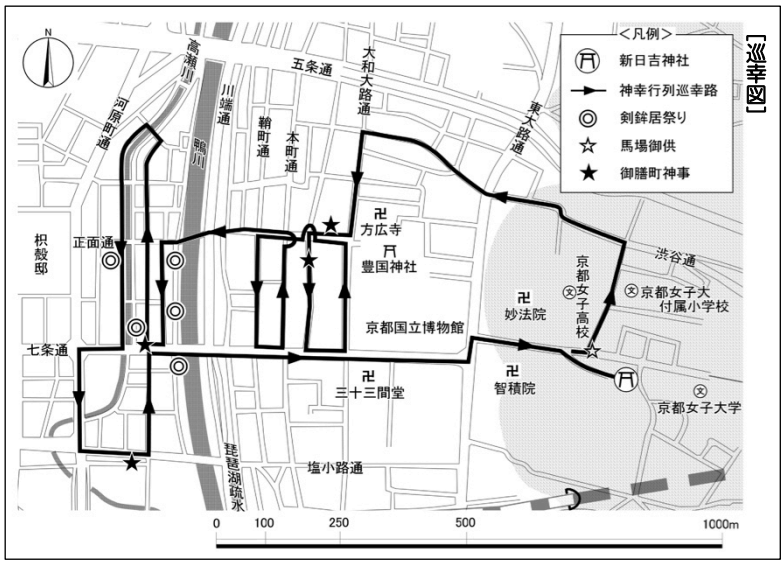
祭礼次第

祭礼の準備は、前日の午前九時半頃から新日吉神宮境内で行われる。道具類の蔵出し、神輿・大榊の飾りつけ、清掃などである。平成二十二年より巡幸で剣鉾を差す（ここでは振ると呼ばれる）ようになり、剣鉾の仮組みも前日に行われるようになった。準備には各組の関係者多数が参加しているが、剣鉾の組み立ては当番町である貞教組の男性六名（平成二十三年の場合）が担当した。

鉾差しに使用する剣鉾は、もともと日吉町保管の第六番鉾（十禅師御鉾）であるが、組み立て作業は日吉町だけでなく、その年の当番町全体の人々があたる。ただし前日の準備では日吉町の鉾は完全には組み立てず、最終的には小五月会当日の朝、「剣鉾会」のメンバーが行う。当番町の男性たちは、小学校のころ差しているのを見た程度で、微妙なぐらつきなどは差す人間でないとわからないという。

剣鉾が組み上がると、すぐに清祓が新日吉神宮本殿前で執り行われる。神事中の剣鉾は、棹を付けず鉾頭を台の上に乗せた状態で、本殿下に安置されている。神事は、祓詞→修祓（鉾→参列者の順）→祝詞→玉串奉奠（氏子総代）→鉾頭を台から外して脇に下ろす→神事再開、修祓（本殿→参列者）→祝詞の順で行われる。神事終了後は、鳳輦・大榊・獅子などとともに拝殿に安置される。

神幸祭の前日の午後一時頃から、神職二名が各町を巡回する。巡回先は、鉾の居



馬場御供（中尾芙美子，平成23.5.8）

祭りの飾りつけをしている町、および翌日の巡幸行列が立ち寄る祭壇の飾りつけをしている町である。平成二十四年（二〇一二）の場合、神職一名は稲荷町→下二ノ宮町→下三ノ宮町→崇仁組の順、もう一名は大宮町→上二ノ宮町→鍵山町・十禅寺町→八王子町・新日吉町の順で巡回した。各町での神事は通常の祭式にのっとり、祓詞→修祓（祭壇方向→神饌→参列者の順）→祝詞→玉串奉奠（神職→参列者）の順で行われる。

小五月会の当日は、まず午前九時半頃より、「剣鉾会」の三名の手で、境内で剣鉾が最終的に組み立てられる（後述）。これに並行して、稚児大将・稚児武者大将の社参がある。稚児四名が集合したあと、本殿内で、祓詞→修祓（玉串→稚児→参列者の順）→祝詞奏上→玉串奉奠（稚児四人）→撤饌の順で神事が行なわれ、稚児に御守が授与される。平成二十四年の稚児は石垣町一名・東常磐町一名・西常磐町一名・芳野町一名で、その他の稚児二十六人とあわせて合計三十名が修道学区から出された。

境内では、剣鉾の組み立てのあと昼休憩を挟み、正午から神幸出立祭が拝殿前で執り行われる。神事は、参会者・神職らの整列のあと、祓詞→修祓（拝殿正面→神饌→神職→楽隊→参列者全体の順）→献饌→祝詞→玉串奉奠（神職）→山王総本宮による桂の奉納→氏子総代による献酒札の奉納→撤饌の順で進められ、三十分ほどを要する。この間、剣鉾は拝殿前の所定の位置に立てられ、「剣鉾会」の三人が支えている。

神幸出立祭が終わるとすぐに神幸行列が出発するが、ほどなくして馬場御供とよばれる神事が僧侶を交えて執り行われる。妙法院は後白河法皇の開基になる門跡寺院で、代々新日吉別当に任じられてきたことから、神仏分離を経た今日でも馬場御供の儀には門跡が参列し、御法楽を修する習いになっている。地点は新日吉神宮参道入口の路上で（地図☆印）、まず妙法院より僧三人が到着したところに、出立祭を終えた祭主が加わる。神饌など儀式に必要なものが入った唐櫃を神職が神社から運び、鳳輦が神事地点に着いたところで開始となる。神事は、献饌（鳳輦の前の八足に）、祭主祝詞奏上、焼香、妙法院門跡様御法楽、撤饌の順で行われる。この間、神幸行列は路上で待機し、馬場御供の終了と同時に出発する。

氏子区域を巡幸する際、その年の当町に立ち寄って神事が行われる。各当町では祭壇をしつらえ、前日に神職のお祓いを受けている（先述）。平成二十四年は、西常磐町御膳町神事、芳野町御膳町神事、下三之宮町御膳町神事、崇仁組受け所神事（塩小路通沿いうるおい館）の四か所で実施された（地図★印）。地点は毎年固定しているものもある。神事は、宮司が到着し、鳳輦を祭壇前の所定の位置に止めたあと、献饌（各町の関係者による）→祓詞→修祓（鳳輦→玉串→町の人の順）→祝詞奏上→玉串奉奠（祭主→関係者の順）→撤饌の順で行われる。神事が済み次第、飾りはすぐに片づける。

午後五時頃、御鳳輦が神社へ還御してくる。境内で火をまたぎ、拝殿裏へ回る。ご神体を人目に触れないようにするための傘に下がりをつけた錦蓋を鳳輦に接して安置すると、宮司が錦蓋の中に体を入れて神体を取る。神職が大きなけいひつの声をあげ、それに先導されて宮司が錦蓋に体を隠した状態のまま、本殿まで敷かれた布の上を歩いていく。宮司は本殿に上がり、神体を安置する。つぎに本殿内で神事が行われる。宮司による神事の説明のあと、祓詞→修祓→献饌→祝詞奏上→玉串奉奠（神職、稚児大将、氏子総代ら）の順で進められ、最後に神職が本殿前から人名の札の付いた三方を持って下り、それぞれの子供に渡したところで終了となる。

行列次第

平成二十三年の祭礼行列は以下の順で構成された。

先振れ（先駆―剣鉾―組総代―先太鼓）―先頭列（祭礼幟―組総代―神宮簾―神宮高張―大麻―大麻付朱笠）―獅子列―菊浜列（猿田彦神輿―神饌唐櫃―菊浜組総代）―崇仁列（崇仁組簾―崇仁組高張―崇仁組竹引―崇仁組総代）―幸御鉾列（貞教組簾―貞教組高張―幸御鉾―町代表）―大榊列（竹引―大榊―町代表）―大太鼓列（大太鼓―町代表）―武者稚児列（婦人―稚児・保護者）―大将列（武者大将・保護者）―御神宝列（神宝盾―盾付朱傘―手鉾―神宝弓―弓付朱傘―神宝矢―矢付朱傘―神宝剣―剣付朱傘）―楽列（壱鼓―荷太鼓―楽人）―鳳輦前列（紫翳―随身―綱）―鳳輦列―鳳輦後列（綱―随身―菅翳）―錦蓋菅蓋列（錦蓋―鸞鳥―菅蓋）―宮司―役員列―伴走車（平成二十三年五月八日付「平成二十三年度新日吉神宮神幸祭行列書」による）

剣鉾の神幸列への参加は、昭和三十年代までに順次中止され、各町の居祭りとなっていたが、平成二十二年より一基の剣鉾差しが復活している。

由緒と歴史

永暦元年（一一六〇）十月十六日、後白河法皇の院御所、法住寺殿の鎮守として、近江国日吉社（現大津市）から勧請された（『百練抄』など）。社地は現在より南方の今熊野瓦坂にあったと推定されているが、明暦元年（一六五五）までには智積院の北に移り、現在地に社地が確定したのは明治三十年代である（『京都市の地名』、『新日吉神宮略史』（以下、本書は『略史』と略記）による）。

小五月会は、勧請後まもない十二世紀の日記類に五月九日の祭りとして記事がみえ、競馬・流鏑馬や種々の芸能が催されている。近世には四月三十日→五月九日（明和五年～）→五月十四日（天明元年～）と変遷し、その後も維持されてきたが、昭和三十八年に神幸祭の日程変更に関する氏子のアンケートをもとに協議の結果、五月第二日曜日に変更となった（『沿革』五十八～六十九ページ）。

小五月会における当町の制度には次のような変遷がある。寛保三年（一七四三）、神輿一基が四十五か町へ永代預けられ（寛保三年四月「新日吉御神輿当町預り請書」『略史』九十四～九十七ページ）、翌延享元年には、数か町を一グループとして十年周期で順番が定められ、この順で御輿当町を務めることになった（延享元年四月晦日「毎年当町番之定」『略史』九十七～百ページ）。明和元年（一七六四）からは各グループが造物（つくりもの）当町も務めることとされ、年々趣向が凝らされたが、明治三年（一八七〇）、経費の関係で造り物は中止された（『略史』百一～百三十ページ）。

さらに明治七年（一八七四）に神事見習当町の順番を定め、一か町ごとに当町にあたることとして、二十七か町の順が定められた（『略史』百三十一～百三十二ページ）。これは見習当町として幸御鉾を捧持して供奉し、その翌年に神事当町として大榊を中心に大太鼓・武者稚児・奴などの行列を立てて供奉するという方式であったという（『略史』百三十二ページ）。この一か町当町制は昭和二十三年（一九四八）まで続けられたが、昭和二十四年からは五か年輪番制となり、修道と貞教の両当町組を五班に分け、修道三回、貞教二回の五年一サイクルによる運営となった。その後、修道と貞教の交替サイクルはその都度見直しが行なわれ、現在に至っている（『略史』百三十二～百三十三ページ）。

② 剣鉾と組織

新日吉神宮小五月会では、近世以来、第一番鉾から第七番鉾まで七基の剣鉾が各町で管理され、祭礼に供奉してきた。もとはすべて差し鉾で、近世中期にはこの七基が祭礼前に「くじ取」で順番を決めていたことが知られている（福原敏男「近世新日吉社剣鉾祭り」二十八ページ）。

現存する鉾の歴史について、『略史』には「毎年五月、新日吉小五月会、神幸祭礼を斎行するに当り、畏くも禁中より女房奉書を下され執り行われる例であるが、今度新日吉七柱の大神に、夫々威儀のものとして、寛政四年より十一年に至る間に禁裡御所を始め、仙洞、女院及び、中宮の各御所より七本の振鉾、並びに吹散が御寄進せられ、特に日吉社の社名を町名に戴く、菊浜学区の産土町に保管せしめられ、年々の神幸列に供奉するよう、仰せ下された」（二十二ページ）とある。寄進年と寄進者をまとめると以下のとおりである（『略史』二十～二十三ページ）。

第一番鉾（大宮御鉾）　獅子牡丹紋、大宮町保管、寛政四年五月禁裡御所・女院御所御寄附
第二番鉾（二宮御鉾）　立葵紋、下二之宮町保管、寛政六年五月中宮御所御寄附
第三番鉾（聖真子御鉾）　菊橘紋、上二之宮町保管、寛政八年五月仙洞御所御寄付
第四番鉾（八王子御鉾）　菊紋、八王子町保管、寛政九年五月禁裡御所御寄付
第五番鉾（客人御鉾）　竜三本杉紋、稲荷町保管、寛政十年五月中宮御所御寄付
第六番鉾（十禅師御鉾）　牡丹輪宝、日吉町、寛政十一年五月禁裡御所御寄付
第七番鉾（三宮御鉾）　菊桐鳳凰紋、五か町（聖真子町・岩滝町・早尾町・波止土濃町・八ツ柳町）保管、寛政十一年五月、禁裡御所外御所々々御寄付

このように現在の新日吉神宮小五月会の七本の剣鉾は、いずれも寛政年間に相次いで寄進されたもので、同年にはそれぞれ吹散も寄進された記録がある。小五月会の祭礼は、これに先立つ天明年間以来、女房奉書を賜って執行する習いとなっていたことが剣鉾寄進の背景にあるものと考えられている（福原敏男「近世新日吉社剣鉾祭り」二十九ページ）。後述する箱書等からみても、剣鉾が一貫して「御所寄附」という朝廷権威を体現するものとみられていたことは想像に難くない。

このほか八王子御鉾では、寛政八年四月、剣鉾の作り替えに合わせて錺受（額）に彫り込む銘の染筆を妙法院一品真仁親王より賜っており、現在の鉾の錺受にも「新日吉大権現」（表）、「寛政八辰年四月廿七壬寅日／一品親王書」（裏）の銘がみえる。同様に文化四年三月には、大宮町が閑院一品弾正尹宮美仁親王から、やはり鉾の額の神号の御染筆を賜った記録がある（以上、寛政八年五月「御鉾御額御染筆之一件」新日吉神宮文書）。

これらの鉾の中で、平成二十二年より差し鉾として出されているのは第六番鉾（十禅師御鉾）の一本である。新日吉神宮の鉾差しは約五十年間中断していたが、平成二十二年以後は、平成二十三年、二十四年にも継続されている。

このほか第四番鉾（八王子御鉾）は居祭りと町内の曳き鉾巡行に供されているが、第一番鉾（大宮御鉾）・第二番鉾（二宮御鉾）・第五番鉾（客人御鉾）は各町の居祭りのみである。第三番鉾（聖真子御鉾）は紛失して久しく、第七番鉾（三宮御鉾）は管理・祭祀とも途絶している。

鉾を差すのは「剣鉾会」のメンバー三名によって行われる。「剣鉾会」とは、外部から来る鉾差しの集団を指す地元の呼称であり、実際にはそのような組織は存在していない。鉾差しの手配は毎年、東山系の鉾差しを束ねている人物の一人である藤田造園の藤田修氏に依頼し、その差配で一乗寺剣鉾保存会の大西邦夫氏らが派遣されている。

当日の朝、「剣鉾会」のメンバーは最終的な組み立てを行い、出立祭から神事に参加する。鉾の組み立てに使用する剣挟の竹など、一部の材料はメンバーが持参する。衣装は新日吉神宮には備えられていないので、粟田神社のものを使用する。鉾は、馬場御供の催行時から還御後の拝殿裏まで適宜繰り返し差され、平成二十三年には計三十九回、鉾が差されている。ただし巡幸中、居祭りをしている剣鉾については、そこに行列が立ち寄るといったことはない。

これらの鉾町で、もともと鉾を差していた時期は一定していないが、大宮町（第一番鉾・大宮御鉾）の場合、昭和三十六～三十七年頃、一乗寺の人に差してくれるよう頼みに行ったのが最後である。下二之宮町（第二番鉾・二宮御鉾）では、戦前までは、祭礼当日に鉾をたずさえて巡幸に加わっていた。町の者が裃を着てお供としてつき、吹散の箱も持って行った。稲荷町（第五番鉾・客人御鉾）でも、昭和二十七～二十八年頃までは行列の時に鉾を差していたという。

第一番鉾（大宮御鉾）（大宮町）

概要

現在は居祭りのみ。『沿革』によると、「新日吉祭礼には、寛政四年五月、禁裡御所及び女院御所より御寄附の振鉾「第一番鉾」、大宮御鉾（獅子、牡丹）や、見送り籏を町内に保管せるを、毎年祭礼の際、第一番鉾として、七本（日吉七柱大神）の鉾の先頭に供奉することになっている」（四十ページ）とある。

飾られた剣には「昭和三十一年申年五月吉日新調」、倉庫に保管されていた留守鉾の剣の茎には「昭和九戌年拾月吉日新調　大宮町」の銘がみえ、剣を納める箱の裏書には「明治四拾四年五月拾四日調之　大宮町」とある。

大宮町は戸数三十三軒（以前は四十軒）ほどで、全戸が新日吉神宮の氏子である。飾りの道具は、トンネル状の路地口二階にある町内の倉庫で保管され、「ご本体」（小さな神棚状のもの）のみ町内の一軒で預かってお守りしている。普段は水と榊を、一日と十五日には洗い米と盛り塩をお供えする。お飾りをする際には正面の観音開きの扉を開けるが、内部を見たことはないという。吹散のことは「見返り幡」といい、鉾には付けず、毎年屋内に飾る。剣は他にもう一本が倉庫に保管されている。棹の所在は不詳。

鉾祭りの次第

飾りつけは、町内のT氏が長く町会長を務めている関係で、毎年、同家の表座敷と土間を利用している。平成二十三年は、祭りの前々日の午前中、T氏宅にて、鉾の組み立てや神饌の準備が行われた。祭りの飾りの道具を倉庫から出すのは町内の男性で、飾りつけは一時間ほどかけて町内の女性三〜四名が担当した。神饌として、塩、米、水、餅、りんご、バナナ、柑橘類、かまぼこ、なす、きゅうり、人参、大根、キャベツ、するめ、海苔、高野豆腐などを供える。飾りつけは、二十年くらい前までは町内の家で持ち回りしていた。玄関があって人や物の出入りがしやすい家が適しているが、家屋の構造などが変わり、他に飾る場所がなくなっているのが現状である。

第一番鉾（村上忠喜，平成24.5.12）

前日の午後に神職を迎えて前日祭が執り行われる。平成二十三年の前日祭への参加は町会長・組長ら五名ほどである。当日の神幸列と鉾町との関わりは特になく、祭りの行列が通ったら片づける。

第二番鉾（二宮御鉾）（下二之宮町）

概要

現在は居祭りのみ。『沿革』によると、「新日吉社祭礼には、寛政六年五月、中宮御所御寄附の振鉾、第二番鉾即ち二宮御鉾（立葵）及び吹散を捧持して、毎年供奉をして来たが、近年鉾指の不如意の為か、町内にて飾り居祭をしている」（『沿革』三十六〜三十七ページ）とある。

下二之宮町の軒数は二十三軒ほどである。かつて道具類は町内の家々に分散して保管されていたが、マンションへの建て替えなどで古い町家が解体されるにつれ散逸したため、現在は例年町内のH家ですべて預かっている。棹は失われている。

鉾祭りの次第

平成二十三年は、前日の午前中、H家で、町会長・組長三名および有志らにより、鉾の組み立てと神饌の準備が行われた。飾りつけは例年、H家が選ばれている。お供えとして、にんじん、さつまいも、大根、昆布、干しいたけ、するめ、高野豆腐、ポンカン、紅白の餅、バナナ、赤飯、塩、水を準備し、祭礼後は町内で分配する。

前日の午後に神職を迎えて前日祭が執り行われる。終了後に親睦会がもたれる。当日の神幸列と鉾町との関わりは特になく、神幸列が橋本家の前を通り過ぎたらす

第二番鉾（佐藤直幸，平成24.5.13）

第三番鉾（村上忠喜，平成24.5.12）

ぐに片づけを始める。

第三番鉾（聖真子御鉾）（上二之宮町）

概要

剣鉾は明治期に紛失しており、神社の蔵の天井に棹のみ保管されている。現在は鉾なしで祭壇を組み、居祭りをしている。紛失の時期は明治十年代とも、蛤御門の変で焼失かともいう。『沿革』には、「新日吉祭礼には、寛政八年五月、仙洞御所御寄進の振鉾、即ち第三番鉾、聖真子御鉾（菊、橘の紋様）を差しながら供奉していたのであるが、明治の初期紛失せしに依り、今は真榊一対を捧持して、お供している」（三十六ページ）とある。

第四番鉾（八王子御鉾）（八王子町）

概要

曳き鉾として町内のみを巡行する。『沿革』によると、「新日吉祭礼には、寛政九年五月、禁裡御所御寄附の振鉾、第四番鉾なる八王子御鉾（菊）及び見送り旗を奉じて、神幸列に供奉していたが、昭和の中頃、鉾の棹を切りて台鉾となし、今は車を附けて新日吉町と交代にて祭礼にお供している」（三十八ページ）とある。ここで台鉾とあるのは、曳き鉾のことである。

道具を納めた箱の一つに「妙法院一品親王御筆／寛政八丙辰四月廿七日」（蓋裏）、吹散箱に「仙洞御所御寄附」（蓋表）とある。このほか前述のとおり、錺受（額）には「新日吉大権現」（表）、「寛政八辰年四月廿七壬寅日／一品親王書」（裏）とある。御神体の掛軸にも「寛政八辰年四月廿七壬寅日　一品親王書」とある。鉾の台車には「昭和三十五年五月　前川金属謹呈」とある。

鉾の管理や曳き鉾の巡行は、新日吉町と八王子町の二町が共同で行なっている。現在、両町とも戸数三十軒ほどを数える。鉾の台車は町内の一軒のガレージで保管している。箱の保管は、一番から十番までが新日吉町、十一番から十五番までが八王子町である。八王子町では以前は各戸で分担していたが、現在はトンネル状の路地口二階を倉庫としている。ただし剣鉾の保管は交替ではなく、八王子町の側で担当している。

鉾祭りの次第

平成二十四年は、前日の朝七時から、新日吉町のM氏宅で鉾の組み立てや神饌の準備が行われた。作業は八王子町と新日吉町両町が協力し、両町の町会長と組長、そのほか手の空いている人々によって行われる。ほかに屋形（剣鉾をのせる台車のこと）の四隅につける御幣を作る。台車はもと木製、現在は金属製である。

祭りの費用は、八王子町と新日吉町とで折半する。飾りつけは一年交代で、場所は各町ともだいたい決まった家を選んでいる。新日吉町では、改築などで適した家が少なくなり、ここ二十年ほどは敷地の広いM氏宅に落ち着いている。八王子町でも、もとは別の家であったが、平成二十一年からはK家に飾りつけをしている。

祭壇の最上段には「新日吉大権現」と書かれた少祠を祀り、祭壇向かって左側に鉾、右側に菊の紋の入った旗と竿（鈴が付く）を置く。神饌の内容は塩、水、米、りんご、バナナ、にんじん、なす、紅白の餅、昆布、大根、するめ、甘夏などである。

小餅のことをオケソクといい、行事終了後に一軒につき二つずつお下がりとしてもらう。また、以前はこの日、さば寿司や赤飯、竹の子とわかめを炊いたもの、ちらし寿司、巻寿司などを作り、家族で食べたり、親戚に配り歩いたりしたものだという。

前日の午後に神職を迎えて前日祭が執り行われる。平成二十四年の前日祭には、八王子町と新日吉町両町の町会長、組長、および有志の者が参列した。

祭礼当日は、まず午前八時ころ、お飾りをしている場所の前に大人たちが参集する。呼び込みの鉦を鳴らして回り、子供たちも参まってくる。剣鉾を台車に乗せ、十一時ころ巡回に出発する。子どもが引っ張って、西木屋町通りを往復する形で八王子町・新日吉町を回る。もとの地点に戻ったところで子供たちが解散、続いて大人たちも解散する。

当日の神幸列と鉾町との関わりは特になく、居祭りの飾りは午後三時半ころ、行列が七条通りを通過したところで片づけを始める。

第五番鉾（客人御鉾）（稲荷町）

概要

現在は居祭りのみ。『沿革』によると、「新日吉祭礼には、寛政九年、禁裡御所より御寄附の振鉾「第五番鉾」客人御鉾（竜、三本松）並びに吹流しを当町内に預けられしを、捧持して毎年神幸の行列に供奉している」（三十九ページ）とある。

剣の茎に「寛政戊午十歳」の銘がある。箱の一つに「禁裏御所御寄附」（蓋表）、別の箱に「寛政四年／壬子五月吉日／年寄 太兵衛／五人組 庄兵衛」（身・外底）、「龍御鉾」（側面）とある。

稲荷町の氏子は多いときで四十軒余り、現在は二十軒ほどになっている。飾りつけするのは鉾頭だけである。棹は稲荷神社の社務所の軒先に置いてある。鈴は所在不詳。

鉾祭りの次第

平成二十三年は、前々日と前日午前、稲荷神社の社務所で、役員の女性二名によって神饌の準備などが行われた。鉾頭は屋内ではなく、鳥居の柱の脇に安置する。昔は吹散を社務所で飾ったこともあったが、ここしばらく出していない。社務所では、祭壇の最上部にオヤシロを飾り、お供えとして山の幸（バナナ、みかん、大根、なす、にんじん、高野豆腐）、海の幸（するめ、昆布）、ちまき、酒をあげる。尾頭付きの鯛、紅白の餅は、新鮮さを保つため還幸祭の当日に用意する。榊は新日吉神宮より持ってくる。榊の水は境内の手水から汲む。還幸祭が終わるとこれらを氏子で分配する。

前日の午後に神職を迎えて前日祭が執り行われる。当日の神幸列と鉾町との関わりは特になく、神幸列が神社の前を通り過ぎると片づけを始める。

第四番鉾（長谷川奨悟，平成 23.5.8）

第五番鉾（内田みや子，平成 23.5.7）

第六番鉾（渡部圭一，平成23.5.8）

第七番鉾（原晃，平成23.5.7）

第六番鉾（十禅師御鉾）（稲荷町）

概要

差し鉾として神幸列に参加する。『沿革』には、「江戸後期、寛政時代に、禁裡御所御寄附の振鉾を町内預りとして、毎年祭礼に供奉している」（二十三ページ）とある。平成二十二年から差鉾を再開して現在に至っている（前述）。

吹散箱に「禁裏御所御寄附」（蓋表）、剣箱に「明治三十三子年五月」（身・内底）、ほかに箱の墨書として「寛政九巳年 川東／日吉町」などとある。

もとは町内、現在は神社倉庫にて保管する。

鉾祭りの次第

当屋飾りは行なわれていない。祭礼前日の午前、当番地区の役員男性によって、神社境内の倉庫からの部品の取り出し、同じく境内の蔵から棹の取り出し、鉾の仮組み立て、および剣をお祓いする神事が行われる。当日の午前、最終的に「剣鉾会」のメンバーによって組み立てられる。

巡幸行列における位置、鉾差しの実態については先述参照。

第七番鉾（三宮御鉾）（もと五か町：聖真子町・岩滝町・早尾町・波止土濃町・八つ柳町）

概要

巡幸への参加や飾りつけは中止。『沿革』には、「寛政十一年五月、禁裡御所外、各御所より新日吉社に御寄進になった振鉾及び吹散を、上記聖真子町より岩滝町に至る五か町に預けられ、毎年祭礼には之を捧じて輪番で供奉することになった。此の鉾は第七番鉾で、三宮御鉾と称し、菊桐鳳凰の模様の飾金具が附けられている」（三十四ページ）とある。

鍔受に「新日吉大権現」（表）、剣箱に「天保十三壬寅年 五月中旬／町作事 大工利助」（蓋裏）、「早尾町／米屋源兵衛寄附」（身・内底）とある。このほか箱の墨書として「吹散入／七條新地／五町組」などとある。

神社倉庫に梱包保管されている。

（渡部 圭一）

③ その他の鉾

剣鉾ではないが、下京区崇仁地区より新日吉神宮の祭日に曳き出される祭屋台として、船鉾と十二灯がある。同地区では現在、船鉾二基、地元でダンジリと称する十二灯一基を所有しており、現在の新日吉神宮の祭礼日に合わせて、西濱組船鉾と巽組十二灯の二基が崇仁の地域内を巡行する。そのルートは毎年微調整されるが、おおむね午前中にJR東海道線軌道南側の南部地域を巡行し、午後には軌道より北側の北部地域を巡行するというものである。鉾には子供たちが乗り込み、鉾上でお囃子を奏でる。また鉾の周りでは、六斎念仏で使用されていた豆太鼓で拍子を取りながら随行する子供たちの姿もみられる。こうしたにぎやかな巡行は、「崇仁春まつり」として、平成十年に再興されたもので、いわば新日吉神宮の付け祭りといえるものだが、実際のところ、新日吉神宮本体の祭礼行列とは連動していないようにみえる。新日吉神宮の祭礼行列は、先述のように、この日の午後遅くに、「うるおい館」に神輿が到着すると、そこで神事が行われるのみである。「うるおい館」のエントランスには祭壇が設けられており、これを崇仁組受け所という。

巽組十二灯巡行（村上忠喜, 平成17.5.8）

西濱組船鉾巡行（村上忠喜, 平成17.5.8）

さて、これらの祭屋台のうち二基の船鉾は昭和三十年代後半以後、十二灯はアジア太平洋戦争がはじまってから以後中絶していたものであり、現在みられるのは、地元有志が中心となって、かつて使用されていた木彫や金工品などを利用して復原されたものである。復原は段階的に行なわれ、平成十年に西濱組船鉾、続いて巽組十二灯、碇組船鉾の計三基が復原された。

現崇仁地区は、明治二十二年（一八八九）の町村制によりできた柳原町にほぼ該当する。柳原町は、本郷、六条村（七条郷）、水車村（七条裏）、銭座跡村（八条上）、六条村大西組（小稲荷）の五つの集落に分かれていた。本郷以外の四集落はそれぞれ移転により成立したが、その経緯は次のとおりである。

六条村　松原東洞院の集落が、寛文三年（一六六三）六条河原へ移転し、さらに正徳三年（一七一三）に七条以南の高瀬川流域に移転し、六条村となる。

水車村　正徳三年に、南京極町高瀬にあった集落が、七条大橋西南へ移転して水車村となる。

銭座跡村（元銭座村）　享保十六年（一七三一）に、天部・六条両村の申し出により住宅地として開発された。

六条村大西組　天保十四年（一八四三）に天部村によって開発された。

これらの集落の移転を進めた開発は、いずれも妙法院の関与が大きい。妙法院は、新日吉神宮の再建（明暦元年（一六五五）に完成）をはじめ、三十三間堂や方広寺といった近辺の宗教施設の管理を行っていた。そのことからも、崇仁地区の人々は、自らを新日吉神宮の氏子であると自認していたようである。

現在の祭屋台の初発は、提灯台、いわゆる十二灯であったと推測できる。天保十年（一八三九）に、元銭座村および同村南組から妙法院に対して、新たに造った五基の提灯台を新日吉神宮の祭礼当日、村内に限り舁き廻ることについての許可願い

が出されている。それによれば、提灯台はいずれもほぼ似通った形状であったようで、約一メートル四方の台の上におそらく複数の横木のついた柱が立ち、横木には合計十二張の提灯と、四から八個の鈴をつけ、「新日吉」と記された横長の扁額を掲げ、柱の先に花傘や瓢箪、神楽鈴、篭傘といった頂花を飾った（早稲田大学所蔵『方広寺関係文書』）。元銭座村は南北に分かれ、北は中組、東組出村、西組の三組に、南は西組、東組の二組の計五組に分かれていた。この組はおそらく近隣組的なものであったと推測できるが、そのそれぞれが提灯台を出仕したのである。

戦前には、十二灯は巽、夕顔、竹馬の三基と、それ以外に名称不詳のものが一基、計四基あったと伝えられている。復原にあたっては、これら四基の残された部材を利用して、巽組の十二灯一基が復原されたという。

一方、船鉾は、伝承によれば明治初期に作製されたといわれ、実際に船鉾の部材と考えられる金工品に明治前期の銘が入るものがあるものの、定かではない。先述のように船鉾は現在、西濱組船鉾と碇組船鉾の二基存在するが、前者は下之町、後者は西之町の所有であったと伝えられているものの、いつどのように作製され、伝承されてきたかについては明確にし得ないのである。

昭和五十六年（一九八一）に京都市史編さん所が行った聞き取り調査の記録である「崇仁学区座談記録」には、地域の古老の方々の記憶から、その当時まだ復興していなかった崇仁の祭礼について記載されている。それによれば、ダンジリは、下之町西部と車之町にそれぞれ一基、西之町に二基の計四基あったこと。船鉾は十二日に組み立て、十三日が宵宮、十四日が本祭りで、十四日の夜にはお地蔵さんの前で屋台を組み、ロクサイバヤシ（六斎囃子）をしていたこと等が語られ、ダンジリと船鉾は明治後期か大正期頃には、同時に出されていたようである。

碇組船鉾の木組み底部の板材に、大正四年（一九一五）十一月吉日の年号と、「碇組若中」として十九名の人名が墨書されている。この連署が何を意味しているのかは不明であるものの、少なくとも大正四年には「碇組若中」という祭礼組織が存在していたことは確かである。また明らかに西濱組の船鉾の装飾品とわかるものについては、昭和初期のものが多い。船鉾は碇組が先行し、後により大型の西濱組の船鉾が作られたと考えるのが妥当であろう。

船鉾、十二灯とも、崇仁南部地域を中心に出仕されていった可能性が高いものの、伝承母体の変動が激しい上に、祭礼自体がたびたび中絶し、どのように引き継がれてきたのかを復原することは至難である。現存する遺品類も、復原に際して加工して再利用されており、それぞれの時期の復活に際してそれ以前の部材がどう使われていったかが不分明であることも、今となっては祭礼の歴史を知る障害となっている。ただし、装飾品それぞれの造作は、同地区の祭礼に対する強い意識を示す遺品であることに違いはなく、平成十八年に「崇仁船鉾・十二灯装飾品」として、京都市の有形民俗文化財に登録されている。

（村上　忠喜）

④　資料と記録

調査報告・論文・地域誌

藤島益雄著『新日吉神宮略史 ―神殿・社宝・祭礼・行事並に由諸記』（新日吉神宮、一九七二年）
藤島益雄編『新日吉神宮氏子地沿革と古式祭』（新日吉神宮、一九七六年）
福原敏男「近世新日吉社剣鉾祭り ―御所ブランドの飾り―」（『京都市の文化財』第二十三集（同書の翻刻された近世史料に剣鉾関係史料あり））
京都市文化観光局文化財保護課『崇仁地区祭礼調査概要』（一九八四年七月）